

# 共創福祉

2015年 第10巻 第2号

## 【研究報告】

- 松尾 祐子, 荒木 晴美, 牛田 篤  
多職種連携教育の実践と学生の意識変化  
—テキストマイニングを用いた分析から— ..... 1
- 河相 てる美, 中田 智子, 中井 里江  
成人看護学実習におけるICU実習での学生の学びの構造 ..... 9
- 中田 智子, 河相 てる美  
臨地実習指導者からみた手術室実習での学生の学びと要望に関する調査  
—アンケートの調査分析より— ..... 21
- 宮城 和美  
ポートフォリオを用いた実習指導における教員の振り返り  
—教員への語りを分析しての考察— ..... 29

## 【実践報告】

- 小出 えり子, 境 美代子, 河相 てる美  
介護学生が高齢者施設の実習を通して認識した倫理的問題 ..... 41
- 小川 耕平, 和田 貴広  
身体活動量を確保するためのオニゴッコ-第1報- ..... 47

## 第4回共創福祉研究会 (2015.2.28)

- 吉岡 眞知子 (東大阪大学 東大阪大学短期大学部 副学長)  
子育ての意味を考える  
—子育てを通して親も子も育ち合おう— ..... 53

# 多職種連携教育の実践における学生の意識変化 —テキストマイニングを用いた分析から—

松尾 祐子, 荒木 晴美, 牛田 篤

(2015.9.30受稿, 2015.10.30受理)

## 要旨

多職種連携する力を養うために、本学に設置されている社会福祉学科（社会福祉専攻、介護福祉専攻）と看護学科の合同授業を行った。本研究は、合同授業の前後に学生にアンケートを行い、どのような意識変化があったかを明らかにし、多職種連携教育のあり方を考察することを目的とする。

アンケートをテキストマイニングを用い分析した結果、合同授業後のアンケートでは「総抽出語句数」と「異なり語句数」の増加がみられた。これは他の学科専攻の学生とのグループディスカッションにより、新たな用語を学んだ教育効果と考えられる。また、共起ネットワークより、合同授業は「利用者を中心とした支援」、「様々な視点からの支援」、「自分の職種の役割」、「他職種の役割」を学ぶ機会となったと言える。

キーワード：多職種連携教育、退院前カンファレンス、テキストマイニング

## 1. はじめに

高齢者が住み慣れた地域で暮らし続けるために、地域の支援体制として地域包括ケアシステムの構築が必要とされ、福祉・介護・医療の連携が求められている。多くの職能団体では多職種連携をテーマとした研修会や、実際に他職種と合同で行う研修会を実施している。

このように他職種と連携できる専門職の育成が求められる中で、学生時代から学科を超えて多職種連携について学ぶことをカリキュラムに組み込む大学が少しずつ増えている。その方法は様々であり、学科を超えた合同授業を行っている大学や、現場と協力し合同実習を行っている大学もある。

埼玉県立大学では「連携と統合」を教育理念として、5学科（看護学科、社会福祉学科、理学療法学科、作業療法学科、他学科医学部）合同で、実習も含めた「インタープロフェショナル演習（IP演習）」を行っている。富山県内においては、2014年より富山大学医学部を中心に県内の理学・作業療法学科、看護学科、社会福祉学科との多職種連携教育の活動が開始されている。

本学においては、設置されている社会福祉学科（社会福祉専攻、介護福祉専攻）と看護学科のカリキュラムの中で、多職種との連携の必要性を学んでいたが、実際に他の学科専攻の学生と、事例を通して学ぶ機会はなかった。そこでこの2つの学科が設置されているメリットを活かして、多職

種連携する力を養うために社会福祉学科と看護学科の演習形式の合同授業を行った。

## 2. 研究目的

社会福祉学科と看護学科の2年生が、退院前カンファレンスをテーマとした合同授業を体験して、どのような意識変化があったかを明らかにし、多職種連携教育のあり方を考察することを目的とする。

## 3. 研究方法

- (1) 対象者：富山福祉短期大学 2年生 154名  
(社会福祉専攻30名、介護福祉専攻47名、看護学科77名)
- (2) 調査期間：2014年7月
- (3) 合同授業の概要

社会福祉学科と看護学科の2年生に、多職種連携を必要とする事例について、それぞれの専門職の視点から支援を考える合同授業を行った。事例は、退院後に介護サービスや訪問看護等を必要とする高齢者の事例を用いた。

### ①事前学習 180分（90分授業を2コマ）

合同授業の前に、それぞれの学科専攻内で多職種連携に関する事前学習を行った。資料は統一し、退院前カンファレンスが予定されている高齢者の「事例の概要」「基本情報」「認定調査の概要」「主治医の意見書」と共通のワークシートを配布した。学生はワーク

シートに沿ってそれぞれの専門職の立場から、在宅での生活に必要とされる支援について考えて、合同授業に臨んだ。

②合同授業 180分(90分授業を2コマ連続)

グループワーク形式の演習授業を行った。1グループは本人、家族、訪問介護員、訪問看護師、デイサービス職員、医師、看護師長、担当看護師、医療ソーシャルワーカー、ケアマネジャーの10種の専門職を設定した。1コマ目はワークシートに沿ってグループディスカッション、2コマ目に退院前カンファレンスのロールプレイを行った。

(4) アンケートの実施方法

事前学習後と合同授業後の2回、授業を通しての「学び」「気づき」を具体的に3つ以上記入する自由記述のアンケートを実施した。

(5) 分析方法

アンケートは学科専攻ごとにテキストマイニングを用いて、使用された語句、出現回数の多い語句を抽出し、事前学習後と合同授業後の2つのアンケートを比較した。また、使用された語句の共起の関係をネットワーク図として表し、学生の意識の変化や教育効果を考察した。自由記述アンケートの分析にはフリーソフトウェア KH Coder を用いた(樋口, 2012)。

(6) 倫理的配慮

研究の同意を得る際には口頭と文書にて、研究の主旨と内容および自由性、匿名性の保持、成績に影響しないことを説明し同意を得た。本研究は所属機関の倫理委員会の承認を得て実施した。(H26-005号)

## 4. 結果

事前学習後と合同授業後のアンケートは、学科専攻(社会福祉専攻、介護福祉専攻、看護学科)ごとに分析を行った。図1~6の共起ネットワーク図では、抽出された語と語の共起関係を線の太さで、出現数の多さを円の大きさ、中心性を色の濃さで示している。社会福祉専攻、介護福祉専攻、看護学科の順に以下に結果を示す。

### 4.1 社会福祉専攻(表1)

①30名の学生データを得た。総抽出語数(使用)は、事前学習後1952(828)であり、合同授業後2593(1058)で、異なり語数(使用)は、事前学習後374(288)であり、合同授業後は498(370)であった。合同授業後の総抽出語句数と異なり語句数は、合同授業後に増加がみ

られた。

②アンケートの中で頻回に出現した語句は、事前学習後では、学ぶ(31)、大切(29)、利用者(19)、思う(18)、専門職(17)、役割(17)などが抽出された。上位20語を、表2に示す。合同授業後では、学ぶ(46)、利用者(26)、役割(16)、大切(14)、知る(14)、連携(14)であった。上位20語を、表3に示す。

③共起ネットワーク(図1、図2)

事前学習後のアンケートでは、「MSW」、「役割」、「理解」、「連携」、「学ぶ」や「サービス」、「大切」、その他には「情報」、「必要」に共起性がみられた。合同授業後では「他職種」、「連携」や「自分」、「役割」、「知識」と「利用者」、「支援」に共起性が強くみられた。

### 4.2 介護福祉専攻(表4)

①47名の学生データを得た。総抽出語数(使用)は、事前学習後4032(1573)であり、合同授業後6230(2436)で、異なり語数(使用)は、事前学習後462(344)であり、合同授業後は771(587)であった。合同授業後の総抽出語句数と異なり語句数は、合同授業後に増加がみられた。

②アンケートの中で頻回に出現した語句は、事前学習後では、利用者(51)、学ぶ(47)、情報(44)、気づ(40)、分かる(30)、考える(29)などが抽出された。上位20語を、表5に示す。合同授業後では、学ぶ(79)、大切(55)、利用者(41)、気づ(34)、本人(33)、思う(30)であった。上位20語を、表6に示す。

③共起ネットワーク(図3、図4)

事前学習後のアンケートでは、「利用者」、「ニーズ」、「考える」、「支援」と「情報」、「不足」に共起性がみられた。合同授業後のアンケートでは、「本人」、「利用者」を中心に「夫」、「家族」、「医療」、「看護」、「介護」に強い共起性がみられた。

### 4.3 看護学科(表7)

①77名の学生データを得た。総抽出語数(使用)は、事前学習後12682(5168)であり、合同授業後18257(7336)で、異なり語数(使用)は、事前学習後945(748)であり、合同授業後は1309(1039)であった。合同授業後の総抽出語句数と異なり語句数は、合同授業後に増加がみられた。

表 1 合同授業前後の総抽出語句と異なり語句

	事前学習後	合同授業後
総抽出語句 (使用)	1952 (828)	2593 (1058)
異なり語句 (使用)	374 (288)	498 (370)

表 2 事前学習後の抽出語句の出現回数

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
学ぶ	31	必要	13
大切	29	知識	12
利用者	19	分かる	12
思う	18	他職種	11
専門職	17	知る	11
役割	17	感じる	10
自分	16	考える	10
連携	15	視点	9
支援	14	それぞれ	8
出来る	13	理解	8

表 3 合同授業後の抽出語句の出現回数

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
学ぶ	46	情報	11
利用者	26	ケアマネ	9
役割	16	医療	9
大切	14	気づ	9
知る	14	考える	9
連携	14	思う	8
サービス	13	把握	8
支援	13	分かる	8
必要	12	ニーズ	7
理解	12	行う	7

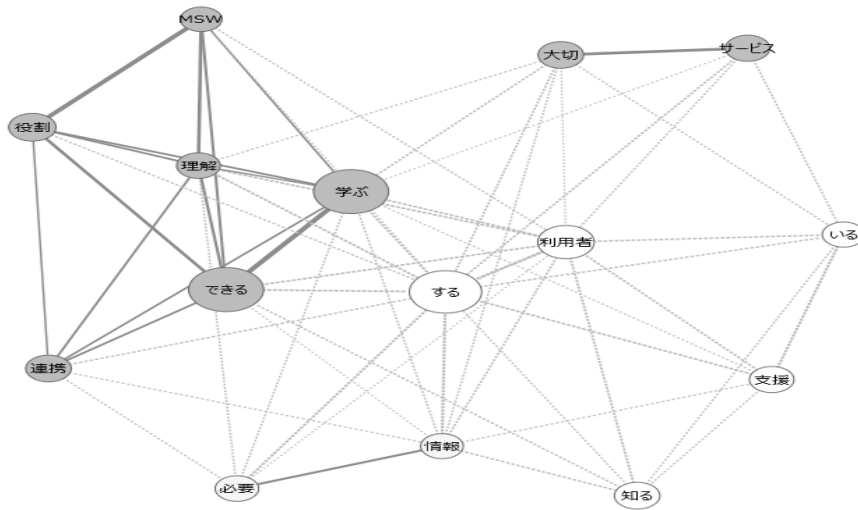


図 1 事前学習後共起ネットワーク (社会福祉専攻)

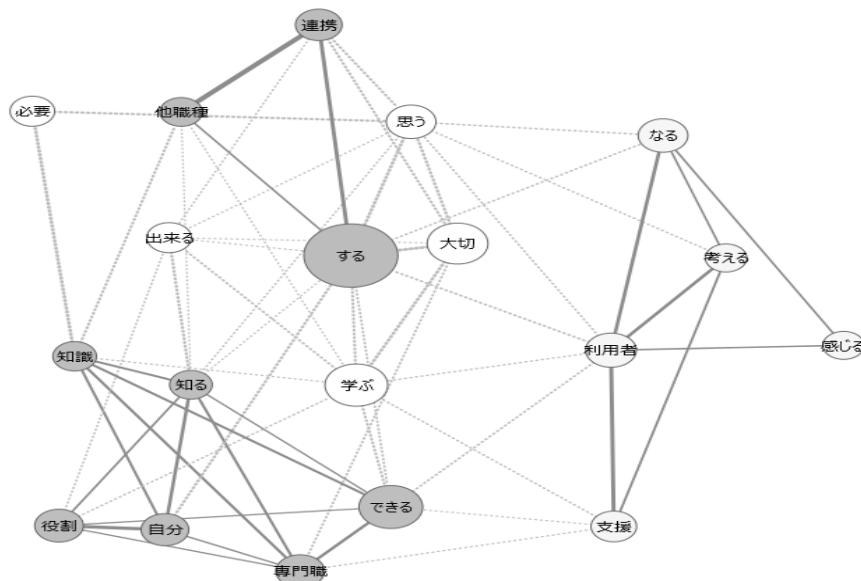


図 2 合同授業後共起ネットワーク (社会福祉専攻)

表4 合同授業前後の総抽出語句と異なり語句

	事前学習後	合同授業後
総抽出語句 (使用)	4032 (1573)	6230 (2436)
異なり語句 (使用)	462 (344)	771 (587)

表5 事前学習後の抽出語句の出現回数

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
利用者	51	職種	19
学ぶ	47	知る	19
情報	44	不足	19
気づ	40	理解	17
分かる	30	必要	16
考える	29	意見	14
大切	29	支援	14
ニーズ	28	多い	14
自分	25	行う	13
聞く	21	思う	12

表6 合同授業後の抽出語句の出現回数

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
学ぶ	79	介護	24
大切	55	意見	22
利用者	41	考える	22
気づ	34	連携	22
本人	33	一二三	20
思う	30	自分	20
知る	30	人	20
不安	26	感じる	19
分かる	25	職種	19
カンファレンス	24	知識	19

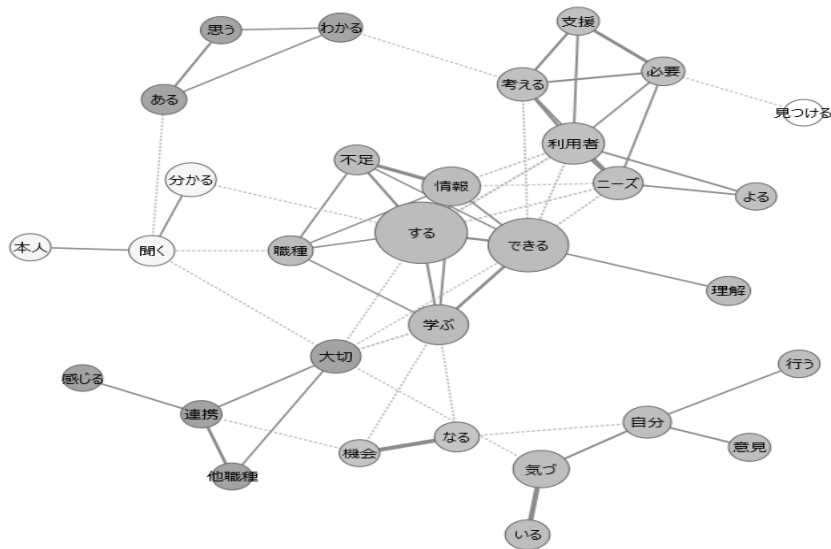


図3 事前学習後共起ネットワーク (介護福祉専攻)

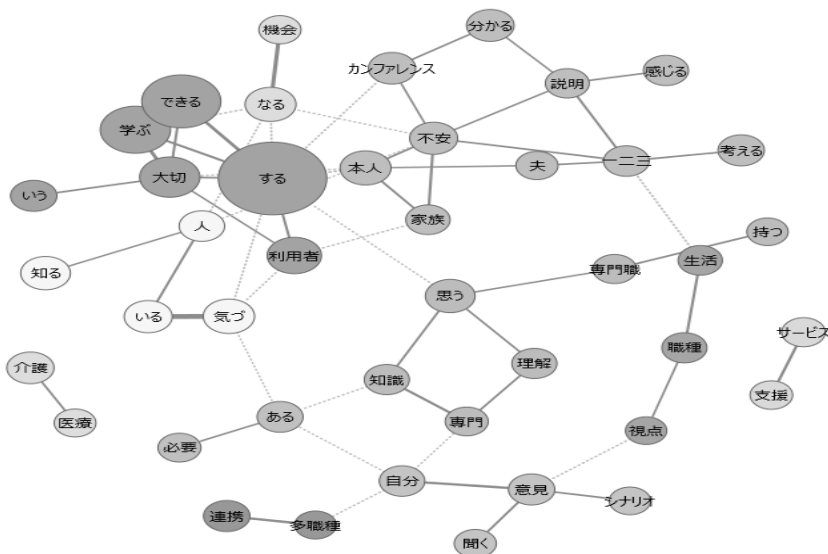


図4 合同授業後共起ネットワーク (介護福祉専攻)

表 7 合同授業前後の総抽出語句と異なり語句

	事前学習後	合同授業後
総抽出語句 (使用)	12682 (5168)	18257 (7336)
異なり語句 (使用)	945 (748)	1309 (1039)

表 8 事前学習後の抽出語句の出現回数

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
患者	193	自分	59
学ぶ	153	在宅	56
考える	123	看護師	54
役割	74	生活	53
必要	72	職種	51
知る	69	人	48
情報	64	気づ	44
大切	62	退院	41
サービス	60	分かる	41
思う	60	行う	39

表 9 合同授業後の抽出語句の出現回数

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
患者	332	必要	69
学ぶ	156	カンファレンス	62
大切	146	人	60
思う	121	自分	59
不安	89	連携	55
考える	87	感じる	54
気づ	82	説明	54
家族	79	医療	50
行う	79	職種	50
生活	76	他職種	49

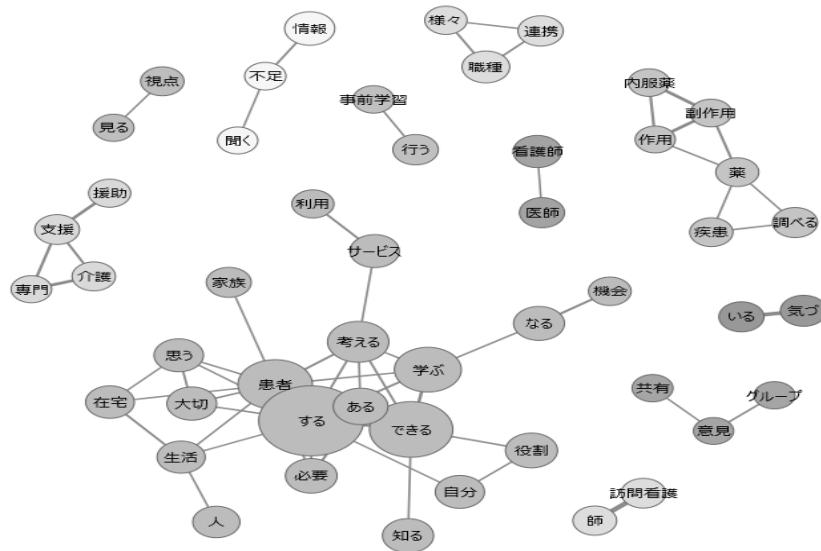


図 5 事前学習後共起ネットワーク (看護学科)

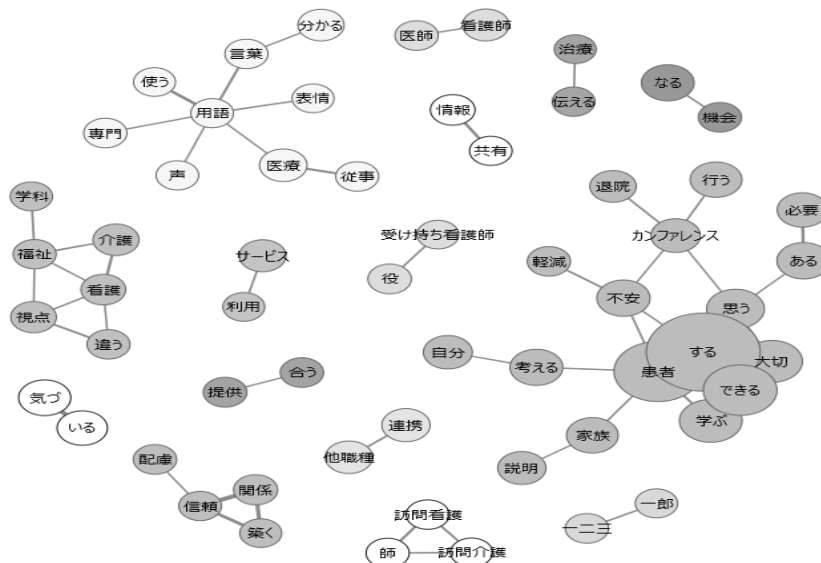


図 6 合同授業後共起ネットワーク (看護学科)

②アンケートの中で頻回に出現した語句は、事前学習後では、患者 (193)、学ぶ (153)、考える (123)、役割 (74)、必要 (72)、知る (69) などが抽出された。上位 20 語を、表 8 に示す。合同授業後では、患者 (332)、学ぶ (156)、大切 (146)、思う (121)、不安 (89)、考える (87) であった。上位 20 語を、表 9 に示す。

③共起ネットワーク分析 (図 5、図 6)

事前学習後のアンケートでは、「患者」、「家族」、「大切」、「考える」と「内服薬」、「副作用」、「薬」に共起性がみられた。合同授業後のアンケートでは「患者」、「学ぶ」、「大切」、「不安」、「思う」と「看護」、「介護」、「福祉」、「視点」、「違う」と「用語」、「言葉」、「医療」、「専門」が共起していた。

## 5. 考察

3つの学科専攻において、事前学習後のアンケートと比較し、合同授業後のアンケートの総抽出語数、異なり語数の増加がみられた。これは合同授業で他の学科専攻の学生と、事例についてディスカッションする中で、新たな用語を学んだ教育効果と考えられる。

共起ネットワークより、社会福祉専攻の学生は合同授業を通して、他職種の役割や連携、自分の役割を具体的に学び、利用者を様々な視点で捉えた支援を学ぶ機会となったと考えられる。介護福祉専攻の学生は「利用者」を中心とした「家族」、「医療」、「看護」、「介護」との「連携」に対する深い学びになったと言える。また抽出語の変化から「役割」についての学びがあったと言える。看護学科の学生は、患者を中心に深く考えるようになり、退院前カンファレンスをテーマとした合同授業を通して、各専門職の視点の違い、それぞれの専門職の役割を学ぶ機会と考えられる。

3つの学科専攻に共通して、具体的な事例を通して話し合うことにより、「利用者を中心とした支援」、「様々な視点からの支援」、「自分の職種の役割」、「他職種の役割」を学ぶ機会となったと言える。

実践力を高めるためには、事例を通しての学びは欠かせない。今回のように事例についてそれぞれの視点からの支援について話し合い、退院前カンファレンスのロールプレイをすることで、多職種が連携して支援する意義を体験的に学んだと考えられる。野中 (2014) は「多職種で支援するためにはケア会議 (カンファレンス) は欠かせない」と述べている。また、このように実際に他学

科専攻の学生と、顔を合わせて演習形式の授業を行うことで、学習意欲や自分の役割意識の向上につながったと思われる。

特に社会福祉専攻の学生においては、その業務として「福祉サービスを提供する者又は医師その他の保健医療サービスを提供する者、その関係者との連携及びその調整その他の援助を行うこと」とされている。そのため養成課程の中で他職種との連携の必要性が強調されている。しかし実際に授業の中だけで、連携の技術を身につけることは難しく、このような他学科の学生との演習形式の授業は、連携力を高める貴重な機会である。

そしてアンケートには学科により用いる語句の違いもみられた。社会福祉学科の学生は「利用者」という語を用い、看護学科の学生は「患者」という語を用いていた。このような言葉の違いに触れることが、お互いの職種の特徴や役割の違いを認識する機会となるのではないだろうか。専門職の養成校のカリキュラムには、多職種連携を体系的に学ぶ余裕がない状況であるが、他学科の学生と一緒にグループワークをすることは、自分の職種の専門性を見つめ直し、他の専門職と連携する基礎を作る機会になると思われる。今後は合同授業の中に、地域で実際に多職種連携を行っている専門職の方に参加してもらうことで、より実践的な授業ができるものとする。

## 6. おわりに

本研究では、社会福祉学科と看護学科の多職種連携授業でのグループディスカッションを通して、新たな用語を学び、それを自分の言葉として用いたことが明らかになった。また、具体的な事例を通して考えることにより、利用者を中心に様々な視点からの支援を考え、自分と他職種の役割を学ぶ機会になったと言える。

本稿は合同授業の前後のアンケートの意識変化から、授業のあり方を考察したものである。教育効果は実際に働いてから現れるものもあるため、多職種連携授業の効果については、卒業生も含めた調査研究が必要である。

## 参考文献

- 1) 大塚真理子、朝日雅也「埼玉大学における IPE の歩み (解説)」『保健医療福祉連携』4 (2) (2012)
- 2) 埼玉県立大学『IPW を学ぶ - 利用者中心の保健医療福祉連携』(2014)
- 3) 野中猛『多職種連携の技術』中央法規

(2014) P91

- 4) 後藤道子他「本邦における大学・専門職養成校の多職種連携教育カリキュラムに関する現状調査」『保健医療福祉連携』8(1)(2015)
- 5) 樋口耕一「10. 社会調査におけるテキスト分析の手順と実際ーアンケートの自由回答を中心にー」『コーパスとテキストマイニング』(2012)
- 6) 大塚真理子他「JAIPE IPE 推進委員会の活動と展望」『保健医療福祉連携』8巻1号(2015)
- 7) 三重大学大学院医学系研究科家庭医療学「チャレンジ多職種連携(在宅・地域版)」(多職種連携担当)(2015)



# Change of college students' consciousness in inter-profession education practice – The analysis using text-mining method –

YUKO MATSUO<sup>1)</sup> , HARUMI ARAKI<sup>2)</sup> , ATSUSHI USHIDA<sup>1)</sup>

*1)Department of Social Welfare, Toyama college of Welfare science*

*2)Department of Nursing, Toyama college of Welfare science*

## Abstract

In order to cultivate collaborative practice, the college students of social worker, care worker and nurse learned together and discussed in a small group. This study aims to elucidate change of students' consciousness and analyze their questionnaires before and after the class, and consider teaching method of inter-profession education.

As the result of analysis using the text-mining method, the total extraction phrase number and the total different extraction phrase number increased after the class. It seemed that the educational effect was based on learning new vocabularies from their group discussion with other department students. Word network analysis also shows that the class provides opportunity to learn the following, “person-centered health and social care”, “support from various points of view”, “roles of their profession ” and “roles of other profession”

Keywords : inter-profession education, conference before discharge, text-mining method

# 成人看護学実習におけるICU実習での学生の学びの構造

河相 てる美, 中田 智子, 中井 里江

富山福祉短期大学看護学科

(2015.9.30受稿, 2015.10.30受理)

## 要旨

本研究は、ICU実習における学生の学びを明らかにし、今後のICU実習の指導の示唆を得ることを目的とする。同意の得られた学生26名の実習記録をKJ法により構造化した。その結果、【準備万端】、【徹底した医療安全対策】、【卓越した看護】、【命を守る知恵袋】を形成した。

ICU実習の指導のあり方として、実習目標と実習の進め方について臨床現場と連携することにより、学生がICU看護師の役割を知り、クリティカルケア看護について理解が深まるような実習支援が大切となることが示唆された。

キーワード：ICU実習、実習記録、看護学生、KJ法

## 1. はじめに

成人看護学(急性期)の授業は、「成人期にある社会的役割を担い、自立・自律し、基本的にはセルフマネジメント、意思決定ができる人の急な病気・外傷・手術に伴う人間の心理的ストレスや生体侵襲などによる心身反応を理解し、個人の尊厳に配慮しながら根拠に基づいた看護を提供できる知識・技術・態度の育成を目指す。」ことを学習教育目標としている。そこで、成人看護学実習(急性期)では、手術前の患者を受け持ち、術前・術中・術後の3つの異なった時期の患者に関わり、手術を受ける患者の回復過程を体験できるようにしていた。しかし、在院日数の短縮化に伴い、実習期間内に手術前の患者を受け持ち、術直後の看護の体験をし、一連の回復過程を実習することが困難となった。

平成23年2月に厚生労働省は看護教育の内容と方法に関する検討会報告書を公表した。その中で、看護基礎教育における効果的な教育方法、講義・演習・実習の組み立て方として、卒業時の到達目標を達成するための臨地実習のあり方について、「看護の領域毎に看護過程を中心に行う臨地実習が効果的であるかどうか検討が必要であり、柔軟に実習の場を開発し、実践的な教育を行うことが望まれる」と述べられている(厚生労働省2011)。このような要請に対応すべく、A短期大学看護学科では平成24年度より成人看護学実習(急性期)4週間のうちICU実習を1週間実施している。その理由として、周手術期の看護において、手術侵襲による生体反応を実習体験により学

ぶことは、周手術期の患者の特徴を理解するために重要である。さらに、ICUでの患者との関わりやICU看護の技術を体験できる実習環境を提供することにより、成人看護学実習(急性期)の充実が図れると考えられたからである。

このような成人看護学実習(急性期)において、ICU実習における学びの報告について、ICU見学実習における学びは散見される(白神ら2011; 園田ら2009; 宮嶋ら2013)が、1週間ICU実習を実施した実習の学びについての報告は少ない(佐藤ら2004)。

## 2. 研究目的

A短期大学看護学科では成人看護学実習(急性期)4週間のうちICU実習を1週間実施している。そこで、本研究はICU実習における学生の記録を分析し、ICU実習での学生の学びを明らかにし、今後のICU実習の指導の示唆を得ることを目的とする。

なお、ICU実習の記録の中に「ICU実習を終えての学び」の欄が設けられている。ここには学生が初めてICU実習を体験し、患者と看護師に接する中で得られた学びが表現されていると考えられる。よって本研究では、実習記録の「ICU実習を終えての学び」の欄を分析対象として用いる。

## 3. 研究方法

### 3.1 対象

本研究の趣旨に同意・協力を得たA短期大学

看護学科（3年課程）3年次生 26名

### 3.2 研究期間

2013年10月（実習記録提出日）～2014年1月（分析終了日）

### 3.3 研究デザイン

KJ法（川喜多2004）による質的記述的研究

実習記録の「ICU実習を終えての学び」の記載内容よりラベルを作成し、著者らで討議し、合意形成を行いながら集約を繰り返した。その際に、川喜田研究所から賛助会員としてKJ法の使用許諾を得ている専門家のスーパーバイズを受けた。

### 3.4 倫理的配慮

実習記録提出後、対象者に口頭にて研究の趣旨、目的や対象者の権利、匿名性の保持、研究の参加の有無にかかわらず成績には影響しないことを説明し、研究への参加と結果の公表について書面で同意を得た。また本研究は、所属機関の倫理委員会の承諾を得た。（H24-004号）

## 4. ICU実習の概要

成人看護学実習（急性期）4週間のうちICU実習を1週間実施している。実習はICUオリエンテーション、ICU看護体験、ICUカンファレンス、学内実習で構成される。事前学習課題として、ICU実習目標の内容を調べた上で実習に臨むようにしている。

ICU実習の学習目標を以下に示す。

- ① ICUの構造・設備・システムを説明することができる。
- ② ICUにおける呼吸管理、循環管理、栄養・代謝管理について説明することができる。
- ③ ICUにおける清潔援助、体位変換、疼痛緩和について説明することができる。
- ④ ICUにおける感染予防管理について説明することができる。
- ⑤ ICUにおける安全管理について説明することができる。
- ⑥ ICUにおける倫理的配慮について説明することができる。
- ⑦ ICUで使用している医療機器の目的を調べ学習することができる。
- ⑧ ICUで行われた検査・処置の目的を調べ学習することができる。
- ⑨ ICUへの申し送り、病棟への申し送りから、連携の工夫に気づくことができる。

## 5. 結果

実習記録のICU実習を終えての学びの記載内容から148のラベルを作成し、多段ピックアップによって、選出された45のラベルを元ラベルとした。意味内容の類似性により集約を繰り返した結果、1段階は20、2段階で7、最終的には4つの島（準備万端、徹底した医療安全対策、卓越した看護、命を守る知識袋）が形成された。

なお、〔 〕は元ラベル、〈 〉は1段目の表札、[ ]は2段目の表札、【 】は3段目の表札を表す。また各島のシンボルマークを（ ）で

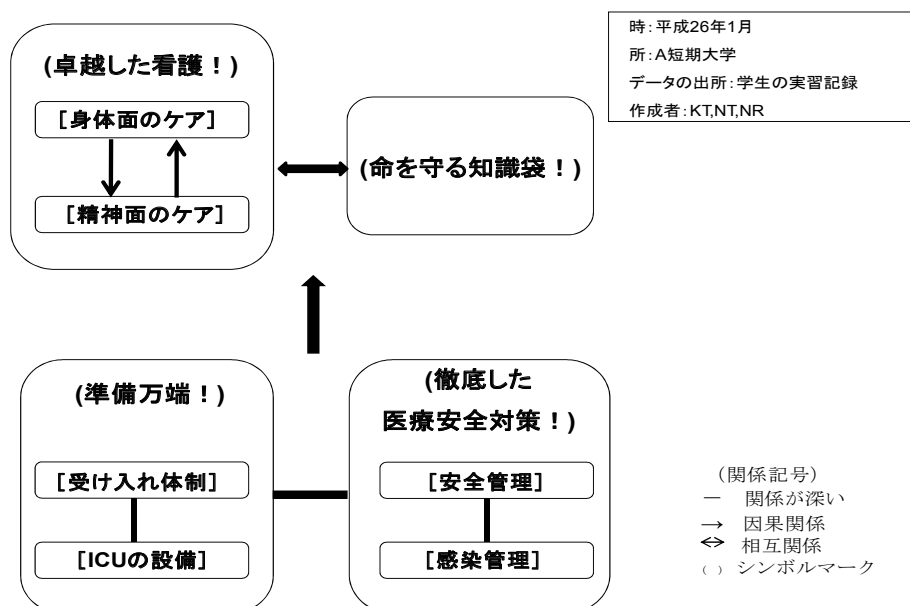


図1 ICU実習での学びの構造

表 1 実習記録を通してICU実習における学生の学び

ラベル (45)	1段階目表札 (20)	2段階目表札 (7)	3段階目表札 (4)
ICUはオープンフロアで急変時に迅速に対応できるようになっている	オープンフロアの構造は周囲が見渡せ迅速に対応できる	他職種連携による緊急患者の治療環境が整っている	ICUは緊急患者を受け入れる体制が整っている(準備万端!)
ICU看護師はオープンフロアで常に周りを見渡している	患者のプライバシーに配慮した個人の空間を作る工夫がある		
ICUは治療を優先した特殊な環境であるが患者の日常生活に近づける心遣いがある	看護師間の協力および医療従事者同士強く連携している		
オープンフロアでも患者のプライバシーに配慮しカーテンやスクリーンで個人の空間を作っている	緊急時に備えた医療機器や薬剤の点検をしている	緊急時に備えた点検や体制を整えている	生命の危機的状態にある患者を守る対策が徹底している(徹底した医療安全対策!)
一括の空調ではなく個別の管理ができるよう工夫されている	緊急時に備えた管理体制ができている		
ICUでは看護師同士の報告・連絡・相談が密に行われ協力し合っている	処置を行うときはルートトラブルを予防するために注意している		
ICUでは医師・臨床検査技師など他職種や病棟看護師・手術室看護師が患者の情報交換をしている	安全を期するため輸液ポンプに頼らず人の目による確認をしている	生命の危機に大きく関わるトラブル予防対策が入念に行われている	生命の危機的状態にある患者を守る対策が徹底している(徹底した医療安全対策!)
人工呼吸器や除細動器などは充電状態となっていて、すぐに使えるように準備されている	患者の安全を守るための情報交換やチェック機能ができています		
緊急時に備え救急カートの薬剤の点検が毎日行われている	感染予防のため標準予防策に沿って実施している		
すべてのベッドにモニターが設置され異常時にアラームがなるようになっている	感染予防のため環境を整えている	標準予防策を遵守した感染対策が徹底している	卓越した看護が重症患者を支えている(卓越した看護!)
緊急時に対応できるように空ベッドが確保されている	重症患者に対する状況に応じた援助を行っている		
ベッドサイドには非常用電源が設置されていて、停電の際に対応できるようになっている	薬物療法やケアの工夫による疼痛緩和をしている		
ルートトラブルを防ぐためには常に注意し観察している	体位の工夫や皮膚を保護し褥瘡の発生を予防している	患者の状態に応じた看護技術が患者の安全安楽を支えている	卓越した看護が重症患者を支えている(卓越した看護!)
清潔や体位変換を行う時は点滴ルートやドレーンが外れないように配慮している	患者の精神面に寄り添う看護が患者の回復につながる		
輸液ポンプを使用しているも、必ず人の目で確認して安全な輸液の管理を行っている	意識のない患者に対しても声かけや気配りを行っている		
自動輸液ポンプは一定の速度で輸液を行う場合に使用するが、間違えた薬液の投与や過剰過小投与は患者の生命の危機に大きく関わる	患者の家族に対しても精神的ケアを行っている	患者や家族の意思を尊重することを大事にしている	卓越した看護が重症患者を支えている(卓越した看護!)
転倒転落の可能性がある患者や点滴ルートの交換日を書いたシールを貼ることで誰が見てもわかるように工夫されている	生命を守るための身体拘束でも必ず患者や家族の同意を得る		
薬の確認は必ず二人で行い患者と薬品が正しいかバーコードやパソコンでチェックし患者本人にも名前を言ってもらっている	ICU看護師は様々な病態を理解し緊急時冷静に対応している		
感染症患者の援助では、手袋・ゴーグル・ガウンを着用し看護師自身が身を守ることや媒体になることを防いでいる	ICU看護師は様々な病態を理解し緊急時冷静に対応している	ICU看護師は患者の生命を守ることに精通している(命を守る知恵袋!)	卓越した看護が重症患者を支えている(卓越した看護!)
患者の体液や排泄物に触れる場合は手袋やエプロンを装着し標準予防策に沿った感染予防がされている	患者の生命を守るために医療器械に関する知識を習得している		
医療者自身が感染源にならないように、一行為一手洗いが行われている	異常の早期発見を行うために患者やモニターを継続的に観察している		
陰圧になっている部屋が1室あり感染症患者の対応ができるようになっている			
面会者の入室時は手洗いとマスクをしており外部からの感染を防いでいる			
環境整備を毎日欠かさず行うことで感染源の予防につながる			
ボディメカニクスをうまく使うことで看護者の作業のしやすさや腰痛を予防することも大切である			
重症患者や人工呼吸器装着患者に負担をかけないように手際のよい援助技術が必要である			
人工呼吸器使用の患者は口腔内が乾燥し唾液の自浄作用が低下するため口腔ケアは重要である			
疼痛緩和のために足浴や温罌法を行っている			
薬物療法による疼痛の緩和は重要であり早期離床にもつながる			
褥創リスクの高い患者には体圧分散用クッションやマットを使用し安楽な体位を保持できる工夫が大切である			
全身清拭時に皮膚を観察し発赤があった場合は保護シートをはって褥瘡の発生を予防する			
人工呼吸器を装着している患者には非言語的コミュニケーションにて患者の思いを確認する			
患者が積極的に治療に関わっていけるよう精神的な援助を行うことは回復につながる			
話すことができない患者や意識レベルが低下している患者に声かけをしながらケアを実施し、表情やしぐさから反応を観察する			
麻痺のある患者の清潔援助・寝衣交換を行うときは、患者は痛みが分からないため看護師は特に注意して行う			
面会の家族に対して椅子を準備し、患者と家族の時間を大切にしている			
患者の家族に分かりやすく簡潔に説明し、家族に対しての精神的ケアを行っている			
生命に関わるため身体拘束は必要であるが看護師や家族が傍にいる時は外して患者の安全面に考慮しながら見守っている			
チューブ類を自己抜去する危険があるため抑制道具で拘束する必要性について患者や家族に説明し必ず同意を得る			
ICU看護師は様々な科の患者の病態を把握している			
ICU看護師は緊急入院の患者に対して、冷静に処置を行い対応している			
医療機器が確実に作動しているかチェックすることはICU看護を行う上で重要な看護の一つである			
ICUには多くの種類の医療器械があり、看護師は操作方法を把握している			
ベッドサイドモニターを常に観察しながら患者に直接触れて観察し異常の早期発見に努めている			
時間を決めて継続的に観察することで変化に気づくことができる			

表す。

4つの島の内容は、①【ICUは緊急患者の受け入れる体制が整っている（準備万端！）】、②【生命の危機的状態にある患者を守る対策が徹底している（徹底した医療安全対策！）】、③【卓越した看護が重症患者と家族を支えている（卓越した看護！）】、④【ICU看護師は患者の生命を守ることに精通している（命を守る知恵袋！）】であり、詳細な内容を表1に示す。

「ICU実習における学生の学び」を図解化したものを図1に示す。図1を叙述化し、以下に島の関係性を示す。

下の二つの島（準備万端！）と（徹底した医療安全対策！）が深く関係しあい、この二つの島が根底にあって、下から上につながっていく。〔他職種連携による緊急患者の治療環境が整っている〕と〔緊急時に備えた点検や体制を整えている〕ことから、【ICUは緊急患者の受け入れる体制が整っている（準備万端！）】とICUの構造や設備についての特殊性や、緊急患者に対する医療従事者間の連携の重要性を学んでいる。さらに、〔生命の危機に大きく関わるトラブル予防対策が入念に行われている〕、〔標準予防策を遵守した感染対策が徹底している〕と【生命の危機的状態にある患者を守る対策が徹底している（徹底した医療安全対策！）】が実施されていることを学んでいる。この二つの島を根底として、さらに、〔患者の状態に応じた卓越した看護技術が患者の安全安楽を支えている〕、〔患者や家族の意思を尊重することを大事にしている〕とICU看護師の【卓越した看護が重症患者と家族を支えている（卓越した看護！）】こと、そして、【ICU看護師は患者の生命を守るために精通している（命を守る知恵袋！）】とICU看護師の専門的な看護技術と豊富な知識の二つの島が深く関係して、ICUの看護が行われていることを学生は学んでいると考えられる。

以下、4つ島の内容について述べる。

### 5.1 【ICUは緊急患者の受け入れる体制が整っている（準備万端！）】（図2）

この島は〔他職種連携による緊急患者の治療環境が整っている〕と〔緊急時に備えた点検や体制を整えている〕から成り立っている。

〔他職種連携による緊急患者の治療環境が整っている〕の中には、〈オープンフロアの構造は周囲が見渡せ迅速に対応できる〉、〈患者のプライバシーに配慮した個人の空間を作る工夫がある〉お

よび〈看護師間の協力および医療従事者同士強く連携している〉が含まれている。

〈オープンフロアの構造は周囲が見渡せ迅速に対応できる〉は、〔ICUはオープンフロアで急変時に迅速に対応できるようになっている〕と〔ICUはオープンフロアで看護師は常に周りを見渡している〕から成り立っている。

〈患者のプライバシーに配慮した個人の空間を作る工夫がある〉は、〔ICUは治療を優先した特殊な環境であるが患者の日常生活に近づける心遣いがある〕、〔オープンフロアでも患者のプライバシーに配慮しカーテンやスクリーンで個人の空間を作っている〕および〔一括の空調ではなく個別の管理ができるよう工夫されている〕から成り立っている。

〈看護師間の協力および医療従事者同士強く連携している〉は、〔ICUでは看護師同士の報告・連絡・相談が密に行われ協力し合っている〕と〔ICUでは医師・臨床検査技師など他職種や病棟看護師・手術室看護師が患者の情報交換をしている〕から成り立っている。

〔緊急時に備えた点検や体制を整えている〕の中には、〈緊急時に備えた医療機器や薬剤の点検をしている〉と〈緊急時に備えた管理体制ができてい

る〉が含まれている。〈緊急時に備えた医療機器や薬剤の点検をしている〉は、〔人工呼吸器や除細動器などは充電状態となっていて、すぐに使えるように準備されている〕と〔緊急時に備え救急カートの薬剤の点検が毎日行われている〕から成り立っている。

〈緊急時に備えた管理体制ができてい

### 5.2 【生命の危機的状態にある患者を守る対策が徹底している（徹底した医療安全対策！）】（図3）

この島は〔生命の危機に大きく関わるトラブル予防対策が入念に行われている〕と〔標準予防策を遵守した感染対策が徹底している〕から成り立っている。

〔生命の危機に大きく関わるトラブル予防対策が入念に行われている〕の中には、〈処置を行うときはルートトラブルを予防するために注意して

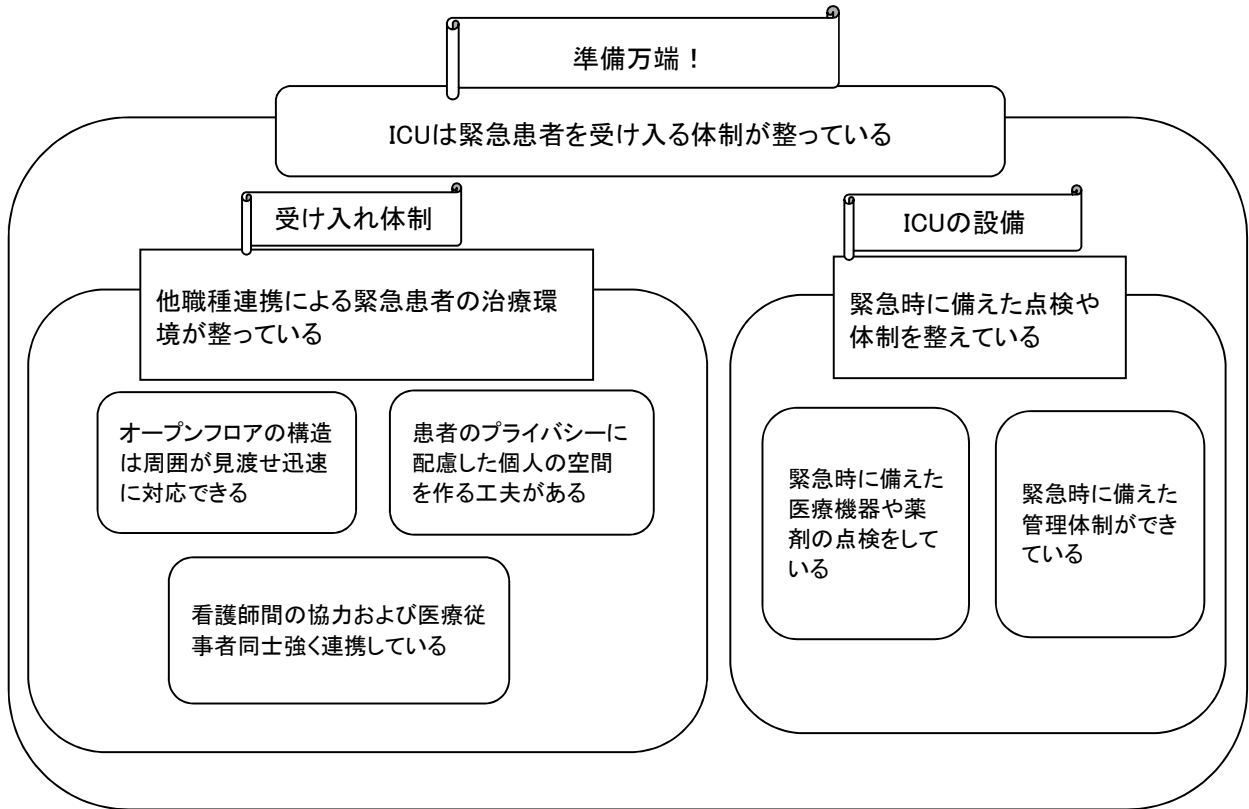


図2 準備万端！

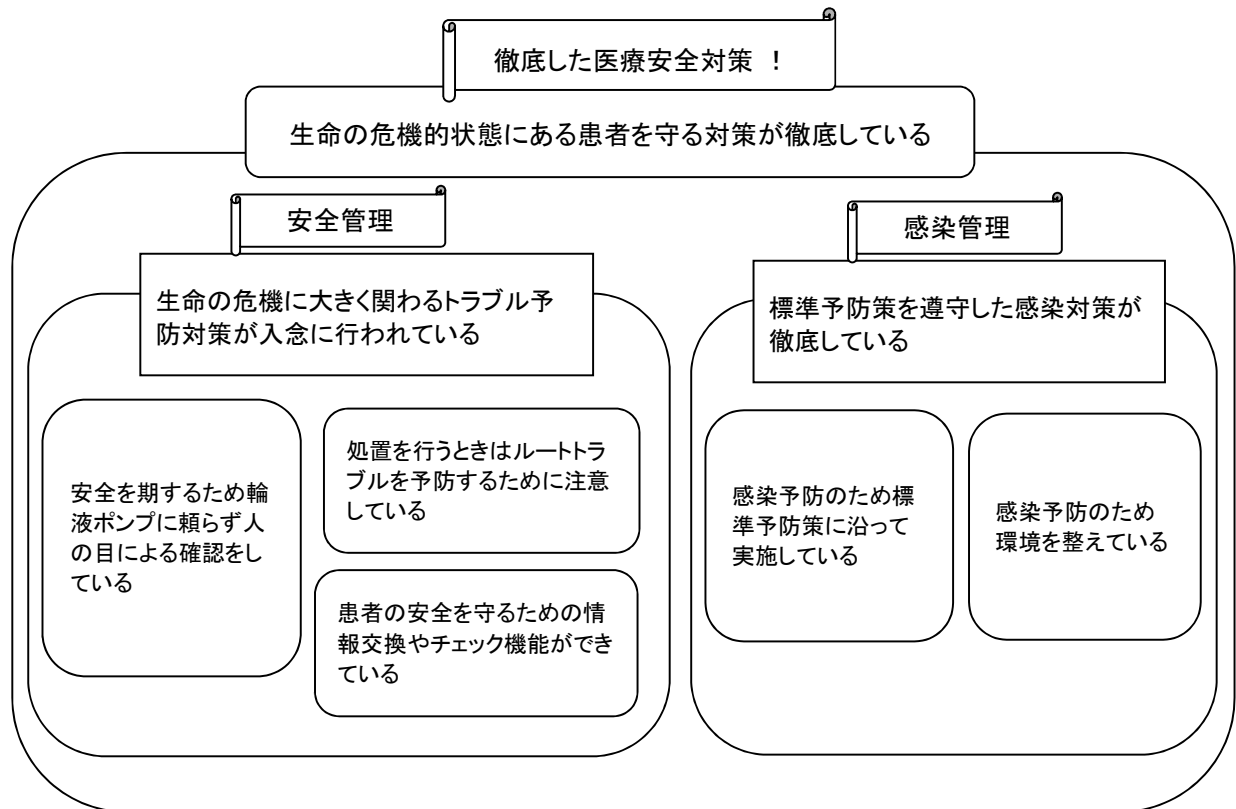


図3 徹底した医療安全対策！

いる)、〈安全を期するため輸液ポンプに頼らず人の目による確認をしている〉および〈患者の安全を守るための情報交換やチェック機能ができている〉が含まれている。

〈処置を行うときはルートトラブルを予防するために注意している〉は、〔ルートトラブルを防ぐためには常に注意し観察している〕と〔清潔や体位変換を行う時は点滴ルートやドレーンが外れないように配慮して行うことが大切である〕から成り立っている。

〈安全を期するため輸液ポンプに頼らず人の目による確認をしている〉は、〔輸液ポンプを使用している、必ず人の目で確認して安全な輸液の管理を行っている〕と〔自動輸液ポンプは一定の速度で輸液を行う場合に使用するが、間違えた薬液の投与や過剰過小投与は患者の生命の危機に大きく関わる〕から成り立っている。

〈患者の安全を守るための情報交換やチェック機能ができている〉は、〔転倒転落の可能性がある患者や点滴ルートの交換日を書いたシールを貼ることで誰が見てもわかるように工夫されている〕と〔薬の確認は必ず二人で行いバーコードで患者と薬品が正しいかパソコンでチェックし患者本人にも名前を言ってもらっている〕から成り立っている。

〔標準予防策を遵守した感染対策が徹底している〕の中には、〈感染予防のため標準予防策に沿って実施している〉と〈感染予防のため環境を整えている〉が含まれている。

〈感染予防のため標準予防策に沿って実施している〉は、〔感染症患者の援助では、手袋・ゴーグル・ガウンを着用し看護師自身が身を守ることや媒体になることを防ぐことが重要である〕、〔患者の体液や排泄物に触れる場合は手袋やエプロンを装着し標準予防策に沿った感染予防がされている〕および〔医療者自身が感染源にならないように、一行為一手洗いが行われている〕から成り立っている。

〈感染予防のため環境を整えている〉は、〔陰圧になっている部屋が1室あり感染症患者の対応ができるようになっていいる〕、〔面会者の入室時は手洗いとマスクをしており外部からの感染を防いでいる〕および〔環境整備を毎日欠かさず行うことで感染源の予防につながる〕から成り立っている。

### 5.3. 【卓越した看護が重症患者と家族を支えている（卓越した看護!）】（図4）

この島は〔患者の状態に応じた卓越した看護技術が患者の安全安楽を支えている〕と〔患者や家族の意思を尊重することを大事にしている〕から成り立っている。

〔患者の状態に応じた卓越した看護技術が患者の安全安楽を支えている〕の中には、〈重症患者に対する状況に応じた援助を行っている〉、〈薬物療法やケアの工夫による疼痛緩和をしている〉および〈体位の工夫や皮膚を保護し褥瘡の発生を予防している〉が含まれている。

〈重症患者に対する状況に応じた援助を行っている〉は、〔ボディメカニクスをうまく使って行うことで看護者の作業のしやすさや腰痛を予防することも大切である〕、〔人工呼吸器使用の患者は口腔内が乾燥し唾液の自浄作用が低下するため口腔ケアは重要である〕および〔重症患者や人工呼吸器装着患者に負担をかけないように手際の良い援助技術が必要である〕から成り立っている。

〈薬物療法やケアの工夫による疼痛緩和をしている〉は、〔疼痛緩和のために足浴や温罨法を行っている〕と〔薬物療法による疼痛の緩和は重要であり早期離床にもつながる〕から成り立っている。

〈体位の工夫や皮膚を保護し褥瘡の発生を予防している〉は、〔褥創リスクの高い患者には体圧分散用クッションやマットを使用し安楽な体位を保持できる工夫が大切である〕、〔全身清拭時に皮膚を観察し発赤があった場合は保護シートをはって褥瘡の発生を予防する〕から成り立っている。

〔患者や家族の意思を尊重することを大事にしている〕の中には、〈患者の精神面に寄り添う看護が患者の回復につながる〉、〈意識のない患者に対しても声かけや気配りを行っている〉、〈患者の家族に対しても精神的ケアを行っている〉および〈生命を守るための身体拘束でも必ず患者や家族の同意を得る〉が含まれている。

〈患者の精神面に寄り添う看護が患者の回復につながる〉は、〔人工呼吸器を装着している患者には非言語的コミュニケーションにて患者の思いを確認する〕と〔患者が積極的に治療に関わっていけるよう精神的な援助を行うことは回復につながる〕から成り立っている。

〈意識のない患者に対しても声かけや気配りを行っている〉は、〔話すことができない患者や意識レベルが低下している患者に声かけをしながらケアを実施し、表情やしぐさから反応を観察す

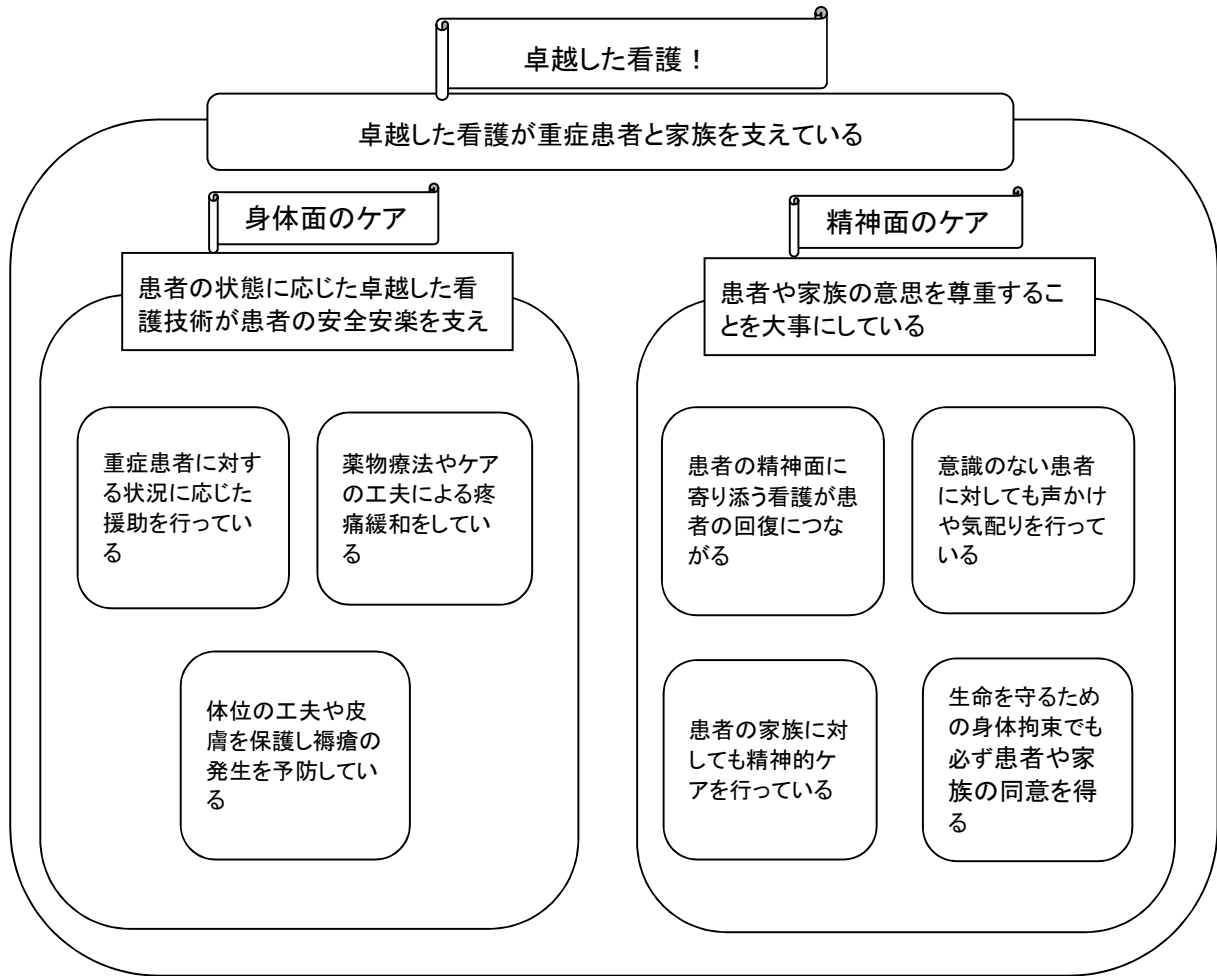


図4 卓越した看護！

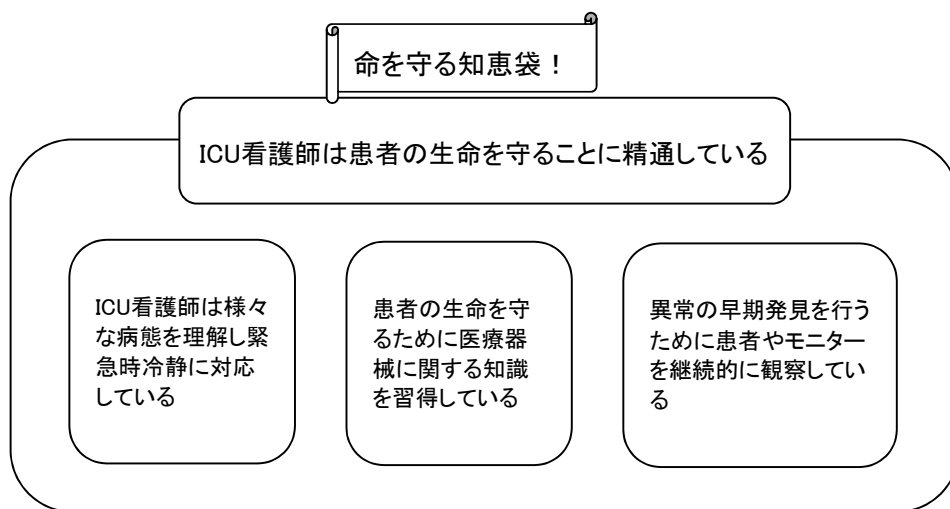


図5 命を守る知恵袋！



る〕と〔麻痺のある患者の清潔援助・寝衣交換を行うときは、患者は痛みが分からないため看護師は特に注意して行う〕から成り立っている。

〈患者の家族に対しても精神的ケアを行っている〉は、〔面会の家族に対して椅子を準備し、患者と家族の時間を大切にしている〕と〔患者の家族に分かりやすく簡潔に説明し、家族に対しての精神的ケアを行っている〕から成り立っている。

〈生命を守るための身体拘束でも必ず患者や家族の同意を得る〉は、〔生命に関わるため身体拘束は必要であるが看護師や家族が傍にいる時は外して患者の安全面に考慮しながら見守っている〕と〔チューブ類を自己抜去する危険があるため抑制道具で拘束する必要性について患者や家族に説明し必ず同意を得る〕から成り立っている。

#### 5.4 【ICU 看護師は患者の生命を守ることに精通している（命を守る知恵袋!）】（図5）

この島は〈ICU 看護師は様々な病態を理解し緊急時冷静に対応している〉、〈患者の生命を守るために医療器械に関する知識が必要である〉および〈異常の早期発見を行うために患者やモニターを継続的に観察している〉から成り立っている。

〈ICU 看護師は様々な病態を理解し緊急時冷静に対応している〉は、〔ICU 看護師は様々な科の患者の病態を把握している〕と〔ICU 看護師は緊急入院の患者に対して、冷静に処置を行い対応している〕から成り立っている。

〈患者の生命を守るために医療器械に関する知識を習得している〉は、〔医療機器が確実に作動しているかチェックすることはICU 看護を行う上で重要な看護の一つである〕と〔ICU には多くの種類の医療器械があり、看護師は操作方法を把握している〕から成り立っている。

〈異常の早期発見を行うために患者やモニターを継続的に観察している〉は、〔ベットサイドモニターを常に観察しながら患者に直接接触して観察し異常の早期発見に努めている〕と〔時間を決めて継続的に観察することで変化に気づくことができる〕から成り立っている。

## 6. 考察

A 短期大学看護学科成人看護学実習 I（急性期）実習記録の「手術室実習を終えての学び」の記載内容から4つの概念（島）が抽出された。これは①【準備万端!】、②【徹底した医療安全対策!】、③【卓越した看護!】および④【命を守る知恵袋!】で示される。

4つの概念（島）について考察する。

### 6.1 【ICU は緊急患者の受け入れのため準備万端整えている（準備万端!）】

ICU を初めて見学し学生は、〔ICU はオープンフロアで急変時に迅速に対応できるようになっている〕と述べ、さらに〔ICU はオープンフロアで看護師は常に周りを見渡している〕と周りを見渡せる環境になっていることを学び、患者の状態の変化にすぐに対応できるようにチームのメンバー全員で看護していると感じている。実習の進め方として、実習初日に「実習指導者によるオリエンテーション」を実施し、ICU の構造について説明を受けてから実習しているため、オープンフロアになっている構造の理由を学んだと推察される。また、学生は、〔オープンフロアでも患者のプライバシーに配慮しカーテンやスクリーンで個人の空間を作っている〕や〔一括の空調ではなく個別の管理ができるよう工夫されている〕と述べ、オープンフロアで清拭や処置を行うときは、カーテンを閉めプライバシーを保護したり、個人に合わせて空調が調節できるように構造において工夫されていることを実際の看護援助を通して学びを深めたと考えられる。

（山本ら2013）は「ICU 実習経験者はICU 実習未経験者に比べて、医療者の連携として、継続看護の実際・必要性が理解できた」ことを述べている。学生は実習においてICU の患者の援助を担当看護師と一緒にすることで、〔ICU では看護師同士の報告・連絡・相談が密に行われ協力し合っている〕と体験を通して学び、更に〔ICU では医師、臨床検査技師など他職種や病棟看護師・手術室看護師が協力して一人の患者を見て情報交換をしている〕と生命の危機的状態にある患者の治療のために、他職種との連携の重要性を学んだと考えられる。

また、学生は〔人工呼吸器や除細動器などは充電状態となっていて、すぐに使えるように準備されている〕や〔緊急時に備え救急カートの薬剤の点検が毎日行われている〕と述べているのは、実際に点検を実施したことで、万全の準備をして緊急患者をいつでも受け入れる体制が整っていることを知ることができたと考えられる。そして、薬品や器材の点検は、いつでも重症患者を受け入れることができるようにするためには重要であることに着眼している。〔すべてのベットにモニターが設置され異常時にアラームがなるようになっている〕と、生命の危機的状態にある患者が入院し

ているICUは医療機器やモニターによる状態観察が常に行われているため、緊張感を感じている。さらに、〔緊急時に対応できるように空ベットが確保されている〕といつでも緊急入院を受け入れる体制ができていることに気付くことができたと考えられる。

## 6.2 【生命の危機的状態にある患者を守る対策が徹底している（徹底した医療安全対策!）】

ICU実習の目標の中に「ICUにおける安全管理について説明することができる」と「ICUにおける感染予防管理について説明することができる」がある。学生は、実習開始前にICUにおける安全管理や感染管理について、事前学習してから実習に臨んでいる。

2006年の医療法の改正により、医療機関に医療安全管理、感染管理、医薬品安全管理、医療機器安全管理の責任者をそれぞれ配置することが定められた。このように医療安全の推進は法的に義務付けられている。医療安全の取り組みは、患者が最善の医療を受ける権利の保護であり、最善の医療を提供するという医療関係職の基本的な姿である（日本看護協会2013）。

学生は〔清潔や体位変換を行う時は点滴ルートやドレーンが外れないように配慮している〕と様々なチューブ類が体内に挿入され、集中治療を受けている患者のケアを通して徹底した安全管理を具体的に体験することで学びを深めたと推察される。〔輸液ポンプを使用している、必ず人の目で確認して安全な輸液の管理を行っている〕や〔薬の確認は必ず二人で行い患者と薬品が正しいかバーコードやパソコンでチェックし患者本人にも名前を言ってもらっている〕と述べている。このことは急な外傷や病気による患者が入院するICUにおける薬物療法は、循環動態に影響する劇薬を使用することも多くあり、医療事故防止のために器械に頼らず人による入念な確認が必要であることに気付くことができ、〔生命の危機に大きく関わるトラブル予防対策が入念に行われている〕ことを学ぶことができたと考えられる。

ICUの感染対策として、(志馬2008)は「適切な感染防止策の遂行により、易感染性の重症患者を交差感染から守ることはICUにおいてとりわけ重要である。最も重要な予防策は手洗いである。」と述べている。学生は〔感染症患者の援助では、手袋・ゴーグル・ガウンを着用し看護師自身が身を守ることや媒体になることを防ぐことが重要である〕や〔医療者自身が感染源にならないよう

に、一行為一手洗いが行われている〕と標準予防策と手洗いの重要性を感じている。このことは、ICU看護師と共に看護を体験し、患者へ直接的な関わりを行ったことにより、気付くことができ、学びを深めることができたと推察される。

## 6.3 【卓越した看護が重症患者と家族を支えている（卓越した看護!）】

「臨地実習の目的は、学生が学内で習得した看護に必要な専門的知識・技術・態度を実際の場面に応用し、看護の対象を全人的にとらえ、理論と実践を結びつけた看護活動を展開する能力を養うことにある（宮地2013）」と述べられている。学生は実習において、学内の講義や演習で学んだ解剖生理学や疾患、看護技術の原理原則を事前学習し、患者の個別性に合った援助を行えるように学習している。

しかし、ICUの患者の多くは生命を維持するため、人工呼吸器やモニター類を装着し医療機器を使って医療が行われている。点滴やドレーンも挿入されているため、清潔の援助を行うにしても器械類の知識や疾患に合わせた多くの専門知識が必要である。学生はICU看護師と共に患者に清潔援助を実施する中で〔重症患者や人工呼吸器装着患者に負担をかけないように手際の良い援助技術が必要である〕ことに気付いたと推察される。また、〔人工呼吸器使用の患者は口腔内が乾燥し唾液の自浄作用が低下するため口腔ケアは重要である〕と述べており、〔患者の状態に応じた卓越した看護技術が患者の安全安楽を支えている〕と学びを深めたと考えられる。

患者との信頼関係を構築するために、コミュニケーション技術を身につける必要がある。厚生労働省(2007)は、看護基礎教育のカリキュラム改正の中で、近年の同世代の若者同様、看護学生のコミュニケーション能力が不足している傾向があり、コミュニケーション能力を高める内容が盛り込まれた。学生は基礎看護学の講義や演習において、コミュニケーション技術(茂野2013)を学習する。授業では、コミュニケーションを円滑にするため、身だしなみ、表情、視線、相手との距離、ジェスチャー、スキンシップ、声のトーンなどの基本的態度について学んでいる。

学生は〔人工呼吸器を装着している患者に非言語的コミュニケーションにて患者の思いを確認する〕や〔話すことができない患者や意識レベルが低下している患者に声かけをしながらケアを実施し、表情やしぐさから反応を観察する〕と言語的

コミュニケーションができない患者とのかわりを通して、非言語的コミュニケーション技術の必要性を体験を通して学んだと考えられる。

さらに学生は〔面会の家族に対して椅子を準備し、患者と家族の時間を大切にしている〕や〔患者の家族に分かりやすく簡潔に説明し、家族に対しての精神的ケアを行っている〕とICU看護師が家族への関わりを大切にしていることに着眼できている。ICUへの入院は家族にとっても重大な出来事であり家族の不安も大きいと考えられる。(徳原ら2013)のICU実習においても「緊迫した状況の中での患者・家族への声かけや家族の思いを聴くことの大切さを学んだ」と述べている。また、学生は〔チューブ類を自己抜去する危険のある患者に抑制道具で患者を拘束する必要性を患者や家族に説明し必ず同意を得る〕とICU看護師は、倫理的配慮が大切となり家族を含めた支援を行う必要性を学ぶことができたと考えられる。

#### 6.4 【ICU看護師は患者の生命を守るために精通している(命を守る知恵袋!)]

ICUは、生命の危機的状態の患者が多く、脳疾患、循環器疾患、呼吸器疾患、外傷、侵襲の大きな術後の患者など様々な疾患の患者が集中治療を受けているため、医療機器や薬剤に関する多くの専門知識が必要である。ICU看護に求められる能力として、「看護過程におけるアセスメントよりもその判断そのものに着眼した臨床判断能力が必要である」ことが述べられている(高島2013)。

学生は〈ICU看護師は様々な科の患者の病態を把握している〉、〈ICUには多くの種類の医療器械があり、看護師は操作方法を把握している〉そして、〈ベットサイドモニターを常に観察しながら患者に直接触れて観察し異常の早期発見に努めている〉と述べており、幅広い知識の必要性と医療機器の知識、さらに観察力を養い、患者の異常の早期発見することが重要であることに結びつけていると考えられる。

#### 7. 結論

ICU実習における学生の学びを明らかにすることを目的に、実習記録の「ICU実習を終えての学び」をKJ法(川喜多1996)により構造化した。

実習記録の記載内容からラベルを作成し、意味内容の類似性により集約を繰り返した。その結果、1段階は20、2段階で7つの島に集約し、最終的には4つの島(準備万端、徹底した医療安全

対策、卓越した看護、命を守る知恵袋)が形成された。

よって、学生は、いつでも緊急患者を受け入れられるように体制が整えられ、徹底した安全管理や感染管理を行いながら、入院患者に精神的身体的ケアを実施し、豊富な専門的知識を習得しているICU看護について学んでいることを明らかにした。

ICU実習の指導のあり方として、実習目標と実習の進め方について臨床現場と連携することにより、学生がICU看護師の役割を知り、クリティカルケア看護について理解が深まるような実習支援が大切となることが示唆された。

#### 謝辞

本研究を行うあたり、ご協力いただきましたA短期大学の学生の皆様に心より厚く御礼申し上げます。

#### 引用文献

- 1) 川喜多二郎(1996)、川喜多二郎著作集第5巻、KJ法-渾沌をして語らしめる、中央公論社、121-169
- 2) 厚生労働省(2007)、看護基礎教育の充実に関する検討会報告書
- 3) 厚生労働省(2011)、看護教育の内容と方法に関する検討会報告書
- 4) 佐藤ゆかり、内藤明子、山口千秋(2004)、クリティカルケア実習における学習内容の検討-実習記録とアンケートの分析から-、愛知医科大学看護部紀要、3、57-71
- 5) 茂野香おる(2013)、関係構築のためのコミュニケーションの基本、基礎看護技術I、医学書院、28-35
- 6) 志馬伸朗(2008)、ICUにおける感染管理-推奨すべきことと止めるべきこと-、日本外科感染症学会雑誌、5(1)、55-60
- 7) 白神佐知子、藤田倫子、名越恵美、他(2011)、成人看護学ICU見学実習における学生の学び、看護・保健科学研究誌、11(1)、79-88
- 8) 園田裕子、渡邊郁子、鈴木裕子、他(2009)、ICU見学実習での学習のタイプに関する研究-成人看護学実習における実習記録の内容分析から-、愛知きわみ看護短期大学紀要、5、73-86
- 9) 高島尚美(2013)、ICU・CCUにおける看護の概要、ICU・CCU看護、医学書院、p5

- 10) 徳原多賀子、井本恵美子、戸井間充子 (2004)、ICU実習における看護学生の学習効果－実習記録の分析より－、第35回日本看護学会論文集（看護教育）、250-252
- 11) 日本看護協会（2013）、医療安全推進のための基本的な考え方、医療安全推進のための標準テキスト、6-9
- 12) 宮地緑、星和美、藍原キミヨ（2003）、臨地実習の基本的な考え方、看護学臨地実習ハンドブック（第3版）、金芳堂、p8
- 13) 宮嶋正子、池田敬子、山本美緒、他（2013）、急性期看護実習における手術室とICU見学実習導入の試み－学生の達成感と記述内容の分析から－、和歌山県立医科大学保健看護学部紀要、9、23-31
- 14) 山本加奈子、佐久間美華（2013）、急性期看護実習におけるICU実習の意義－ICU実習経験の有無による実習目標達成度の比較検討－、第43回日本看護学会論文集（成人看護I）、107-110

# Structure of learning in adult nursing practice at ICU

Terumi Kawai, Tomoko Nakada, Rie Nakai

*The Department of Nursing, Toyama College of Welfare Science*

## Abstract

This study performs to clarify nursing students learning on ICU practice, and obtains some useful suggestions to improve the practice. 26 nursing students consented to participate in this study. Their practice records were structured using the KJ method. As a result, the following factors were extracted: “Perfect the preparations”, “Thorough medical safety measures”, “Prominent nursing”, and “Wisdom to save the lives of patients”.

Results of analysis suggest requirement to discuss the process of nursing practice at ICU and its objectives in cooperation with professionals working in actual clinical setting, and such practice supports to deepen students' understanding of the roles of ICU nurses, which should be regarded as an important part of critical nursing care.

Keywords : ICU practice, practice records, nursing student, KJ method

# 臨地実習指導者からみた手術室実習での学生の学びと要望に関する調査 —アンケートの調査分析より—

中田 智子, 河相 てる美  
富山福祉短期大学看護学科

(2015.9.30受稿, 2015.10.30受理)

## 要旨

A 短期大学看護学科では成人看護学実習（急性期）4週間のうち手術室実習を1週間実施している。本研究は、成人看護学実習の手術室実習における臨地実習指導者からみた手術室実習での学びと成長を明らかにし、今後の実習指導方法を検討していくための資料とすることを目的とする。

臨地実習指導者にアンケートを依頼し、「学生が変化・成長したところ」、「実習を終えた学生に対する課題」、「実習に関する要望や課題」の記載内容を分析した。その結果、「学生が変化・成長したところ」については、『手術室看護師の役割の理解』、『医療安全、感染対策の知識向上』、『手術患者の不安と苦痛の理解』、『興味をもった意欲的な態度』の4つのカテゴリが生成された。「実習を終えた学生に対する課題」については、『事前学習の充実』、『積極的な態度』の2つのカテゴリが生成された。「実習に関する要望や課題」では、『学習内容の明確化』、『手術特有の技術演習』、『学生に関する情報交換』の3つのカテゴリが生成された。これらの結果から、効果的な手術室実習を行うためには、充実した事前学習および教員と臨地実習指導者との連携の必要性が示唆された。

キーワード：成人看護学実習，手術室，臨地実習指導者，看護学生

## 1. はじめに

A 短期大学看護学科では成人看護学実習（急性期）4週間のうち手術室実習を1週間実施している。成人看護学実習（急性期）は、手術を受ける患者の術前・術中・術後の特徴を理解し、患者及び家族のニーズに応じた看護過程を展開し、手術を受ける患者の回復支援のための看護師の役割を理解することを目的としている。藤巻ら（2014）は、手術室実習は周術期患者の理解や看護過程をしていくうえで不可欠なものであり、看護専門職としての知識・態度について考えるきっかけに繋がり、臨床実習のなかで手術室実習を導入する意義が高いと述べている。周術期実習の一環とし、手術室にて、患者が体験する医療看護の場を実際に見て学習する体験と学びは価値のあるものと考えられる。

A 短期大学看護学科の手術室実習の体制は、教員は手術室に入室せず、実習指導を臨地実習指導者に一任しており、臨地実習施設は、異なる複数の看護学校の学生や教員を受け入れ、看護業務と並行しながら学生指導を行っているのが現状である。深澤（2006）は、手術室実習では、大学側の教育方針を受け入れ施設の手術室側が十分に共有し、連携を密に取っていく必要があると述べ

ている。

そこで、本研究は、実習指導にあたる臨地実習指導者からみた学生の学びと要望を明らかにすることにより、今後の効果的な実習指導方法を検討する。

## 2. 研究目的

成人看護学実習（急性期）の手術室実習における臨地実習指導者からみた学生の学びと要望を明らかにし、今後の手術室実習指導方法を検討するための基礎資料を得ることを目的とする。

## 3. 研究方法

### 3.1 対象

本研究の趣旨に同意・協力が得られたA 短期大学の成人看護学実習施設の手術室実習指導者8人

### 3.2 研究期間

平成 25 年 1 月から平成 25 年 5 月

### 3.3 アンケート方法

「学生が変化・成長したところ」、「実習を終えた学生に対する課題」、「実習に関する要望や課

題」について自由記載によるアンケート用紙を作成し、成人看護学実習（急性期）終了後、手術室実習指導者にアンケートを依頼した。

### 3.4 分析方法

「学生が変化・成長したところ」、「実習を終えた学生に対する課題」、「実習に関する要望や課題」の、それぞれの項目ごとに意味ある文脈を抽出し、コード化した。共通性・相違性を比較検討しながら類似する内容を集約し、サブカテゴリ、カテゴリを生成した。研究者2名で記載の内容を検討し、合意形成を行ないながら分析した。

### 3.5 倫理的配慮

調査にあたり研究の目的と方法、結果の公表および参加の任意性について口頭と書面にて説明をし、書面にて同意を得た。なお、本研究は所属機関の倫理委員会の承諾を得て実施した。（承認番号 H24-005 号）

## 4. 成人看護学実習（急性期）の概要

成人看護学実習（急性期）は、手術を受ける患者の術前・術中・術後の特徴を理解し、患者及び家族のニーズに応じた看護過程を展開し、手術を受ける患者の回復支援のための看護師の役割を理解することを目的としている。実習の進め方を以下に示す。

急性期病院において4週間の実習を行っている。そのうちの2週間は、病棟実習を行い、1人の手術を受ける患者を受け持ち、看護過程を展開し、術前・術後の看護について学ぶ。1週間はクリティカルケア看護実習、1週間は手術室実習としている。学生は2つのグループに分かれ、ローテーションし、病棟を終えて手術室実習を行うグループと、病棟実習の前に手術室実習を行うグループがある。手術室実習は3日間であり、教員は実習の前週末に予定手術の情報を学生に伝達し、学生は手術室看護についての事前学習と予定手術について事前学習をして実習に臨んでいる。主に外回り看護師とともに行動し見学体験の実習を行っている。実習の最終日に手術室での体験と学び、感想からなるレポートをもとにカンファレンスを行っている。

## 5. 結果

アンケートを分析した結果、「学生が変化・成長したところ」については、『手術室看護師の役割の理解』、『医療安全、感染対策の知識向上』、

『手術患者の不安と苦痛の理解』、『興味をもった意欲的な態度』の4つのカテゴリが生成された。「実習を終えた学生に対する課題」については、『事前学習の充実』、『積極的な態度』の2つのカテゴリを生成した。「実習に関する要望や課題」では、『学習内容の明確化』、『手術特有の技術演習』、『学生に関する情報交換』の3つのカテゴリが生成された。

以下、『 』をカテゴリ、〔 〕をサブカテゴリ、〈 〉内の文章は、臨地実習指導者の自由記載の内容を表1に示す。

### 5.1 学生が変化・成長したところ（表1）

『手術室看護師の役割の理解』、『医療安全、感染対策の知識向上』、『手術患者の不安と苦痛の理解』、『興味を持った意欲的な態度』の4つのカテゴリから構成される。

『手術室看護師の役割の理解』は、〔患者に応じた手術室看護〕、〔手術室看護師の動きの観察〕から構成された。〔患者に応じた手術室看護〕には、〈病棟と同じく手術室でも患者中心にまわっており、チームワークの大切さを学びとれたと記録から感じた〉、〈術前訪問の情報を手術に関わるスタッフに伝達する大切さを学んだ〉、〈学生が自分達で手術体位の保持を体験し、患者に応じた看護が必要だと感じたところ〉、〈術前訪問では、患者の理解度や心理状態を把握しながら説明内容を変更していることを学んだ〉、〈術前訪問の同行後、学生から積極的に質問をうけ、患者ニーズに応じた看護を理解しようとする姿が見られた〉が含まれる。また、〔手術室看護師の動きの観察〕には、〈外回り看護師の行動を観察し、手術の進行状況に合わせて予測した行動を取っていたことに気がついた〉、〈外回り看護師の麻酔覚醒時の声かけや観察の様子が記録に詳しく書かれていた〉、〈器械出し看護師の機会の並べ方や渡し方を観察し、その理由を考えられたこと〉、〈器械出し看護師と術者との手術中のスムーズな連携を観察していた〉が含まれる。

『医療安全、感染対策の知識の向上』の中には、〔安全に対する援助〕、〔感染対策の理解〕から構成される。〔安全に対する援助〕には、〈手術前に患者確認を何回も行うことが医療安全につながると学んでいた〉、〈手術台の患者の側にいることは転落を予防し、患者の安全確保であると学んだ〉が含まれる。〔感染対策の理解〕には、〈手術室の特殊な環境設備を理解していた〉、〈手洗いやガウンテクニックを体験し清潔不潔について理解で

きた)、〈清潔区域を意識した行動をとれるようになった〉が含まれる。

『手術患者の不安や苦痛の理解』は、〔手術時の患者の苦痛や不安の理解〕、〔術前患者の不安の理解〕から構成される。〔手術時の苦痛や不安を理解できた〕には、〈学生は手術体位を経験することにより、患者の不安や苦痛に気づくことができた〉、〈行われる処置の説明や声かけが、患者の不安緩和につながると学んだ〉が含まれる。〔術

前患者の不安の理解〕には、〈術前訪問の時、患者の言動を観察し患者の不安を感じとっていた〉が含まれる。

『興味を持った意欲的な態度』は、〔目標を明確にした意欲的な実習〕、〔メモを取り興味・関心をもった実習態度〕から構成される。〔目標を明確にした意欲的な実習〕には、〈毎日の目標を明確にして意欲的に取り組んでいた〉、〈実習目標に具体的な計画が立てられていた〉が含まれる。ま

表 1 学生が変化成長したところ

カテゴリ	サブカテゴリ	臨地実習指導の記述
手術室看護師の役割の理解	患者に応じた手術室看護	病棟と同じく手術室も患者中心にまわっており、チームワークの大切さを学びとれたと学生の記録から感じた
		患者の手術体位に応じた看護が必要だと感じたところ
		術前訪問のとき、積極的に質問され患者ニーズに応じた看護をしようとする姿が見られた
		個人差はあるが手術室看護師の役割を学べた
		手術室看護師としての患者との関わり方を理解することができていた
	手術室看護師の動きの観察	外回り看護師の動きをよく観察していたこと 器械出し看護師の動きをよく観察していたこと
医療安全、感染対策の知識向上		医療安全に対する知識の向上がみられた 感染予防に対する知識の向上がみられた
	手術時の患者の苦痛や不安に対する理解	体位を体験することにより、患者の苦痛や不安さを理解できた 麻酔導入までの声かけから患者の苦痛や不安さを理解できた 術前患者の不安の理解
興味を持った意欲的な態度	目標を明確にして意欲的な実習	毎日の目標を明確にして意欲的に取り組んでいた 実習目標に具体的な計画立てられていた
	メモを取り興味・関心を持った実習態度	手術室の医療・看護に興味を持って実習している様子を見て我々スタッフ側も刺激になった
		説明を棒立ちで聞いている状態だったが、さりげなくメモを取るように指摘したところとるようになった

表 2 実習を終えた学生に対する課題

カテゴリ	サブカテゴリ	臨地実習指導者の記述	
事前学習の充実	日々の実習内容についての事前学習	実習の課題を明確にして実習に臨んで欲しい 学びたいこと、聞きたいことを整理して実習に臨んで欲しい 翌日の実習内容について伝えていたので事前学習をもう少し頑張らせて欲しい	
		手洗いの事前学習	手洗いの事前学習をして欲しい
	積極的な態度	実習内容の記録への反映	聞いたこと、説明を受けたことはメモして欲しい 実習中にメモしたことをもっと記録に反映できると良い メモを取らない、質問をしないという態度は改めて欲しい
実習意欲			もう少し積極的に学んでいってもらえたほうが得るものが多いと思う 何を行いたいのか積極的に発言して欲しい 手術室は病棟と違い特殊な場所なのでもっと意欲的に気になることに対し質問があればよかった 挨拶ははきはきとして欲しい



た、〔メモを取り興味・関心をもった実習態度〕には、〈説明に対して質問があり、興味を持って実習している様子を見て、スタッフ側が刺激になった〉、〈説明を棒立ちで聞いている状態だったが、さりげなくメモを取るように指摘したところ取るようになった〉が含まれる。

## 5.2 実習を終えた学生に対する課題 (表2)

『事前学習の充実』『積極的な態度』の2つのカテゴリから構成された。

『事前学習の充実』は、〔日々の実習内容について事前学習〕と〔手洗いの事前学習〕の2つのサブカテゴリから構成される。〔日々の実習内容について事前学習〕には、〈翌日の実習内容について伝えていたので事前学習をもう少し頑張っして欲しい〉、〈実習の課題を明確にして実習に臨んでほしい〉、〈学びたいこと、聞きたいことを整理して実習に臨んでほしい〉が含まれる。〔手洗いの事前学習〕は、〈手洗いの事前学習をして実習に来て欲しい〉である。

『積極的な態度』は、〔実習内容の記録への反映〕と〔実習意欲〕の2つのサブカテゴリから構成される。〔実習内容の記録への反映〕には、〈聞いたこと、説明を受けたことはメモして欲しい〉、〈実習中にメモしたことをもっと記録に反映できると良い〉、〈メモを取らない、質問をしないという態度は改めて欲しい〉が含まれる。〔実習意欲〕には、〈もう少し積極的に学んでいってもらえたほうが得るものが多いと思う〉、〈何を行いたいのか積極的に発言して欲しい〉、〈手術室は病棟と違い特殊な場所なのでもっと意欲的に気になることにし質問があればよかった〉、〈挨拶ははきはきとして欲しい〉が含まれる。

## 5.3 実習に関する要望や課題 (表3)

実習に関する要望や課題は、『学習内容の明確

化』、『手術室特有の技術演習』、『学生に関する情報交換』の3つのカテゴリから構成される。

『学習内容の明確化』は、〔実習期間に対して高度な目標設定〕、〔実習内容の伝達不足〕から構成される。〔実習期間に対して高度な目標設定〕には、〈目標設定が高すぎる〉、〈実習が3日間なのに、自己評価表の項目が多いと感じた〉、〈実習期間が短く、目標達成が困難だったのでは、と思った〉が含まれる。〔実習内容の伝達不足〕には、〈何を重点的に教えてよいか分からなかったので、実習内容を明確にして欲しい〉、〈学ばせたい内容を分かりやすくして欲しい〉が含まれる。

『手術室特有の技術演習』は、〈手術室特有の技術演習をして実習に臨むと良い〉である。

『学生に関する情報交換』には、〈体調不良の学生がいなか確認し報告して欲しい〉である。

## 6. 考察

A 短期大学看護学科の成人看護学実習(急性期)における手術室実習の臨地実習指導者にアンケートを依頼し分析した。アンケート項目の「学生が変化・成長したところ」、「実習を終えた学生に対する課題」、「実習に関する要望や課題」の分析結果について以下に考察する。

### 6.1 学生が変化・成長したところについて

#### 1) 『手術室看護師の役割の理解』

臨地実習指導者の記述の〈病棟と同じく手術室でも患者中心にまわっており、チームワークの大切さを学びとれたと記録から感じた〉、〈術前訪問で知り得た情報を手術に関わるスタッフに伝達し、情報共有をする大切さを学んだ〉から、学生は手術室が病棟と同様にチームワークと情報共有が必要であり、患者中心の医療・看護の場であることを学んでいたと実習指導者は捉えている。また、〈学生が自分達で手術体位

表3 実習に関する要望や課題

カテゴリ	サブカテゴリ	臨地実習指導者の記述
学習内容の明確化	実習期間に対して高度な目標設定	目標設定が高すぎる
		実習が3日間なのに、自己評価表の項目が多いと感じた
		実習期間が短く、目標達成が困難だったのでは、と思った
	実習内容の伝達不足	何を重点的に教えてよいか分からなかったので、実習内容を明確にして欲しい
学ばせたい内容を分かりやすくして欲しい		
手術室特有の技術演習		滅菌と消毒の意味、ガウンテクニックについて、事前学習してきたら良いと思う
学生に関する情報交換		体調不良の学生がいなか確認し報告して欲しい

の保持を体験し患者に応じた看護が必要だと感じたところ)、〈術前訪問では、患者の理解度や心理状態を把握しながら説明内容を変更していることを学んだ)、〈術前訪問の同行後、学生から積極的に質問を受け、患者のニーズに応じた看護を理解しようとする姿が見られた〉の記述より、自ら体験と、看護師の患者への術前の関わりの見学を通して個別性のある看護の必要性を学び、〔患者に応じた手術室看護〕の理解につながったと考えられる。さらに、〈外回り看護師の行動を観察し、手術の進行に合わせて、予測した行動をとっていたことに気がついた)、〈外回り看護師の麻酔覚醒時の患者への声かけや観察の様子が記録に詳しく書かれていた)、〈器械出し看護師の手術器械の並べ方や渡し方を観察し、その理由を考えられていたこと)、〈器械出し看護師と術者との手術中のスムーズな連携を観察していた〉の記述から、学生は外回り看護師や器械出し看護師の行う業務や看護をじっくり見学して、〔手術室看護師の動きを観察〕することができている。そして、その根拠を考えることができた学生を成長したと捉えたと考えられる。これらのことから、手術室実習において、学生は臨地実習指導について行動したことにより、手術室看護師の理解につながったと考えられる。手術室という特殊な治療環境の中での実習は、臨地実習指導者の教育的サポートが不可欠である。溝部ら(2007)は、基礎看護教育を受ける学生にとって一般的に難しいと考えられる手術室看護および手術をうける対象者の理解について、事前学習や臨地実習指導者がロールモデルとなることは、動機づけとなり効果的な観察学習につながる可能性があると述べている。学生は臨地実習指導者が行う高度な技術や看護師の役割を目の当たりにし、その意味付けの説明をうけることにより考えることで学びにつながり、臨地実習指導者の感じた変化成長につながったものと考えられる。

## 2) 『医療安全、感染対策の知識向上』

〈手術前に患者確認を何回も行うことが医療安全につながると学んでいた)、〈手術台の患者の側にいることは、転落を予防する安全の確保であると学んだ〉の記述から、手術室で行われている患者誤認予防や転落予防としての〔安全に対する援助〕を学んでいる。〈手術室の特殊な環境を理解した)、〈手洗いやガウンテクニックを体験し、清潔不潔について理解が深まっ

た)、〈清潔区域を意識した行動をとれるようになった〉の記述から、臨地実習指導者は、初日のオリエンテーションで手術室の設備、システム、滅菌法や清潔不潔の説明を行い、学生は手術時手洗いやガウンテクニックの体験を行うことで、手術室の感染対策の実際知ることができたと考えられる。そして3日間の実習期間で清潔区域を考えた行動を意識的に行うことができるようになったことから、〔感染対策の理解〕につながった。これらのことから、『医療安全、感染対策の向上』が学生の変化成長であると臨地実習指導者は捉えたと考えられる。

## 3) 『手術患者の不安や苦痛に対する理解』

〈学生は手術体位を体験することにより、患者の不安や苦痛に気づくことができた)、〈行われる処置の説明や声かけが患者の不安緩和につながるると学んだ〉という記述から、〔手術時の患者の不安や苦痛の理解〕を得たと臨地実習指導者は感じた。学生は患者体験を通して、患者の不安や苦痛を実感し、患者に対する看護師の関わりと患者の反応を観察していたことが成長と捉えている。また、〈術前訪問の時、患者の言動を観察し、患者の不安を感じとっていた〉の記述から、臨地実習指導者は学生が〔術前患者の不安の理解〕をしようとしていたと考えられた。大谷ら(2006)は、手術室看護師と共に行動を行う見学実習では、手術室において看護師の一つひとつの行動を見学することで、看護師をモデルとする学びを深めることができ、学生は看護師と共に実践に参加し、その実践の中で学生自身が意味を獲得していくという学習がなされていると述べている。見学体験実習で学生は看護師が行っている援助を客観的に捉え、成長につながったと考えられる。

## 4) 『興味を持った意欲的な態度』

〈毎日の目標を明確にして意欲的に取り組んでいた)、〈実習目標に具体的な計画が立てられていた〉の記述から、学生は実習目標を理解し、自己の目標を明確にして行動したことを、意欲的な実習と感じていた。また、〈説明に対して質問があり、興味を持って実習をしている様子を見て、スタッフ側が刺激になった)、〈説明をしても棒立ちで聞いている状態だったが、さりげなくメモを取るように指摘したところ取るようになった〉という記述から学生のメモを

取ることや質問をすることが興味関心をもった態度であると臨地実習指導者は捉えている。溝部ら（2007）は事前学習を基盤とした観察学習と優れた看護実践を行うロールモデルの存在から、学生が手術室看護に対する価値に気づき、そのことが学生の心理にポジティブな影響を与え、手術看護に対する関心を生み出すと述べているように、実習前の事前学習が動機づけとなり意欲的な態度につながったと考えられる。

## 6.2 実習を終えた学生に対する課題について

〈翌日の実習内容について伝えていたので、事前学習をもう少し頑張らして欲しい〉、〈実習の課題を明確にして実習に臨んで欲しい〉、〈学びたいこと、聞きたいことを整理して実習に臨んで欲しい〉の記述から、学生は課題を明確にした事前学習が不足していたと考えられる。〈手洗いの事前学習をして実習に来て欲しい〉という記述から、講義の演習で手洗いは学習していたが、実習まで半年以上経過しているため、臨地実習指導者には学習不足が感じられたと考えられる。深澤（2012）は手術看護自体が専門性の高い領域であるため、学生の事前学習の必要性が課題であると述べている。充実した事前学習と手術時手洗いなどの手術室特有の技術の演習を実習直前に行き再認識させる『事前学習の充実』が必要である。

また、〈聞いたこと、説明を受けたことはメモを取って欲しい〉、〈実習中にメモした内容をもっと記録内容に反映できると良い〉の記述から、臨地実習指導者は実習した内容や説明した内容を記録に反映されることを望んでいたと考えられる。〈もう少し積極的に学んでいってもらえたほうが得るものが多いと思う〉、〈何を行いたいのか積極的に発言して欲しい〉、〈手術室は病棟と違い特殊な場所なのでもっと意欲的に気になることに対し質問があればよかった〉という記述から、学習意欲が低い学生には、貪欲に学んで欲しいと考え、もっと積極的な態度で実習して欲しいと臨地実習指導者は感じている。学生は手術室実習では見学中心となり受け身の姿勢になってしまったのではないかと考えられている。吉井ら（2004）の報告では、実習前の手術に関するイメージは「清潔な」「特色のある」「激しい」「固い」「張りつめた感じ」「男性的な」「変化に富んだ」「テンポの速い」「せわしない」「動的」「クールな」「不安定な」といった脅威と捉えていた否定的なイメージが、実習後には肯定的イメージに変化している。否定的なイメージは消極的や無気力な行動を生

み、肯定的なイメージは積極的な行動を生み出したと述べられている。緊張度の高い環境の中で、臨地実習指導者から見た学生の実習態度は、消極的で受け身であるという印象があったと考えられる。また、廣井ら（2007）は、手術室では初めて映像ではない手術や緊張に加えて特殊な環境の中で、自分がどのように関わっているのか分からない。手術室実習の貴重な経験を術後の患者理解につなげるためにも術中の援助を具体的に説明し、イメージをもって手術室実習に臨めるように指導していく必要があると述べている。教員は学生に対して、手術室特有の技術の事前演習と実習課題をもって、『積極的な態度』で実習に臨めるよう実習内容を明確に伝えることが重要であると考えられる。

## 6.3 実習に関する要望や課題

実習に関する課題としては、〈目標設定が高すぎる〉、〈実習が3日間で、自己評価表の項目が多いと感じた〉、〈実習期間が短く、目標達成が困難と感じた〉の記述から、臨地実習指導者は〔実習期間に対して高度な目標設定〕と感じ、短い実習期間で目標達成ができるか戸惑っていたと考えられる。また、〈何を重点的に教えて良いのか分からない〉の記述から、臨地実習指導者の実習内容の理解不足は〔実習内容の伝達不足〕が要因と考えられる。〔手術室特有の技術演習〕は、実習を終えた学生に対する課題でも述べたように、事前演習や事前課題を充実する必要がある。井上ら（2010）は、複数の教育機関、異なる教育課程の学生を受け入れ、看護業務と並行して実習指導を行う実習指導者にとって、教育の責任者である教員との連携は極めて重要であると述べられている。今後の課題として、実習期間に合わせた実習目標の設定と実習内容を具体化し、実習の目標や学生のレディネスを臨地実習指導者と共有し、連携を強化していく必要性が示唆されている。また、〈体調不良な学生がいないか確認と報告をして欲しい〉の記述があり、実習に対する要望として、安全な実習を行うためには、臨地実習指導者との学生の情報交換と連携が必要であると考えられる。

## 7. 結論

本研究によって、成人看護学実習（急性期）の手術室実習において、臨地実習指導者からみた学生の学びと要望が明らかになった。

①臨地実習指導者は、学生が実習目標を明確

にし、興味を持って意欲的に取り組んでいたという変化成長を感じている。

- ②臨地実習指導者は、学生の実習姿勢に対して、事前学習を行い積極的態で実習する必要があると感じている。
- ③臨地実習指導者の実習に関する課題は、学習内容の明確化と手術室特有の技術演習の必要である。

グ、21 (6)、98-108

- 8) 吉井美穂、八塚美樹、安田智美他 (2004)、周手術期実習における学生の手術に対するイメージの変化、富山医科大学看護学誌、5 (2)、103-106

## 謝辞

本研究を行うにあたり、ご協力いただきました臨地実習指導者の皆様により厚く御礼申し上げます。

本研究は、第33回看護科学学会で発表したものに加筆、修正を加えました。

なお、本研究は、富山福祉短期大学平成25年度共同研究費の助成金により行いました。

## 参考文献

- 1) 深澤佳代子 (2006)、基礎看護教育における手術室看護の位置づけと教授方法について－手術室実習について－、手術医学、27 (4)、30-32
- 2) 深澤佳代子 (2012)、看護基礎教育における手術看護実習の意義、手術医学、33 (2)、211-213
- 3) 藤巻承子、能塚覚美、森祐子 (2014)、看護学部生に対する手術室実習の意義と効果、第44回日本看護学会論文集 (成人看護 I)、193-196
- 4) 廣井真美、手島裕子、金木裕美 (2007)、臨地における急性期看護学実習に必要な技術の習得を考える－技術チェックリストを分析し次年度に向けて検討する－、帝京平成看護短期大学紀要、17、37-44
- 5) 井上留美、三重野英子、末弘恵恵他 (2010)、実習指導者の実習指導に前向きに取り組むための課題－実習指導の言動力となる重いを通して－、第41回日本看護学会論文集 (看護教育)、49-52
- 6) 溝部佳代、鷺見尚己、武藤真佐子 (2007)、周手術期看護学実習における手術室実習の有効性－学生の手術室看護に関する学びと態度の変化より－、看護総合科学研究会誌、10 (1)、3-14
- 7) 大谷則子、堀之内若名、中井裕子 (2006)、手術室見学実習における学び－二つの実習形態の比較検討により考察－、オペナーシ

# Students' learning from training in operating rooms as viewed by supervisors in charge of clinical training and their requests to students

- An analysis of the results of a questionnaire -

Tomoko NAKADA, Terumi KAWAI

*Department of Nursing, Toyama College of Welfare Science*

## Abstract

In the Department of Nursing of College A, acute-phase adult nursing training is conducted for four weeks, including one-week training in operating rooms. The present study aimed to examine learning effects on students undergoing training in operating rooms - part of adult nursing training, and their development, as viewed by supervisors in charge of clinical training, to provide knowledge required to develop and improve methods for training guidance.

Supervisors in charge of clinical training were asked to respond to a questionnaire survey by describing "changes in students and their development", "challenges for students who have undergone training", and "requests and problems in relation to training", and the descriptions were analyzed. "changes in students and their development" was classified into the following four categories: [understanding of the roles of operating-room nurses], [improvement of knowledge on medical safety and infection control], [understanding of anxiety and pain experienced by patients undergoing surgery], and [attitudes with interests and motivations]. "Challenges for students who have undergone training" was classified into two categories: [studying hard in advance] and [active attitudes]. "Requests and problems in relation to training" was classified into three categories: [clarification of subjects to be learned], [practice of techniques and skills required for surgery], and [exchange of information on students]. The results suggest that the implementation of effective operating-room training requires the following: it is important for students to study hard in advance and prepare themselves for training, and teachers and supervisors in charge of clinical training should collaborate with each other.

Keywords : adult nursing training, operating room, supervisors in charge of clinical training, nursing students

# ポートフォリオを用いた実習指導における教員の振り返り —教員への語りを分析しての考察—

宮城 和美

富山福祉短期大学看護学科

(2015.9.30受稿, 2015.10.30受理)

## 要旨

A 短期大学では、成人看護学実習（慢性期）においてポートフォリオを活用している。本研究では、学生の成長を促すため実習指導においてポートフォリオを活用し、学生との関わり方について教員の語りを分析し、効果的な指導方法について考察することを目的とする。分析結果として、①夢の言語化、②教員間の共通理解、③目標へ向かっての変化、④承認と励ましの4つの概念が抽出された。さらに考察を行った結果、効果的な指導を行うためには、教員間の連携を密にして学生が直面している課題の困惑について共通理解することや、学生の指導や支援の方法について教員の理解を深めるための、指導内容の統一を図る準備が重要であると考えられる。

キーワード：臨地実習指導, ポートフォリオ, インタビューの分析

## 1. はじめに

看護学生の成長を促すには看護教員のスキルアップが求められる。しかし、現代の多様化する学生のニーズや高度化する看護教育の内容から、自分が学習してきた方法で対応できないことが多く、また自己研鑽だけでは成果に限りがある。

厚生労働省の「今後の看護教員のあり方に関する検討会報告書 第一次報告書（平成22年2月）」<sup>1)</sup>は、これからの看護教員に求められる資質と能力として、以下のように記載している。向上すべき資質について①対人関係における自己の表現力や相手に対する理解、②多様な個性を尊重する人権意識や倫理観、看護に対する価値観、③人として、看護職として学生などの目標となることができる人間性、また、求められる能力について①教育実践能力、②コミュニケーション能力、③看護実践能力、④マネジメント能力、⑤研究能力、と教育のあり方を報告している。また、「看護教育の内容と方法に関する検討会報告書（平成22年11月）」<sup>2)</sup>では、看護師教育の現状と課題について「若い世代においては生活体験が乏しくなっている。教育を行う上では教員の丁寧な関わりが必要になってくる。一方で、丁寧な関わりが学生の主体性や自立性を育ちにくくしている側面もあり、教員は葛藤を感じている。」また、「社会人経験のある学生も増えてきており、学習状況や生活体験など様々な面で学生間の差が広がっている。そのため、個々の学生のレディネ

スに合わせた教育を行うことが難しくなっている。」と報告（一部抜粋）している。

A 短期大学では、成人看護学実習（慢性期）においてポートフォリオを取り入れ、学生自身がビジョン・ゴールを考え、実習で学んだことの達成感や充実感を体験できるように、その都度学生と向き合いながら関わってきた。このことは引用文献<sup>3)</sup>で「成人看護学実習前後での看護学生の自己成長過程における変化—ポートフォリオを活用した学び—」に報告があり、学生の実習期間における成長過程に変化をもたらし、学生の自己成長を促進していることが示唆されている。

しかし、ポートフォリオを活用した成人看護学実習において、各学生が実習で何を学んだのかを明確にすることが出来るように、教員が学生への実習指導を振り返り、指導方法がこれでよかったのか、どう対処すれば学生が気づき理解することができたのかなど、学生一人ひとりの対応で考え悩むことが多い。また社会人経験者や、介護福祉士から転職し入学してきた学生も少なからず存在する。言葉の壁を乗り越え来国している学生もいる。このような中で、学生の理解度や学習レベルに差があり、その状況に応じて目標に向けた助言にも時間がかかり、教員は学生との関わりの中で指導のあり方について模索状態である。また他の教員へ相談する間もなく時間が過ぎ教員間の情報共有はできていないのが現状である。

本研究にあたり、「学生指導」、「臨床・臨地実

習]、「教員」を医学中央雑誌 Web 版で検索したところヒットしたのは41件であった。しかし、ポートフォリオを活用した臨地実習において、学生指導のあり方について教員の語りから分析した研究報告例は見当らなかった。

そこで、本研究の目的は、ポートフォリオを活用しながら学生の成長を促すためには、教員が学生とどのように関わればよいのか明らかにし、効果的な指導方法に役立てることである。

## 2. 研究目的

成人看護学実習での学生の成長を促すためにどのように学生に関わったのかを教員の語りを分析し、効果的な指導方法について考察することを目的とする。

## 3. 研究方法

### 3.1 研究対象者

A短期大学 成人看護学実習Ⅱ（慢性期）でポートフォリオを用いた指導をしている科目担当教員1名、実習教員3名の計4名。

### 3.2 実習期間

2013年2月X日～3月Y日、5月X日～6月Y日、6月X日～7月Y日、9月X日～10月Y日（4週間1クール、全4グループ）

### 3.3 データ収集方法

2014年2月14日 16時～17時 A研究室にて実習担当教員4名へインタビュー<sup>6)</sup>を行った。インタビュー者は、公正な内容とする目的で実習担当者以外とした。調査協力の同意を得た上で、グループでの半構成的面接インタビューを行い、その語りを逐語録作成しKJ法によって分析した。途中中断がないよう電話設置していない部屋で行い、また入口には「入室控えて下さい」の掲示をした。

＜グループインタビュー調査の質問項目＞  
 (1) ポートフォリオの活用の中で「学生との関わりから思う悩みや困難」(2) ポートフォリオの活用の中で「教員の学生指導上の課題であると思うこと」(3) ポートフォリオの活用の中で「実習に含ませると良いと思うこと」とした。

### 3.4 分析方法

作成した逐語録より語りの内容を文脈に配慮して文章化しラベル化した。作成したラベルをKJ法<sup>4)</sup>により分析を行った。研究者のうち3名は川

喜田研究所において研修経験を有するもので、記載内容を質的・帰納的に繰り返し集約した。

### 3.5 倫理的配慮

調査インタビューにあたり、研究目的と方法・公表について書面と口頭で説明し同意を得た。分析にあたり、個人が特定されないこと。記録・録音テープは分析終了後に破棄することを説明した。また本研究は、所属機関の倫理審査委員会の承認を得た。(H25-012号)

## 4. 成人看護学実習（慢性期）の概要

3単位：135時間とし、実習期間は2年次後期～3年次後期 4週間を内科系病棟・回復期病棟で実習を行う。

1施設の学生受け入れは8～10名、期間中、受け持ち患者を1名持ち看護過程の展開を行う。教員は1施設1名が担当し、バイタルサインチェックや援助の確認を行いながら慢性期・終末期の看護の展開を実施する。実習状況により教員は学生と個人面談をし、また実習指導者と実習の流れや学生の学ぶ態度について確認を行う。

また実習期間中に、健康管理センターへ半日～1日実習を行う。学内実習は、水曜日の一日と金曜日の午後の半日で実施し、学内では、実習を振り返り学生らが気付いたことや学んだこととして“ひやり・はっと体験”について学生間で発表・報告し情報共有を図り、また自己課題を進め次に繋げられる時間とする。

カンファレンスは、中間カンファレンスの2回（2週目と3週目）と最終カンファレンスで構成され、いずれも学生主体で計画・実施として進められる。

4週目（水曜～金曜日）は、受け持ち患者のケースレポートをまとめる。

[成人看護学実習Ⅱ（慢性期）の実習目的]

慢性疾患患者や終末期にある患者を理解するとともに、共感的態度の育成を目指し、苦痛の緩和や自己実現への支援及びQOLの向上をめざした看護過程を展開する。

[ポートフォリオ]

ポートフォリオ<sup>5)</sup>とは、紙ばさみや作品を選集したものを意味し、作品歴や活動歴を指す。バラバラな情報を集めること、作品を一元化することで価値があるものと言われている。ポートフォリオは、その人の個性や能力・感性・課題発見力・解決力など目に見えないプロセスが見えるものである。

A 短期大学では、ポートフォリオを成人看護学実習Ⅱ（慢性期）に取り入れている。実習初日までに実習の自己目標を「目標書き出しシート」に書き出し、「目標シート」にビジョン・ゴールを描く。目標書き出しシートは、自己の目標を思いのまま書き記す。また目標シートでは、将来なりたい看護師像のビジョンを描き実習後の自分の目標ゴールを記載する。これらを基に教員は学生と個人面談をする。実習期間中は「振り返りシート」を毎週記載し、教員と実習指導者の確認を得る。実習4週目には「成長エントリーシート」、「成長報告書」を記載し、最終カンファレンス資料の一部とし成人看護学実習での成長を報告するとともに、実習指導者など参加者より助言を得る。

## 5. 結果

成人看護学実習（慢性期）指導について教員の振り返りの語りから109枚のラベルを作成し、意味内容の類似性により集約を繰り返した。その結果、1段階目の集約で32の島となり、4段階の集約を経て、最終的に4つの島になった。（表1参照）なお以下の記載において、「」はラベル（表1）を表し、[ ]は1段階目の表札を表す。〈 〉は2段階目の表札、◀ 〉は3段階目の表札を表す。また【 】は4段階目の表札を表し、各島のシンボルマーク（図1）を“ ”で表した。4つの島の内容は、①“夢の言語化”をシンボルマークとする【教員の役割は学生に夢を自己宣言させ自分の力でゴールが出来るよう導きだし関わることである】、②“教員間の共通理解”をシンボルマークとする【教員はコーチング技術を用い教員同士が同じ教育レベルで関わっていくことが大切である】、③“目標へ向かっての変化”をシンボルマークとする◀学生は教員から声掛けされたり自らの思いを書く事により自分の成長に気づき次のステップに繋がっていた〉、④“承認と励まし”をシンボルマークとする◀学生は実習指導者からの暖かいコメントが実習意欲に繋がっていた〉であった。そして、これらの島は互いに関係し合いながら学生の成長につながっているものと考えられる。

以下に各島の内容について述べる。

### 5.1 “夢の言語化”【教員の役割は学生に夢を自己宣言させ自分の力でゴールが出来るよう導きだし関わることである】（図2参照）

この島は◀教員は学生が自分の思いを描け言語

化して自己宣言できるよう関わる事が大切である〉と◀教員の役割は学生と夢について語りあい自分の力でゴールできることを導き出すように関わることである〉の2つの島から成り立っている。

◀教員は学生が自分の思いを描け言語化して自己宣言できるよう関わる事が大切である〉は◀教員は実習初日から学生に目標シートで自己宣言することに時間をかけ学生と一緒に振り返って書かせることが大切である〉、◀教員は学生が何をやりたいのか思考の整理をし実習の振り返りや楽しい思いを発問し言語化して一緒に考えた〉、◀教員は学生と一緒に目標シートを確認することでビジョンが描け学生は思いを書き始めることができた〉の3つの島から成り立っている。

### 5.2 “教員間の共通理解”【教員はコーチング技術を用い教員同士が同じ教育レベルで関わっていくことが大切である】（図3参照）

この島は◀教員はポートフォリオを理解し学生のレディネスに合わせる為にコーチングの技術を活用し同じ教育レベルで関わっていく必要がある〉、◀教員間でお互い抱えている悩みや学生の情報を共通理解し連携をもつ事で自分の中で整理ができた〉、◀教員は目標書き出しシート・目標シートについて書き方を詳しく説明できず教員自身の準備不足を感じた〉、◀教員は学生が目標書き出しシートの分からない事を聞いてこないで困った〉の4つの島から成り立っている。

### 5.3 “目標へ向かっての変化”◀学生は教員から声掛けされたり自らの思いを書く事により自分の成長に気づき次のステップに繋がっていた〉（図4参照）

この島は◀教員は感想カードが書けない学生に対して悲しいことや怒りや学生間のトラブルを文字にさせることで気持ちの変化が読み取れた〉、◀学生は自分の思いを書き込むことで悩みの答えが出せ気持ちを入れかえて頑張ろうと言った〉、◀学生は教員より声かけされたり振り返りシートを書くことで自分の変化に気づき自己効力を高め次のステップに繋がっていた〉の3つの島から成り立っている。

### 5.4 “承認と励まし”◀学生は実習指導者からの暖かいコメントが実習意欲に繋がっていた〉（図5参照）

この島は[学生は実習指導者からのコメントや関わりから自信となり学習意欲に繋がっていた]、



表1 成人看護学実習担当教員からのインタビュー集計

NO	ラベル	1段階目表札	2段階目表札	3段階目表札	4段階目表札
1	学生に実習初日の目標シートを理解させた上で書かせた	目標シートを理解し書かせるが目標が書けないうちに実習先へ出掛けてしまっている	教員は実習初日から学生に目標シートで自己宣言することに時間をかけ学生と一緒に振り返って書かせることが大切である	教員は学生が何をやりたいのか思考の振り返りや楽しい思いを言語化して一緒に考えた	教員は学生が何を描いて言語化して自己宣言できるよう関わる事がある
2	学生は実習初日、自分の目標が書けないうちに実習先に掛けてしまっていた	目標シートを書けないうちに実習先へ出掛けてしまっている			
3	目標シートを学生と一緒に振り返って考えてみたらよかった	目標シートを振り返りながら実習に取り組んだ			
4	学生には実習初日から記録の流れを理解させて書かせることとよい	教員は学生と一緒に振り返りシートを見直しをし、出てくることに気付かせた			
5	教員は学生へ、目標シートについてしっかり自覚させることが大切である	学生は実習で何をやりたいのか思考の整理ができず気持ちのエンジンがかかるのが遅いので発問し関わった			
6	教員は学生に、自己宣言をしてもらうところに時間をかけることが大切である	教員は学生と一緒に振り返りシートを見直しをし、出てくることに気付かせた			
7	教員は目標シートについて、学生へ今までの実習で残念に思ったことを発問し関わった	教員は、学生と一緒に振り返りシートを見直しをし、出てくることに気付かせた	教員は学生と一緒に振り返りシートを見直しをし、出てくることに気付かせた	教員は学生が何を描いて言語化して自己宣言できるよう関わる事がある	
8	学生と一緒に振り返りシートの見直しをし、出てくることに気付かせた	学生は実習で何をやりたいのか思考の整理ができず気持ちのエンジンがかかるのが遅いので発問し関わった			
9	学生は思考の整理ができていないから書けない	教員は学生と一緒に振り返りシートを見直しをし、出てくることに気付かせた			
10	学生へ、成人看護学実習で何をやりたいと思うか発問し関わった	教員は学生と一緒に振り返りシートを見直しをし、出てくることに気付かせた			
11	学生の気持ちに実習に対するエンジンがかかるのが遅い	教員は学生と一緒に振り返りシートを見直しをし、出てくることに気付かせた			
12	教員は学生と一緒に考えながら実習に取り組んだ	教員は学生と一緒に振り返りシートを見直しをし、出てくることに気付かせた			
13	学生の悔しい思いを教員と一緒に言語化した	教員は学生と一緒に振り返りシートを見直しをし、出てくることに気付かせた			
14	学生と一緒に実習の振り返りを言葉に出させた	教員は学生と一緒に振り返りシートを見直しをし、出てくることに気付かせた			
15	学生に助言しながら、一緒に作業を行った	教員は学生と一緒に振り返りシートを見直しをし、出てくることに気付かせた			
16	学生と一緒に実習日誌の内容をひとつひとつひらいた	教員は学生と一緒に振り返りシートを見直しをし、出てくることに気付かせた			
17	書けない学生には、まず自分をださせるといふと思う	教員は学生と一緒に振り返りシートを見直しをし、出てくることに気付かせた			
18	書けない学生には、教員が関わったほうがよい	教員は学生と一緒に振り返りシートを見直しをし、出てくることに気付かせた			
19	学生は、教員や指導者の関わりにより学生の思いが形になっていった	教員は学生と一緒に振り返りシートを見直しをし、出てくることに気付かせた			
20	教員と一緒に学生が目標シートを確認することでビジョンが描き始めることができた	教員は学生と一緒に振り返りシートを見直しをし、出てくることに気付かせた			
21	学生の個性に応じて関わっていくとよい	教員は学生と一緒に振り返りシートを見直しをし、出てくることに気付かせた			
22	個別対応が必要な学生が何人かいた	教員は学生と一緒に振り返りシートを見直しをし、出てくることに気付かせた			
23	学生に個別対応し関わることでより成長できたと思う	教員は学生と一緒に振り返りシートを見直しをし、出てくることに気付かせた			
24	教員の役目は、学生一人ひとりにあわせた表現をしていくこと	教員は学生と一緒に振り返りシートを見直しをし、出てくることに気付かせた			
25	学生の悩んでいる気持ちにも関わってほしい	教員は学生と一緒に振り返りシートを見直しをし、出てくることに気付かせた			
26	落ち込んでしまっている学生は、教員と一緒に日誌を確認しフォローした	落ち込んでいる学生に教員は夢についてじっくり語り合い次に何が出来るか話して関わる必要がある	教員の役割は学生と夢について語りあい自分の力でゴールできることを導き出すように関わることである	教員は学生と一緒に振り返りシートを見直しをし、出てくることに気付かせた	
27	学生へ次に行く実習では何が出来るかなと話して関わる必要がある	落ち込んでいる学生に教員は夢についてじっくり語り合い次に何が出来るか話して関わる必要がある			
28	教員は学生と夢についてじっくり語り合った	落ち込んでいる学生に教員は夢についてじっくり語り合い次に何が出来るか話して関わる必要がある			
29	実習前の、ビジョンとゴールを整えるのが教員の役目で課題である	落ち込んでいる学生に教員は夢についてじっくり語り合い次に何が出来るか話して関わる必要がある			
30	教員の役割は、学生が自分の力でゴールし実習を得ることが出来ることである	落ち込んでいる学生に教員は夢についてじっくり語り合い次に何が出来るか話して関わる必要がある			
31	教員の役目は、学生のもっているものを導きだすよう関わること	落ち込んでいる学生に教員は夢についてじっくり語り合い次に何が出来るか話して関わる必要がある			
32	教員がポートフォリオについて理解して関わるとよい	落ち込んでいる学生に教員は夢についてじっくり語り合い次に何が出来るか話して関わる必要がある			
33	教員がポートフォリオを書く目的を把握するべきである	落ち込んでいる学生に教員は夢についてじっくり語り合い次に何が出来るか話して関わる必要がある			
34	ポートフォリオは何なのか教員が各自学習することが大切である	落ち込んでいる学生に教員は夢についてじっくり語り合い次に何が出来るか話して関わる必要がある			
35	学生の積極性を支えるのがポートフォリオの一つだと意識することが必要である	落ち込んでいる学生に教員は夢についてじっくり語り合い次に何が出来るか話して関わる必要がある			
36	書く目的を教員がまず把握する	落ち込んでいる学生に教員は夢についてじっくり語り合い次に何が出来るか話して関わる必要がある	教員はポートフォリオを理解し教員同士が同じ教育レベルで関わっていくことが課題である	教員は学生と一緒に振り返りシートを見直しをし、出てくることに気付かせた	
37	教員同士、同じ教育レベルで関わっていくことが課題である	落ち込んでいる学生に教員は夢についてじっくり語り合い次に何が出来るか話して関わる必要がある			
38	何のために書くのかという学生に対し教員も理解していなかった	落ち込んでいる学生に教員は夢についてじっくり語り合い次に何が出来るか話して関わる必要がある			
39	教員が学生のレディネスを知る必要がある	落ち込んでいる学生に教員は夢についてじっくり語り合い次に何が出来るか話して関わる必要がある			
40	教員は学生の関わりにコーチングを利用してほしい	落ち込んでいる学生に教員は夢についてじっくり語り合い次に何が出来るか話して関わる必要がある			
41	教員はコーチングの技術を勉強していくといい	落ち込んでいる学生に教員は夢についてじっくり語り合い次に何が出来るか話して関わる必要がある			
42	学生へ具体的に言うと答えになりコメントできなかつた	落ち込んでいる学生に教員は夢についてじっくり語り合い次に何が出来るか話して関わる必要がある			
43	成人看護学実習以外の領域と、学生の情報交換ができたらい	落ち込んでいる学生に教員は夢についてじっくり語り合い次に何が出来るか話して関わる必要がある			
44	成人看護学以外の先生方と学生の問題点を連携できたらいいと思う	落ち込んでいる学生に教員は夢についてじっくり語り合い次に何が出来るか話して関わる必要がある			
45	教員間の情報交換をしたらいい	落ち込んでいる学生に教員は夢についてじっくり語り合い次に何が出来るか話して関わる必要がある			
46	教員間で話し合いをすることにより、改めて確認できた	落ち込んでいる学生に教員は夢についてじっくり語り合い次に何が出来るか話して関わる必要がある	教員間で抱えている悩みや学生の情報を共通理解し連携をもつ事で自分の中で整理ができた	教員は学生と一緒に振り返りシートを見直しをし、出てくることに気付かせた	
47	教員間の連携をもたなければならぬ	落ち込んでいる学生に教員は夢についてじっくり語り合い次に何が出来るか話して関わる必要がある			
48	教員間の情報交換をしなければならぬ	落ち込んでいる学生に教員は夢についてじっくり語り合い次に何が出来るか話して関わる必要がある			
49	学生にまつわる情報交換もあればいい	落ち込んでいる学生に教員は夢についてじっくり語り合い次に何が出来るか話して関わる必要がある			
50	教員同士の共通理解を怠っていた	落ち込んでいる学生に教員は夢についてじっくり語り合い次に何が出来るか話して関わる必要がある			
51	教員間で話し合いをすることにより、自分の中で整理できた	落ち込んでいる学生に教員は夢についてじっくり語り合い次に何が出来るか話して関わる必要がある			
52	教員の悩みも抱え込まないよう話したらいい	落ち込んでいる学生に教員は夢についてじっくり語り合い次に何が出来るか話して関わる必要がある			
53	看護学科全体で学生をどう育てたいのが課題になる	落ち込んでいる学生に教員は夢についてじっくり語り合い次に何が出来るか話して関わる必要がある			
54	ポートフォリオを看護学科全体で取り組んでいくといい	落ち込んでいる学生に教員は夢についてじっくり語り合い次に何が出来るか話して関わる必要がある			
55	学生は、ポートフォリオを書くのは成人看護学実習だけだと思っている	落ち込んでいる学生に教員は夢についてじっくり語り合い次に何が出来るか話して関わる必要がある			

ポートフォリオを用いた実習指導における教員の振り返り  
 —教員への語りを分析しての考察—

NO	ラベル	1段階目表札	2段階目表札	3段階目表札	4段階目表札
56	学生へ目標書き出しシートを具体的に書かせたことにより時間が掛かってしまった	教員は目標書き出しシートに具体的に書かせた事で時間が掛かり目標シートが確認出来なかった	教員は質問してこない学生の対応や目標書き出しシートを具体的に書かせた事で時間が掛かり目標書き出しシートが確認できなかった	教員は目標書き出しシート・目標について書き方を詳しく説明できず自身準備不足を感じた	
57	目標書き出しシートに時間をとると目標シートが確認できなくなる				
58	相談に来ない学生への対応が実習時間外になった	学生は教員に質問してくる学生中心に関わったため言うてこない学生の対応が実習時間外になった			
59	教員に質問してくる学生を中心に関わった				
60	教員は記録の項目について学生へ詳しく説明していなかった為に後から困った				
61	学生から書き方を聞かれたが理解不足で答えることができなかった	教員は、実習前のビジョンとゴールの必要性や書き方が理解不足のために学生より質問されたが答えることができず教員自身の準備不足を感じた	教員がポートフォリオについて事前の準備ができておらず指導が行き届かなかった		
62	全てにおいて教員自身の準備不足だと感じた				
63	教員が、実習前にビジョンの必要性について学生にきちんと話しをしていなかった				
64	教員が、実習前にゴールとは何なのかを学生へきちんと話しをしていなかった				
65	学生一人ひとりにどう関わったらよいか難しい				
66	学生の思いをすみやかに分かってあげられなかった	学生の思いを分かってあげられずビジョンが曖昧な学生にどう指導したらよいか戸惑った			
67	教員が学生に何もしてあげられない自分がいた				
68	ビジョンが曖昧な学生の指導に戸惑った				
69	学生全員に目が行き届かなかった	時間が足りず学生へ目が行き届かなかった			
70	教員に、時間の余裕がなく学生をしっかりと見てやれなかった				
71	書けない学生は自身の考えもなく、教員は何から指導したらよいか戸惑った			教員は目標書き出しシートの分からない事について困った	
72	記録が書けていない学生は教員の所に来ない				
73	理解出来ていない学生はメンバーにも相談していなかった	分からなく書けない学生は自ら相談したりする行動がなかった	教員は、何を書けばいいのか分からず聞いてこない学生に困った		
74	書けない学生は、何を聞いていいのかが分からない状況だった				
75	分かっていない学生は教員にも聞いて来なかった				
76	何を聞いていいか分からない学生は取り残されてしまっていた				
77	教員が言ったことだけしかしない学生がいる				
78	学生自身が、達成したことは何もないと書いてきた				
79	学生に自身の実習目的をしっかりと明記しなさいと話した				
80	学生に思っていることを細かく書き出してみなさいと話した				
81	学生は事前に、目標書き出しシートの用紙3分の2は書いてきてほしい	学生に、目標書き出しシートを用紙の3分の2程度を書いて来てほしい			
82	目標書き出しシートに時間を掛け過ぎないで次の過程へ進んだ方が振り返りの成長に繋がった				
83	学生の記録内容が趣旨とあっていない	教員は学生に課題を書くように話しても理解しておらず記録内容がズレていた			
84	教員が、課題を書きように話してもピンとこない学生がいた				
85	感想カードは自由に自分の今の気持ちを書き出し息抜き目的に使って下さいと話した	教員が感想カードを書けない学生に対し悲しいことや怒りや自分の思いを文字にし息抜きすることに使えばよいと話した	教員は感想カードが書けない学生に対して悲しいことや怒りや学生間のトラブルを文字にさせることで気持ちの変化が読み取れた		
86	感想カードが書けだせない学生へ、辛いことも書いてよいと話した				
87	教員は学生へ、感想カードに何でも書いていいと話した				
88	感想カードに、自分の思いを文字にするといよいよ言った				
89	感想カードに、自分の怒りを吐き出してみるよう話した				
90	感想カードを主語や述語、形容詞など気にしないで自由に思いを吐き出していた	感想カードの主語や述語や形容詞は書けていないが学生間のトラブルについて吐き出したことにより気持ちの変化が読み取れた			
91	学生が書いた感想カードの内容から、気持ちの変化が読みとれた				
92	感想カードに学生間のトラブルを吐き出していたが、解決した内容に変わっていた				
93	感想カードに書くことで、自分の悩みに答えができてきた				
94	学生自身が、自分が書いた感想カードを見て、気持ちを入れて頑張ろうと言っていた	学生自身、自分が書いた感想カードをみて気持ちを入れて頑張ろうと言った	学生は自分の思いを書き込むことで悩みの答えがみえて気持ちを入れて頑張ろうと言った	学生は教員から声掛けされたり自らの思いを書く事により自分の成長に気づき次のステップに繋がっていた「目標に向かった変化」	
95	学生は、感想カードを書いているうちに頑張ろうに繋がっていた				
96	教員が、出来ているんでしょうと声掛けすると自信を取り戻していた	学生は教員から出来ていることや成長していることを声掛けされると自信を取り戻していた			
97	教員から、自己評価が低い学生へ成長したねと声掛けすると自信を取り戻していた				
98	学生が自分の気持ちの変化を書くことにより自身の振り返りに繋がっていた	学生は振り返りシートを書くことで自分の変化に気づき自分を褒めて自己効力を高め次のステップに繋がっていた	学生は教員より成長していることを声掛けされたり振り返りシートを書くことで自分の変化に気づき自己効力を高め次のステップに繋がっていた		
99	学生が書いた振り返りシートは、次のステップに繋がっていた				
100	振り返りシートから、学生自身が自分を褒めて自己効力を高めていた				
101	学生は振り返りシートに、教員から指導を受けたことで広い視野をもつことができたと言っていた	教員は学生に考えさせる時声掛けだけでなく振り返りシートに自分の言葉で書いてもらうことにより学生は広い視野をもつことができていた			
102	学生に考えさせる時、声掛けだけでなく、文字に書かせてみればよかったと思う				
103	教員は学生へ、まず自分の言葉で書き出してみるように話すことが大事である				
104	学生が、実習指導者に関わって頂き助言をもらうことで自信に繋がっていた			学生は実習指導者からの暖かいコメントが実習意欲に繋がっていた「承認と励まし」	
105	学生は、指導者から努力を認めてもらえたと感じたことにより実習意欲が高まっていた				
106	実習指導者からのコメントを書いてもらうことで学生が頑張ろうという気持ちになっていた	学生は実習指導者からのコメントや関わりから自信となり学習意欲に繋がっていた			
107	実習指導者からのほめられたコメントは学生の意欲につながっていた				
108	実習指導者のコメントは学生にとって励ましとなり良い方向となっていた				
109	実習指導者からのコメントは学生の実習の振り返りに繋がっていた				

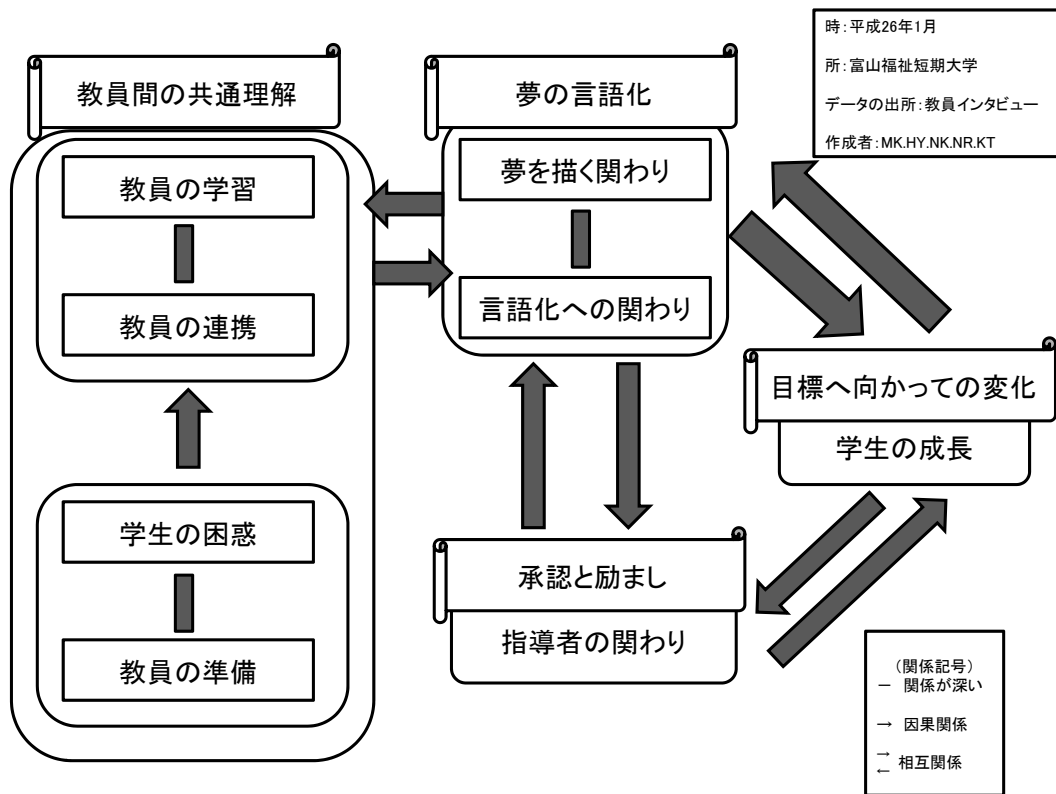


図1 ポートフォリオを取り入れた実習での学生の成長過程

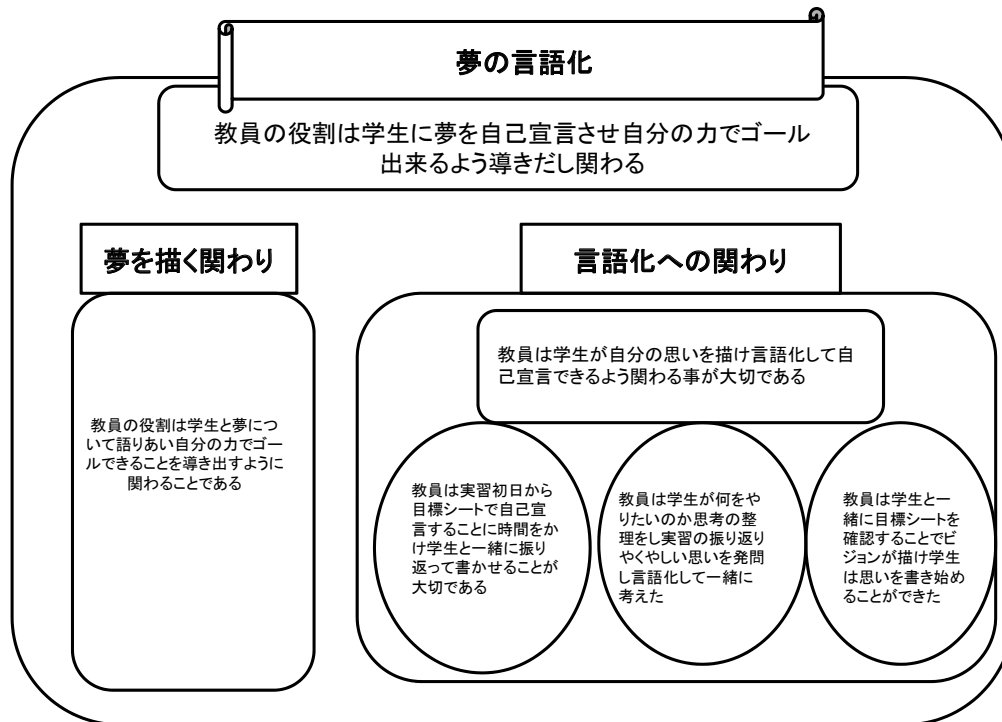


図2 教員の役割

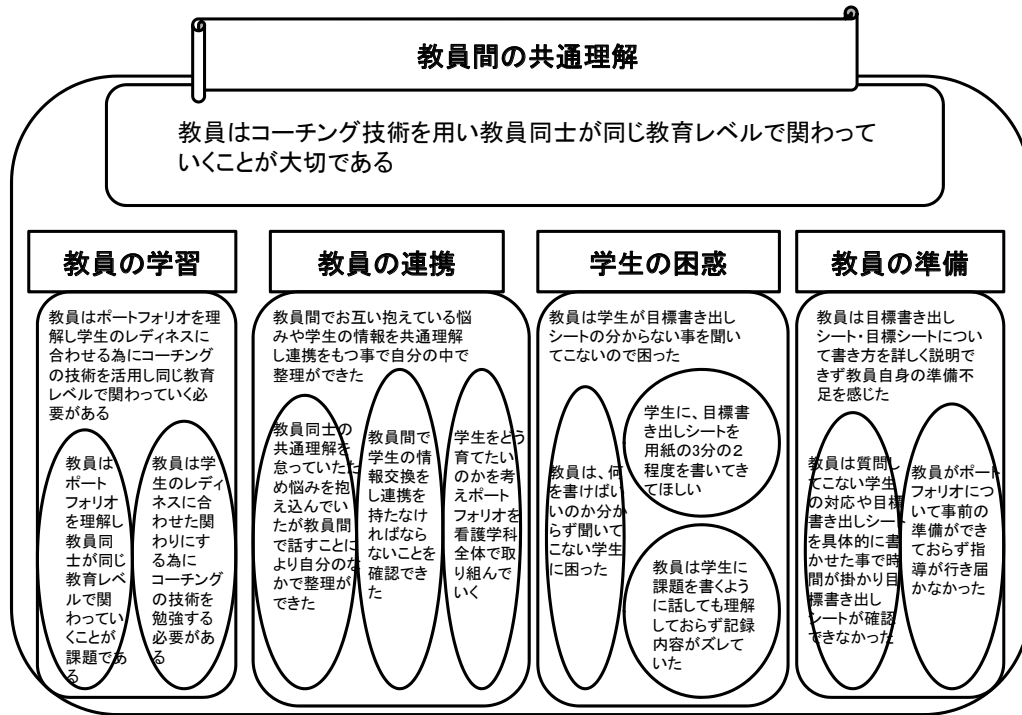


図3 教員間の共通理解

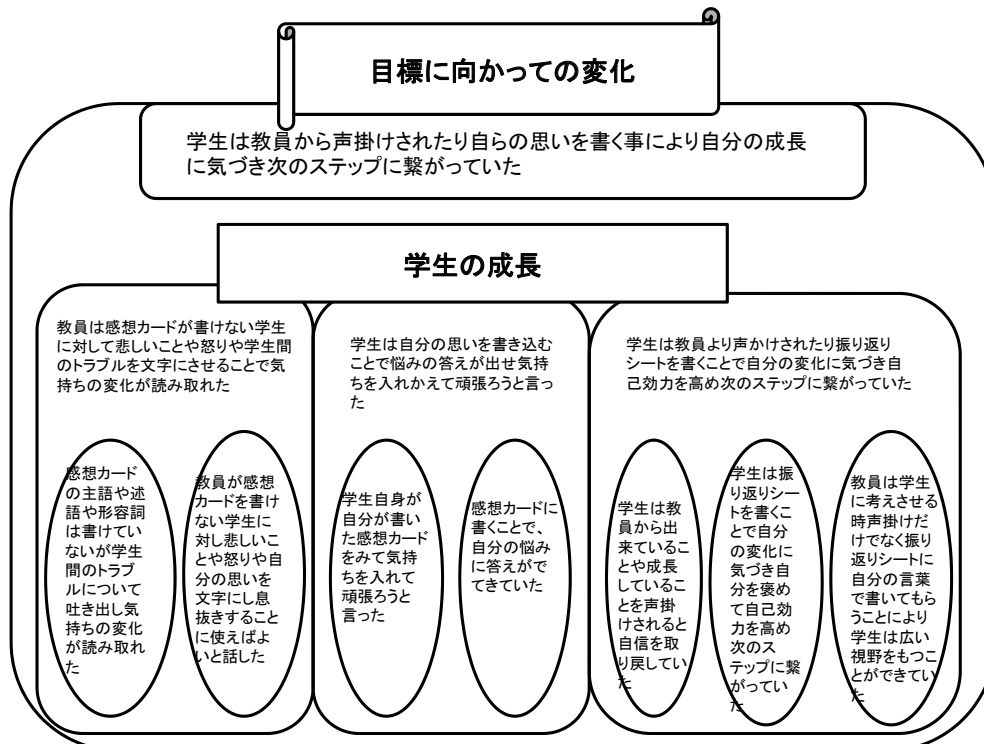


図4 目標に向かっての変化

「実習指導者からのコメントは学生の実習の振り返りに繋がっていた」の2つの島から成り立っている。

## 6. 考察

A 短期大学、成人看護学Ⅱ（慢性期）の実習を担当した教員へ、ポートフォリオを活用した実習から学生への関わりを振り返り、学生指導についてどんな思いがあったのかについて生の声を聞くインタビュー法から教員の語りを分析した。

インタビューの質問項目は、ポートフォリオの活用の中で「学生との関わりから思う悩みや困難」、「教員の学生指導上の課題であると思うこと」、「実習に含ませると良いと思うこと」とした。逐語録による分析から4つの概念（島）が抽出された。これは①“夢の言語化”、②“教員間の共通理解”、③“目標へ向かっての変化”、④“承認と励まし”であった。以下に4つ概念（島）について考察する。

### 6.1 “夢の言語化”

【教員の役割は学生に夢を自己宣言させ自分の力でゴールが出来るよう導きだし関わることであり】において、＜教員は学生が自分の思いを描き言語化して自己宣言できるよう関わる事が大切である＞では、＜教員は実習初日から学生に目標シートで自己宣言することに時間をかけ学生と一

緒に振り返って書かせることが大切である＞とし、[目標シートを理解し書かせるが目標が書けないうちに実習先へ出掛けてしまっているので学生と一緒に振り返って考えたら良かった]については、「学生は実習初日、自分の目標が書けないうちに実習先に出掛けてしまっていた」の発言があった。[教員は学生に実習初日から目標シートで自己宣言することに時間をかけ目標シートをしっかりと自覚させ書かせることが大切である]については、「教員は学生へ、目標シートについてしっかりと自覚させることが大切である」、「教員は学生に、自己宣言をしてもらうところに時間をかけることが大切である」と発言があった。＜教員は学生が何をやりたいのか思考の整理をし、実習の振り返りやくやしい思いを発問し、言語化して一緒に考えた＞では、「学生と一緒に振り返りシートの見直しをし、出来ていることに気付かせた」、「学生と一緒に実習の振り返りを言葉に出させた」、また＜教員は学生と一緒に目標を確認することでビジョンを描け学生は思いを書き始めることができた＞では、「学生は、教員や指導者の関わりにより学生の思いが形になっていった」と発言があった。学生と教員が一緒に考え振り返って書かせたり、悔しい思いを言語化させたり、学生がビジョンを描き始められるよう目標と一緒に確認する関わりを行っていたことから、学生には自身の思いを描くことが出来、言語化し自

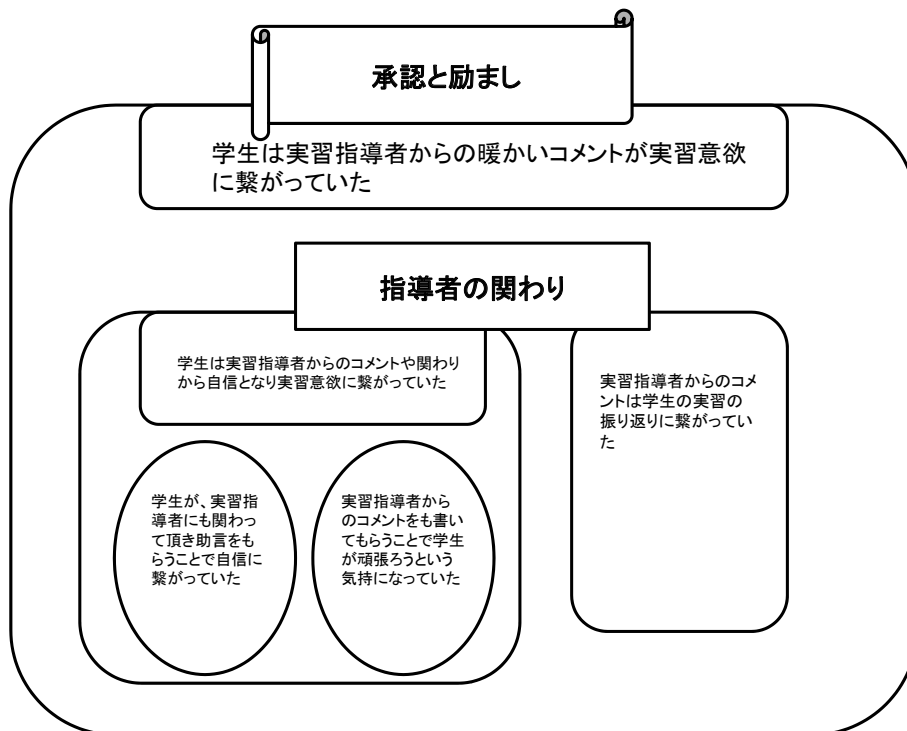


図5 承認と励まし

己宣言できるよう学生と教員が向き合って関わる必要があると考えられる。

また、＜教員の役割は学生と夢について語りあい自分の力でゴールできることを導き出すように関わることである＞では、「学生の個別性に応じて関わっていくとよい」、「教員の役目は、学生一人ひとりにあわせた表現をしていくこと」、「学生の悩んでいる気持ちにも関わっていけるといい」、「教員の役割は、学生が自分の力でゴールし、実習を得ることができることである」、「教員の役目は、学生のもっているものを導きだすよう関わること」と教員は発言している。学生の個別性に合わせた表現をし、学生の悩んでいる気持ちに触れるとともに、学生とじっくり語り合い、何ができるのかを一緒に考え、関わっていく必要がある。また、学生自身がゴールとビジョンを描くことができるように、関わりをもつことも大切である。大浦<sup>7)</sup>は、「実習目的も学生自身が、内容・意義を理解した上で自ら担うべき努力の方向を堅持するようになることが望まれる。学生達をそのように導くことができるなら、目標の達成に直接的な助力が得られることになる。」としている。また、多田<sup>8)</sup>は、「学生の学習活動が自発的に進められるよう、観察し求めに応じて示唆していく。教師の指導援助の手を差し伸べる姿が、望ましい教授学習の原理であるといえる。また、人には個人差がある。学生の個人差を明確に把握し、それに応じる指導をしなくてはならない。」と述べている。このことから実習担当教員の役割は、学生が将来の目標が看護師になるという夢に繋げられるように、また自らの思いを表現できない学生に言語を使って明確化できる関わりを行うことにより、学生の成長を促すことができると考えられる。

## 6.2 “教員間の共通理解”

【教員はコーチング技術を用い教員同士が同じ教育レベルで学生へ関わっていくことが大切である】において、＜教員はポートフォリオを理解し学生のレディネスに合わせるためにコーチングの技術を活用し、同じ教育レベルで関わっていく必要がある＞では、「教員がポートフォリオについて理解して関わるとよい」、「学生の積極性を支えるのがポートフォリオの一つだと意識することが必要である」と発言している。教員はまず使用しているポートフォリオをについて再確認し、どんなものなのか、書く目的など、理解するために学習し理解しておくことが、学生の積極性を支え、レディネスに合わせた関わりに繋がるといえる。

[教員は学生のレディネスにあった関わりをするためにコーチング技術を勉強し、利用する必要がある]では、「教員が学生のレディネスを知る必要がある」、「教員は学生の関わりにコーチングを利用してほしい」と発言があり、教員は学生のレディネスを知ること、またコーチングの技術について教員自身が学習することが必要である。＜教員間でお互い抱えている悩みや学生の情報を共通理解し、連携をもつ事で自分の中で整理ができた＞では、＜教員間で学生の情報交換をし、連携を持たなければならないことを確認できた＞、＜教員同士の共通理解を怠っていたため悩みを抱え込んでいたが、教員間で話すことにより自分のなかで整理ができた＞とし、「成人看護学実習以外の領域と、学生の情報交換ができたらよい」、「教員間で話し合いをすることにより、改めて確認できた」、「教員の悩みも抱え込まないように話したらいい」と発言があった。また「看護学科全体で学生をどう育てたいのかが課題になる」とも述べていた。学生に関わっている看護学科の教員との学生情報の交換や、教員自身の中で考えを整理するためにも教員間の連携をもつ機会が必要である。＜教員は目標書き出しシート・目標シートについて書き方を詳しく説明できず教員自身の準備不足を感じた＞では、＜教員がポートフォリオについて事前の準備ができておらず指導が行き届かなかった＞とし、「教員は記録の項目について学生へ詳しく説明していなかったために後から困った」、「教員が、実習前にビジョンの必要性について学生にきちんと話しをしていなかった」、「教員が、実習前にゴールとは何かを学生へきちんと話しをしていなかった」との発言より、教員自身のなかで実習開始にあたり学生に対しての十分な説明をおこなっておらず、準備不足があったと振り返っている。また、＜教員は質問してこない学生の対応や目標書き出しシートを具体的に書かせた事で時間が掛かり目標書き出しシートが確認できなかった＞では、「目標書き出しシートに時間をとると目標シートが確認できなくなる」、「相談に来ない学生への対応が実習時間外になった」、「教員に質問してくる学生を中心に関わった」、「ビジョンが曖昧な学生の指導に戸惑った」と発言があり、質問があった学生には指導ができているが、全員に対しては目が行き届かなかったとしている。事前の準備が整っていれば、学生の理解も得られ学生全員への対応ができたと考えられる。＜教員は学生が目標書き出しシートの分からない事を聞いてこないで困った＞では、＜教員は、

何を書けばいいのか分からず聞いてこない学生に困った>、[教員は学生に課題を書くように話しても理解しておらず記録内容がズレていた]とし、「記録が書けていない学生は教員の所に来ない」、「理解出来ていない学生はメンバーにも相談していなかった」、「何を聞いていいか分からない学生は取り残されてしまっていた」、「学生に思っていることを細かく書き出してみなさいと話した」、また「学生の記録内容が趣旨とあっていない」、「教員が、課題を書くように話してもピンとこない学生がいた」と発言があった。質問がない学生や記録が書けていない学生はどうしていいのか分からず、他の学生から取り残されてしまう現状がある。1つの実習場で時間をかけて卒業時の到達目標に達するような実習の編成や、体験や獲得した能力を継続的に記録したポートフォリオの活用は効果がある<sup>1)</sup>。このことをまず理解し、教師が共通かつ並行的に、あるいは直接に協働して取り組むことに留意すれば、教師間のまともな維持され、同じ教育レベルで関わっていくことができる<sup>7)</sup>。これらのことより、学生指導にかかる共通理解として、教員の事前準備の不足が学生の困惑を招くので、教員同士の連携や教員自身の学習を行い教員間の共通理解が重要であると考えられる。

### 6.3 “目標に向かった変化”

〈学生は教員から声掛けされたり自分の思いを書く事により自分の成長に気づき次のステップに繋がっていた〉について、〈教員は感想カードが書けない学生に対して悲しいことや怒りや学生間のトラブルを文字にさせることで気持ちの変化が読み取れた〉と関連づける。「感想カードに、自分の思いを文字にするといいよと言った」、「感想カードに、自分の怒りを吐き出してみよう話した」、「感想カードを主語や述語、形容詞など気にしないで自由に思いを吐き出していた」、「感想カードに学生間のトラブルを吐き出していたが、解決した内容が変わっていた」、と発言があり、教員は学生が自分の思い感想カードが書けだせないことに対し、書き出すきっかけになるように助言を行っている。〈学生は自分の思いを書き込むことで悩みの答えが出せ気持ちを入れかえて頑張ろうと言った〉では、「感想カードに書くことで、自分の悩みに答えがでてきていた」、「学生は、感想カードを書いているうちに頑張ろうに繋がっていた」と発言しており、学生自身が書いた感想カードを振り返ったことにより、気持ちを入れて

かえて頑張ろうという実習意欲に繋がり、学生の成長に参与している。〈学生は教員より声かけされたり振り返りシートを書くことで自分の変化に気づき自己効力を高め次のステップに繋がっていた〉では、「教員が、出来ているんでしょと声掛けすると自信を取り戻していた」や「学生が自分の気持ちの変化を書くことにより自身の振り返りに繋がっていた」。また「振り返りシートから、学生自身が自分を褒めて自己効力を高めていた」、「学生は振り返りシートに、教員から指導を受けたことで広い視野をもつことができたと書いていた」、と発言があった。看護師教育における教育内容と方法について、実践能力を育成するためには、実習施設や対象者の特性に合わせて、看護の領域を横断した教育内容で実習を行うことや、実践と思考を連動させながら学ぶことができるように、実習で体験したことについて振り返りを行うことが重要であると、文献<sup>2)</sup>では述べられている。このことから、教員が直接学生へ出来ていることや成長したと感ずることについて声を掛けることにより、学生は自信を取り戻している。また振り返りシートを書くことで、自分の目標に対する意識の変化に気づき、次のステップに繋がっている。

### 6.4 “承認と励まし”

〈学生は実習指導者からの暖かいコメントが実習意欲に繋がっていた〉について、[学生は実習指導者からのコメントや関わりから自信となり学習意欲に繋がっていた]では、「学生が、実習指導者に関わって頂き助言をもらうことで自信に繋がっていた」、「学生は、指導者から努力を認めてもらえたと感じたことにより実習意欲が高まっていた」、「実習指導者のコメントは学生にとって励ましとなり良い方向となっていた」と発言しており、実習指導者のコメントから、学生は実習行動や考えを認めてもらったと自信がもて実習意欲に繋がっている。また、「実習指導者からのコメントは学生の実習の振り返りに繋がっていた」について、実習指導者からのコメントとしており、実習指導者との関わりから、学生は実習を振り返り自らを見直す良いきっかけになっている。また、コメントをもらうことにより学生にとって良い励ましになっている。これらのことより、学生指導には学生の発言や行動に対して、学生が頑張っていることや努力していることを認め受容し、自信をもてる励ましも学生の成長に参与しているといえる。國眼<sup>9)</sup>は、特性をみつけ、それを

生かす、そしてとにかく一步を踏み出す、さらにそれをサポートする人を得る、これが若者の成長にとって大切なことと述べている。

以上の分析結果より、実習担当教員の学生への関わりは、各学生の状況に応じた対応から実習意欲を感じさせていた。さらに課題として、学生の実習意欲につながり自信がもてる指導や支援の方法について教員の理解を深める検討をしていかなければならないと考える。

## 7. 結論

本研究では、A 短期大学において成人看護学実習（慢性期）の担当教員がポートフォリオを活用した実習指導の中で、学生の成長を促すためにどのように関わったのかを教員の語りから分析し、効果的な指導方法について考察することを目的とした。

その結果、学生の困惑として教員の实習における準備や学習不足、教員間の連携不足、学生がどうしていいのかわからない理解不足や将来の夢の曖昧さがあげられた。

また、①夢の言語化、②教員間の共通理解、③目標に向かっての変化、④承認と励ましという4つの概念が抽出された。

これらの結果から、実習担当教員はポートフォリオの目的を十分把握した上で学生と関わり、理解ができなくて戸惑っている学生には時間をかけ理解ができるように導き、自分の力で考えて学ぼうとする姿を認め受容し、励ますことが学生の成長過程には必要である。更には、教員自身の学生指導内容や支援の方法について教員の理解を深めると共に、事前に教員同士が学生の情報を共通理解し連携することで、同じ教育レベルで学生のレディネスに合わせた指導を行うことも重要であると考えられる。

## 謝辞

本研究において、ご協力いただきました実習担当教員の皆様に深く感謝いたします。

## 引用文献

- 1) 厚生労働省 (2010)、今後の看護教員のあり方に関する検討会報告書、平成 22 年 2 月 17 日、p2-3
- 2) 厚生労働省 (2010)、看護教育の内容と方法に関する検討会報告書 第一次報告書、平成 22 年 11 月 10 日、p2
- 3) 宮城和美 (2013)、成人看護学実習前後での

看護学生の自己成長過程における変化—ポートフォリオを活用した学び—、共創福祉第 8 巻第 2 号富山福祉短期大学、p33-39

- 4) 川喜田二郎 (1986)、KJ 法—渾沌をして語らしめる、中央公論社
- 5) 鈴木敏恵 (2006)、ポートフォリオ評価とコーチング手法、医学書院
- 6) 安梅勅江 (2003)、グループインタビュー法 II / 活用事例編、医歯薬出版株式会社、p 149
- 7) 大浦猛 (2001)、教育の本質と目的、学芸図書株式会社、p51-110
- 8) 多田俊文 (2004)、教育原理八訂版 教育の目的・方法・制度、学芸図書株式会社、p52-82
- 9) 國眼真理子 (2007)、コーチング事例増補版 いまどきの若者の考え方・育て方、日総研



**Reflection of teachers' guidance of students by using  
portfolios in practice nursing  
—A discussion through an analysis of communications  
between teachers—**

**Kazumi Miyagi**

*Department of Nursing, Toyama College of Welfare Science*

Abstract

In junior college A, portfolios are used as an educational tool in adult (chronicle) nursing practice. This study aims to make clear how to effectively guide students in such nursing practice by analyzing the communications between teachers trying to promote students' growth through utilizing the portfolios. Four concepts are extracted as a result of the analysis; making by speech dreams/goals of the students to concrete forms, teachers' sharing the students' situations by good communication between the teachers, changes in the students toward achieving goals, and giving approvals and encouragements to the students.

Further analysis has lead to the importance of the teachers' sharing what difficulties students face and having integrated contents in instructing and guiding the students, including the importance of making efforts to promoting learning of the teachers.

Keywords : practicing nursing, portfolio, interview analysis

## 介護学生が高齢者施設の実習を通して認識した倫理的問題

小出 えり子<sup>1)</sup>, 境 美代子<sup>2)</sup>, 河相 てる美<sup>2)</sup>

1) 富山福祉短期大学社会福祉学科介護福祉専攻 2) 看護学科

(2015.9.30受稿, 2015.10.30受理)

### 要旨

A福祉短期大学の介護福祉士養成教育では、講義の中で高齢者の倫理的問題について事例検討を通して理解を深める内容としている。介護学生が高齢者の尊厳を理解して倫理的問題を認識し実習に臨んだことについて検討し、今後の介護領域における倫理的教育の方向性を検討したので報告する。T県内の37施設にて実習した学生49名のうち、35名(73%の回答率)の学生の回答について分析した。「倫理的問題があった」と回答した学生が、27名(77%)で、約6割の学生が直面した倫理的問題について指導者や教員、学生に相談していた。またその倫理的問題について4割の学生が改善方法を考えていたと回答していた。体験した倫理的問題の内容を類似した項目に分類した結果、《高齢者の人権に関する問題》《基本的生活支援に関する問題》の2つのカテゴリーに分類した。また〈尊厳を守る支援〉〈療養上の自己決定の支援〉〈排泄に関する支援〉〈入浴に関する支援〉〈食事に関する支援〉の5つのサブカテゴリーに分類した。実習を通して介護学生が認識した倫理的問題としては、授業を通して対象者の人権や尊厳ある対応をすることの大切さを理解したことにより、高齢者への基本的な生活支援である排泄、入浴、食事、および高齢者の人権に関する問題を倫理的問題として認識したと考えられる。

キーワード：介護学生、倫理的問題、高齢者施設

### 1. はじめに

介護福祉士は、日本介護福祉士会倫理綱領(1995年11月7日宣言)の中で、私たち介護福祉士は、介護福祉ニーズを有する全ての人々が、住みなれた地域において安心して老いることができ、そして暮らし続けていくことのできる社会の実現を願っています。そのため、私たち日本介護福祉士会は、一人ひとりの心豊かな暮らしを支える介護福祉の専門職として、倫理綱領を定め、自らの専門知識、技術及び倫理的自覚を持って、最善の介護福祉サービスを提供していきます。と前文に掲げて以降、7つの項目である『1.利用者本位、自立支援、2.専門的サービスの提供、3.プライバシーの保護、4.総合的サービスの提供と積極的な連携、協力、5.利用者ニーズの代弁、6.地域福祉の推進、7.後継者の育成』<sup>1)</sup>をあげている。しかしながら、倫理綱領の宣言が「看護者の倫理綱領」に比較して関係職種への周知が遅く、介護養成校等における倫理教育は実施されているが、その教育効果などの実践報告がされていない現状がある。そこで本研究においては、看護基礎教育における倫理教育内容と同様に「介護の基本」の授業の中で、特に高齢者の尊厳を守る基本姿勢を中心とする倫

理教育を実施した。その後の介護実習での倫理的問題の事例分析と学生の気づきからその教育効果を考察する。また、ここでは、倫理的問題は、日々の業務の中で、何が正しくて何をなすべきなのかという行動の善悪を考慮すべき問題のことと定義する。

介護現場では、認知症などの特有な症状を呈する対象者に対して人権を保護し、尊厳を考慮して倫理的視点で行動することが重要となる。介護福祉士は、利用者にとって医療福祉の専門職の中で一番近い距離にあって日々の利用者の基本的な日常生活の支援に当たっている。ゆえに介護福祉士をめざす学生が基礎教育において倫理を学ぶことは、倫理的問題を認識し、倫理的思考、倫理的判断のプロセスを踏まえて正しく倫理行動ができ、それが倫理感性を育成することにつながると考える。

### 2. 研究目的

A介護養成校学生が実習を通して認識した倫理的事例を分析し実態を把握するとともに、授業の成果について考察することで、今後の倫理的行動を遂行できる機会になる。

### 3. 研究方法

#### 3.1 研究期間

平成26年9月～12月

#### 3.2 研究対象者

A介護養成校学生の2年生49名。倫理的問題の講義を受講し、T県内の介護実習施設37施設（介護老人福祉施設19施設、介護老人保健施設18施設）にて実習した49名のうち質問紙調査を提出した35名。

#### 3.3 研究方法

授業科目「介護の基本」で「高齢者の倫理的問題」について事例検討をする。本研究は、介護学生2年生が介護実習前に、「介護の基本」の講義（2コマ）において倫理教育を受講し、実習に臨んだ。講義後の介護実習を通して、倫理的問題の認識や対処について質問紙調査（無記名、半構成的質問）を実施し考察する。質問用紙の分析結果から教育効果を考察し、その効果を今後の倫理教育に活かすことができ、倫理的視点で判断できる介護福祉士の育成に繋がる。

#### 3.4 データ分析方法

学生が実習中に体験した倫理的問題と認識した事例内容をカテゴリー分類し、サブカテゴリー、カテゴリーを形成していった。研究者3名で記載内容について検討し、合意形成を行いながら分析し、カテゴリー分けする。

#### 3.5 倫理的配慮

対象学生には、口頭で研究の目的と趣旨の説明を行った。また、課題レポートは研究以外に使用しないことや研究への不参加によって不利益が生じないことを書面で同意を得た。また、A福祉短大倫理審査委員会の承認を得て実施した。（福祉H26-016号）

## 4. 結果

### 4.1 倫理の授業概要と参加学生の概要

介護学生は、2年次後期の実習前に「介護の基本」の授業（2コマ）で、倫理原則や人権擁護、ケアリングなどの概念を学び、倫理問題事例を分析した。ここでは介護士として高齢者の尊厳や対象者の人権を尊重した行動をとることが大切であることを理解し、倫理的問題について認識し倫理行動が取れるように、グループワークを通して学んだ。その後の3週間の施設実習を通して、

倫理的問題として捉えて学生自身が体験したこと、認識したことを実習終了後に質問紙調査（無記名、半構成的質問）を行った。質問内容は、実習中に1）倫理的問題を認識できたか（その内容については自由記載とした）。2）倫理的問題を誰かに相談することができたか。3）誰に相談したのか。4）倫理的問題の対処方法について考えることができたか。以上の4点について回答を求めた。

### 4.2 倫理的問題事例のカテゴリー分類について（表1）

T県内の37施設にて実習した学生49名で、回答の得られた35名（73%の回答率）のレポートから得られた倫理的問題事例の内容を類似したものを項目分けした50件の内容を分析対象とした。その結果、2つのカテゴリーと5つのサブカテゴリーに分類した。（表1）。次にそのカテゴリーとサブカテゴリーについて説明する。

（以下《 》をカテゴリー、〈 〉をサブカテゴリーで表す。〔 〕内の文章は、レポート内の文章を抜粋したものである）

1) 《高齢者の人権》2) 《基本的生活支援》の2つのカテゴリーに分類した。《《高齢者の人権》としてのサブカテゴリーは、〈尊厳を守る支援〉〈療養上の自己決定の支援〉2つのサブカテゴリー、さらに《基本的生活支援》では、〈排泄に関する支援〉、〈入浴に関する支援〉、〈食事に関する支援〉など）の3つサブカテゴリーに分類した。表1に集計結果を示す。その結果、《高齢者の人権》では15事例あった。その中で〈尊厳を守る支援〉では9事例、〈療養上の自己決定の支援〉では6事例あった。また、《基本的生活支援》では35事例あった。その中で〈排泄に関する支援〉15事例、〈入浴に関する支援〉12事例、〈食事に関する支援〉8事例であった

介護学生が、実習を通して倫理的問題であると認識した事例の内容を下記に述べる。

#### 1) 《高齢者の人権に関する問題》

① 〈尊厳を守る支援〉の事例内容においては、〔介護士が、何度も同じ訴えをする認知症の利用者に対して、真剣に返答されていない時があった〕〔すぐ服を抜いてしまう利用者に対して介護士が更衣介助しないでそのままにしていた〕〔徘徊している利用者に対して介護士は優しい言葉がけができていなかった〕〔利用者のすることに対して介護士は否定的な言動をしている時があった〕〔10時頃、居室で横になっていた利用者に対して介護士

が、もうすぐお昼ごはんだからと起こしている場面があった〕〔車いすの利用者に、自由に移動できないように、身体拘束していた〕と記述していた。

②〈療養上の自己決定の支援〉の事例内容においては、〔電話をかけたいという利用者に介護職員が対応していなかった〕〔利用者の病名や個人情報に関わることを介護職員間での日常会話で話すのが気になった〕〔徘徊している利用者に対して、フロアから出ないように扉にロックをしていた〕と記述していた。

2) 《基本的生活支援に関する問題》

①〈排泄に関する支援〉の事例の内容においては、〔おむつ交換で、オムツの台車を居室まで

持ってきておむつ交換していた〕〔交換したオムツが台車の上にそのまま置いてあった（袋に入っていなかった）〕〔介護職員が大きな声でトイレ誘導を促していた〕〔トイレ介助時は戸は閉めないで、カーテンのみであった〕〔オムツ交換時、介護職員同士の会話（私語）が見られた〕〔おむつ交換の時利用者さんにタオルを掛けるなどの配慮が見られなかった〕〔トイレに行きたい利用者に対して、おむつでするようにと介護職員が話していた〕〔認知症の利用者に対してのおむつ交換に対するプライバシーへの配慮がなされていなかった〕〔何回もトイレに行きたいと訴える利用者に対して対応しなかったり、時間まで待とうと言っていた〕と記述していた。

表1 倫理的問題事例のカテゴリー分類

カテゴリー	サブカテゴリー	倫理的問題であると認識した内容 50 件より	事例数
高齢者の人権	尊厳を守る支援	・介護士が、何度も同じ訴えをする認知症の利用者に対して、真剣に返答されていない時があった。	9 件
		・すぐ服を抜いてしまう利用者に対して介護士が更衣介助しないでそのままにしていた。	
		・徘徊している利用者に対して介護士は優しい言葉がけができていなかった。	
		・利用者のすることに対して介護士は否定的な言動をしている時があった。	
		・10 時頃、居室で横になってた利用者に対して介護士が、もうすぐお昼ごはんだからと起こしている場面があった。	
	車いすの利用者に、自由に移動できないように、身体拘束していた。		
療養上の自己決定の支援	・電話をかけたいという利用者に介護職員が対応していなかった。	6 件	
	・利用者の病名や個人情報に関わることを介護職員間での日常会話で話すのが気になった。		
基本的生活支援	排泄に関する支援	・徘徊している利用者に対して、フロアから出ないように扉にロックをしていた。	15 件
		・おむつ交換で、オムツの台車を居室まで持ってきておむつ交換していた。	
		・交換したオムツが台車の上にそのまま置いてあった（袋に入っていなかった）。	
		・介護職員が大きな声でトイレ誘導を促していた。	
		・トイレ介助時は戸は閉めないで、カーテンのみであった。	
		・オムツ交換時、介護職員同士の会話（私語）が見られた。	
		・おむつ交換の時利用者さんにタオルを掛けるなどの配慮が見られなかった。	
		・トイレに行きたい利用者に対して、おむつでするようにと介護職員が話していた。	
	入浴に関する支援	・認知症の利用者に対してのおむつ交換に対するプライバシーへの配慮がなされていなかった。	12 件
		・何回もトイレに行きたいと訴える利用者に対して対応しなかったり、時間まで待とうと言っていた。	
		・入浴介助中に、カーテンのしきりがあるのに使用されていなかった。入浴介助中や移動中プライバシータオルが掛けられていなかった	
		・入浴を終えた利用者がベッド上で処置や軟膏塗布していたが、カーテンが使用されていなかった。脱衣室では、男女の区別なく着替えている場面があった。	
	食事介助に関する支援	・入浴介助しながら、介護職員間の会話が聞かれた。（私語）	8 件
		・脱衣場と浴室の温度差がみら、器械浴のベットが冷たい状態で利用者を移動させている場面があった。	
		・入浴を嫌がる利用者の服を本人の同意なく脱がせている場面があった。	
・介護職員が立ったままで、利用者に食事介助をしていた。			
・食事介助中に介護職員間の私語が多見られた。			
	・食べたくないという利用者に、介護職員が無理に口の中に食事を運んでいた。		
	・水分介助で介護職員一人で二人の利用者の対応をしていた。		
	・利用者にお茶を無理矢理飲んでもらっていた。		

②〈入浴に関する支援〉の事例の内容においては、〔入浴介助中に、カーテンのしきりがあるのに使用されていなかった。入浴介助中や移動中プライバシーオルが掛けられていなかった〕〔入浴を終えた利用者がベッド上で処置や軟膏塗布していたが、カーテンが使用されていなかった。脱衣室では、男女の区別なく着替えている場面があった〕〔入浴介助しながら、介護職員間の会話が聞かれた。(私語)〕〔脱衣場と浴室の温度差がみられ、機械浴のベットが冷たい状態で利用者を移動させている場面があった〕〔入浴を嫌がる利用者の服を本人の同意なく脱がせている場面があった〕という記述していた。

③〈食事介助に関する支援〉の事例の内容においては、〔介護職員が立ったままで、利用者に食事介助をしていた〕〔食事介助中に介護職員間の私語が多く見られた〕〔食べたくないという利用者に、介護職員が無理に口の中に食事を運んでいた〕〔水分介助では、介護職員一人で二人の利用者の対応をしていた〕〔利用者にお茶を無理矢理飲んでもらっていた〕と記述していた。

#### 4.3 介護実習後の調査結果 (図1)

1) 倫理的問題を認識できたか。の質問に対しては、「認識できた」と回答した学生が、27名(77%)であった。2) 誰かに相談出来たかの問いでは、63%の学生が直面した倫理的問題について指導者や教員、学生に相談していた。3) 誰に相談したかの質問に対しては、学生(46%)で最も多く、次は、指導者、教員の順であった。また4) 倫理的問題の対処方法を考えたかの質問には、4割の学生が改善方法を考えていたと回答していた。

#### 5. 考察

実習を通して介護学生が認識した倫理的問題としては、授業を通して対象者の人権や尊厳ある対応をすることの大切さを理解したことにより、高齢者への基本的な生活支援である排泄、入浴、食事、および高齢者の人権に関する問題を倫理的問題として認識したと考えられる。介護学生は、介護福祉士として利用者に関わる際に、これまでの実習を通して、介護場面で利用者支援の際に、認知症の利用者との関わり方や、利用者への接し方などを介護の基本や、認知症の理解の科目

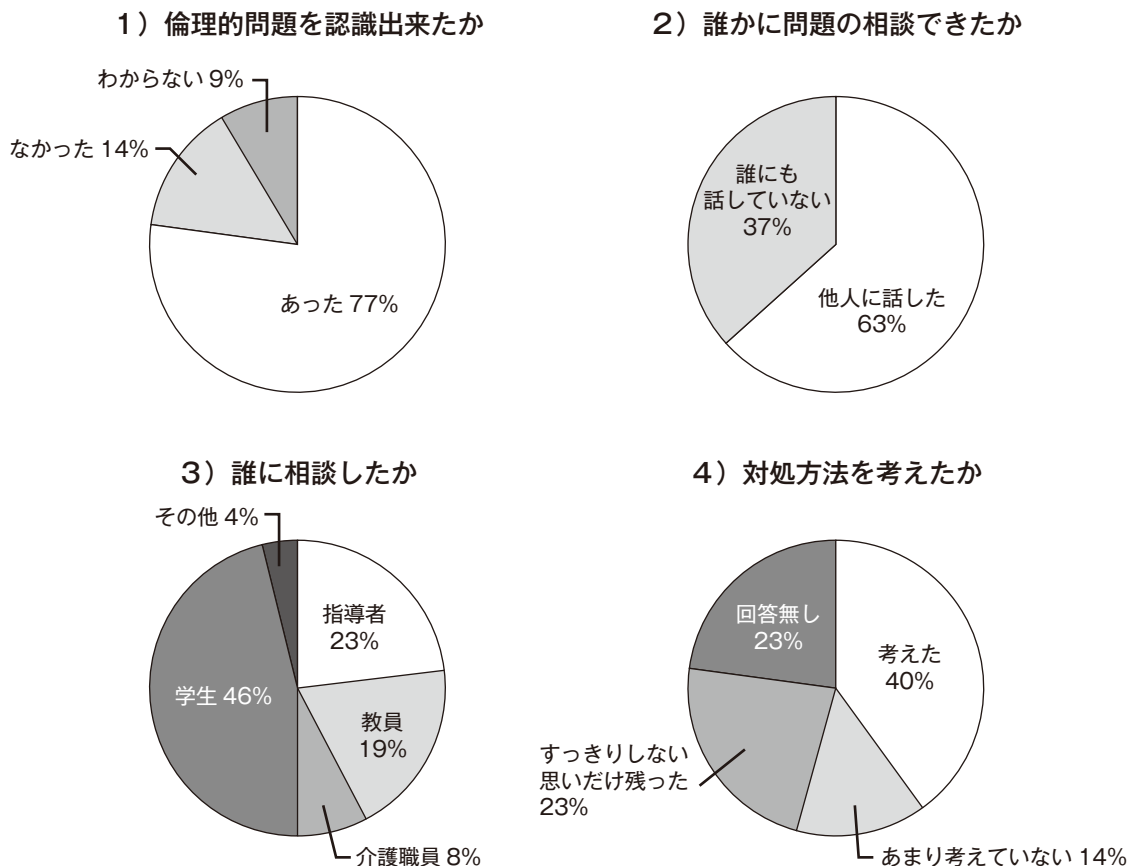


図1 介護実習後の調査結果

で学んでいながらも、現場での介護スタッフの利用者への関わり方を見て、「スッキリしない」とか、「こんな関わり方でいいのか」という疑問の訴えが多かった。今回、倫理教育を学んだことによって、施設における利用者との関わり方では、利用者のことを考えて権利を擁護できないままケアが実施されている場面に遭遇し、介護福祉士としての倫理行動に問題があると学んでいたと言える。

特に、認知症高齢者への関わり方については、利用者の尊厳をしっかりと受け止めて、説明や同意を得てケアを実施することが倫理行動につながると、気づいていたと思われる。排泄の支援においても、利用者の立場に立った支援が一番大切であり、例えば認知症であってもプライバシーを尊重した支援をするべきであり、入浴介助時では特に、裸で恥ずかしい思いをしているという利用者の気持ちを理解するとともに、浴室と脱衣所の温度管理など環境全般にも気遣いながら清潔援助をすることを感じ取っていたと考えられる。食事介助中の支援方法においても自分たちの取るべき支援方法について利用者に対してどのように関わったらいいか気づいていた。よって、倫理的問題の事例について学んだ後の実習においては、利用者とのケア場面から、直接には関わっていないが利用者のことを考えながら倫理的問題として認識して、倫理行動として良い支援方法であるかどうかを判断できていると考えられるので、教育効果があったと考える。特に、学生が、介護実習を通して認識した倫理的問題としては、高齢者への基本的な生活支援である排泄、入浴、食事、および高齢者の人権に関する問題を倫理的問題として認識できたと考えられる。

## 6. 結論

1. これまでの介護実習において、学生たちは対象者とのかかわり方において「この関わり方で、良いのだろうか」と言っていた学生が、授業を通して対象者の人権や尊厳ある対応をすることの大切さを理解したことにより、「介護の基本」の講義の中で倫理的問題に関する講義を受けた後は、この関わり方は、倫理的に反することである、あるいは、利用者の人権に関わることでありと理解し、倫理的問題であると認識出来たことは、教育効果があったと言える。
2. 介護学生が、実習前に倫理原則や人権擁護について学んだことにより、介護実習を通し

て、高齢者への基本的な生活支援である排泄、入浴、食事、および高齢者の人権に関する問題を倫理的問題として認識できた。

## 7. おわりに

今回、介護学生が、「介護の基本」の講義の中で倫理的教育を受けたことによって、その後の介護実習を行った介護現場では、認知症などの特有な症状を呈する対象者に対して人権を保護し、尊厳を考慮して倫理的視点で行動することが重要であるということを理解できた。その上で、学生自身が実習を通じてスッキリしない事例や、認知症のある高齢者へのかかわり方について、何が正しくて何をなすべきなのかという行動の善悪を考慮すべき問題を倫理的問題であると認識出来たことは、学生にとって学びの機会となったと考える。今後就職した施設においても倫理的問題を認識すること、敏感に感じ取る感性が向上すること、そして、自分がこの問題に対してどのような行動を取るべきであるのかといった視点で考え判断して、倫理的行動が出来るように、今後も自らの学びの機会を捉え、自己研鑽されることを期待する。今後、介護現場の中では、自身が、日常業務に流されることなく、倫理的問題を認識すること、敏感に感じ取る感性が持続することは、大切である。そして、自分がこの問題に対してどのように行動を取るべきであるのかといった視点で考え行動し、また介護職場で声を上げていく立場になってよりよい介護を実践していくためにも、介護福祉士養成校においての、倫理的教育は、継続して行われる必要があり、さらに倫理的問題を認識した場合どのように行動していったらよいかといった、積極的な考え方ができる教育を目指したい。

尚、本研究の概要は、平成27年度第8回日本看護倫理学会で、示説発表致したものである。

## 引用・参考文献

- 1) 日本介護福祉士会倫理綱領（1995年11月17日宣言）日本介護福祉士会倫理基準（行動規範）
- 2) 日本看護協会（2003）看護者の倫理綱領、看護、55（11）、69-72.
- 3) 医療や看護を受ける高齢者の尊厳を守るためのガイドライン（2015年6月1日）日本看護倫理学会 臨床倫理ガイドライン検討委員会

## Ethical issues for nursing care worker recognized through the training at the elderly facility

Koide Eriko <sup>1)</sup>, Sakai Miyoko <sup>2)</sup>, Kawai Terumi <sup>2)</sup>

*1)Department of Social Welfare, Toyama College of Welfare Science*

*2)Department of Nursing, Toyama College of Welfare Science*

### Abstract

The nursing care worker education program at A Junior College of Social Welfare aims to deepen students' understanding of ethical issues in the care of elderly persons using case studies. This study reported that students experienced practical training after understanding the dignity of elderly persons and ethical issues related to their care, and Discuss future directions in nursing ethics education. The 35 students of inside of 49 students who trained at 37 facilities in prefecture, filled out questionnaires.

Data of the questionnaires was as the following. The 27 students (77%) reported that they had "encountered ethical issues" Ethical issues that the students experienced were categorized by similarity into the following: 2 categories of "human rights issues relevant to elderly persons" and "issues related to basic living support" and 5 sub-categories of 'support to protect their dignity', 'support for self-determination in care', 'excretion assistance', 'bathing assistance' And 'mealtime assistance' The results Suggested that the students recognized issues related to human rights and basic living support offered to elderly persons, such as excretion, bathing, and mealtime assistance, as ethical issues, by understanding the importance of caring for elderly persons from the perspective of human rights and dignity in school.

Keywords : nursing care worker student, ethical issues, the elderly facility

# 身体活動量を確保するためのオニゴッコ - 第1報 -

小川 耕平<sup>1)</sup>, 和田 貴広<sup>2)</sup>

1)富山福祉短期大学 2)国士舘大学体育学部

(2015.9.30受稿, 2015.10.30受理)

## 要約

本研究は、幼児の運動遊びにおける活動量を増加させるためのオニゴッコの方法について明らかにすることを目的に実施した。2つの異なるルールでオニゴッコを実施することにより身体活動量の違いについて活動量計を用いて計測した。対象者として短大に通う学生52人(男性8人・女性44人)とスポーツクラブに通う小学生31人(男子15人、女子16人)の2グループであった。オニゴッコは、通常のルールと2人組みで行う特別ルールで実施した。調査の結果、両グループともに特別ルールの方が通常ルールで実施するよりも高い身体活動量が得られた。

キーワード：身体活動量、オニゴッコ

## 1. 目的

文部科学省では、昭和39年の東京オリンピック開催時より、「体力・運動能力調査」を、平成11年度より「新体力テスト」を毎年実施している。その結果をみると昭和60年をピークに子どもの体力は年々低下する傾向にあり、このことが大きな問題となっている。また、体力低下と合せて運動実践の2極化による早期からの運動能力の格差の拡大等様々な問題が浮上している<sup>1)</sup>。子どもの体力低下は、後の成人期や高齢期における体力の低下に結びつくことはもちろん、生活習慣病の発症など様々な健康問題を引き起こすことにつながると思われる。この体力低下に歯止めをかけるべく対策として幼児期からの健康・体力づくりへの取り組みとして、文部科学省で平成19年から21年度にかけて「体力向上の基礎を培うための幼児期における実践活動の在り方に関する調査研究」<sup>2)</sup>等の幼児期の運動に関する調査研究が多くなされ、平成22年度には小学生を対象とした「アクティブ・チャイルド60min」<sup>3)</sup>、平成23年度には幼児を対象とした「幼児期運動指針」<sup>4)</sup>の提案がされ、幼少期からの健康・体力づくりについて大きな第1歩を踏み出すこととなった。

このように、幼少期からの取り組みが盛んになるにつれて、全国の幼稚園、保育所(園)でも、運動能力測定が実施されるようになり、体力の現状が把握されだしたおかげで、平成11年度から導入された「新体力テスト」の結果では、平成23年度、24年度において小学生、中学生の体力がこれまでの低下に歯止めがかかり前年度よりも

上昇傾向になったと報告された。しかしながら、体力は依然ピーク時と比べると低いことは変わりなく、今後も継続して健康・体力づくりに取り組む必要があると思われる。子どもの体力の低下の背景には、社会環境の変化に伴い、友達と一緒に身体を使って行う外遊び(動的な遊び)から、テレビゲーム遊びやテレビ視聴といった体の動きが少ない室内遊び(静的な遊び)へと移行し日常生活全般における身体活動量の低下、遊びから時間・仲間・空間の3つの間が失われたことが原因であると考えられている<sup>5)</sup>。

自身も幼児教育学科に在籍する学生に、幼児体育や保育内容(健康)の授業を通じて学生が自らの体力や健康づくりに意識を向けることを大前提に、現在の子どもの体力の現状を把握し、保育現場で子どもと関わることは今後の子どもの体力、運動能力の向上に大きな影響を及ぼすことが予想される。もちろん、子どもの体力低下は保育現場の取り組みや努力だけで改善できるものではなく、家庭、地域社会全体で意識を変えていく必要がある<sup>6)~8)</sup>が、今回は特に保育現場における身体活動量の確保について保育現場で運動遊びとして多く取り入れられている「オニゴッコ」<sup>9)</sup>に焦点を絞り、異なる2つのルールで行うことでどちらが、より身体活動量を確保することができるかを検討することを目的とした。

## 2. 方法

### 2.1 被験者

被験者は、短大学生52人(男性4人、女性48



人)とスポーツクラブに通う小学生31人(男子15人、女子16人)であった。

## 2.2 活動種目：オニゴッコ

### 2.2.1 活動環境

オニゴッコを行うスペースはバスケットボールコート1面分であり、1回のオニゴッコの時間は通常ルール(以下P1とする)、特別ルール(以下P2とする)とも60秒で行った。また、通常ルールで行う時の人数は大学生、小学生とも2グループに分けて実施した。グループ分けについては、大学生は性別ごとに分かれるように配慮して26人ずつ2グループに、小学生は男女比は配慮せず、1年生～3年生までの低学年グループと4年生～6年生までの高学年グループの2グループに分けて実施した。ただし、比較検討については全て合わせて行った。特別ルールで行う時も基本は通常グループで分けた2グループ間でペアを作り実施した。

### 2.2.2 オニゴッコのルール

#### • 通常のオニゴッコ (P1)

通常のルールで行うオニゴッコで、最初のオニは全体でじゃんけんをして決定し、オニが1人に対して、25人が全員逃げる方法である。オニにつかまった場合は、オニと捕まった人が交代し継続するが、すぐに当て返すことが無いようにするために、3秒数えてから追いかけることと、当てられたオニへの当て返しは禁止とした。

#### • ペアオニゴッコ (P2)

誰とでもよいので、二人組になる。最初のオニを決めるためにペアでじゃんけんをし、オニと逃げる人を決める。オニと逃げる人を、コートの端と端に並べた状態からスタートする。このオニゴッコは、最初に決めたペアとしか行わないので、制限時間内は常にどちらかが追いかけて(オニ)、どちらかが逃げる(逃げる人)方法となる。オニにつかまった場合は、P1同様に、オニと捕まった人が交代し継続する。また、すぐに当て返すことが無いようにするために、3秒数えてから追いかけることとした。

## 2.3 活動量測定

身体活動量の測定は、活動量計(MYCALORY:MC-500:山佐時計計器株式会社製)を用いて、それぞれの活動の際に活動量計を

装着し歩数をカウントすることで計測した。

## 2.4 統計処理

P1とP2における身体活動量の比較については、統計解析ソフトSPSS Ver12.0を用いて対応のあるT検定を行った。それぞれの危険率は5%とした。

## 2.5 倫理的配慮

被験者には、事前に活動内容及び測定内容についての説明を口頭と事前実技で行い、活動への不参加や途中で中止についても可能であることを伝えた後、協力が得られた者に対してのみ実施した。小学生については、本人と併せ保護者、トレーニングスタッフへも本人同様の内容説明を行い、練習の一環で活動量計を装着しオニゴッコを行うことを説明した。また、測定当日に測定を拒否し途中で中止しても構わないことを本人に説明した。本研究は富山福祉短期大学倫理審査委員会の承認(承認番号H-25-002号 平成25年6月5日)を得て実施した。

## 3. 結果

異なるルールにおけるオニゴッコの身体活動量の比較では、短大生はP1が188.6(±40.6)歩で、P2が211.5(±52.1)歩であり、P1よりP2の方が22.1歩(増減率112.1%)で身体活動量は増加した(P<0.05)。小学生はP1が197.9(±19.3)歩で、P2が217.6(±33.0)歩であり、P1よりP2の方が19.7歩(増減率109.9%)で身体活動量は増加した(P<0.01)。

(Table1、Figure1-1、Figure1-2参照)

## 4. 考察

我が国の伝統的な運動遊びのひとつにも挙げられるオニゴッコであるが、ほとんどの場合が今回の検証で用いたP1が用いられることが多い、ただ、遊ぶという観点で実施する場合にはこの方法でも十分であるが、参加者の身体活動量を確保したい場合にはP2で行うことが身体活動量の確保につながる事が判明した。

この結果から、P1では、オニが全員を追いかけることは困難であり、オニゴッコの途中で、オニに追いかけられた人はある程度の身体活動量が確保できるが、オニに追いかけられなかった人はオニゴッコ中であっても動きが中断されて十分な活動を行っていないことが予想される。

P2では、P1と違い制限時間内で常に追う人と追われる人の関係が続くために、オニゴッコが中

断される状況が起こらないので十分な活動が確保されることが予想される。

今回の研究でオニゴッコによる検証を試みた背景には、被験者を行った学生が保育士養成校の学生であることから、将来的に子どもの運動遊びの一環としてオニゴッコを用いる場合に、子ども達が十分な身体活動量を確保するための方法について実体験してもらうことも含まれていた。オニゴッコは、保育所（園）・幼稚園で多く行われている運動遊びの一つであり、多くの園でも幼児期の体力づくりのための運動遊びとして取り入れられていると思うが、今回の結果でもわかるように通常多くの場合に取り入れられているP1でのオニゴッコでは、子どもたちの中で身体活動量に大きな差が生まれることが考えられるので、活動を行う時は全員が動くように声かけを行うなどの配慮が必要だと考える。また、今回の結果ではP1よりもP2の方が、多くの身体活動量が確保できる結果であったが、P2で実施する場合の留意点として、ペア間での実力差がありすぎると、速い人が優位になることなどが考えられるので、できる限り実力差を少なくすることが配慮として必要

になる。また、大学生ではさほど気にはならなかったが小学生がP2でオニゴッコを実施した時は、逃げ回る際にぶつかる光景が数回見られたので安全面に関する配慮も必要であると感じた。

今回は、上述した2パターンの方でしか行わなかったが、例えばP1でも、オニの数を1人ではなく、2人、3人と増やして行ったり、オニにタッチされた時に、タッチされた人がオニと交代するのではなく、オニになっていく方法（オニがどんどん増える方法）で行ったり、タッチされた人がみんな鬼になって手を繋いで追いかけてゲームが終わるまで全員が走っていなければいけない、手つなぎ鬼など様々な方法による実践での検証を行うことで更に身体活動量を確保するための運動遊びのレパートリーを増やすことが可能であると感じた。また、鈴木<sup>10)</sup>は、小学生を対象に行った異なる方法でのオニゴッコによる身体活動量の違いについて、スペースやオニの数などにより身体活動量が影響されると述べている。このようにオニゴッコ一つをとっても、既存のルールに縛られないようにその時の環境や状況をしっかり確認して最も効果的に身体活動量を確保できるように

Table 1 ルールの異なるオニゴッコによる身体活動量の違い

	P1		P2		
	Mean	SD	Mean	SD	
大学生 (N=53)	188.6	40.6	211.5	52.1	*
小学生 (N=31)	197.9	19.4	217.7	33.0	**

P1:通常ルール \* P<0.05  
P2:特別ルール \*\*P<0.01

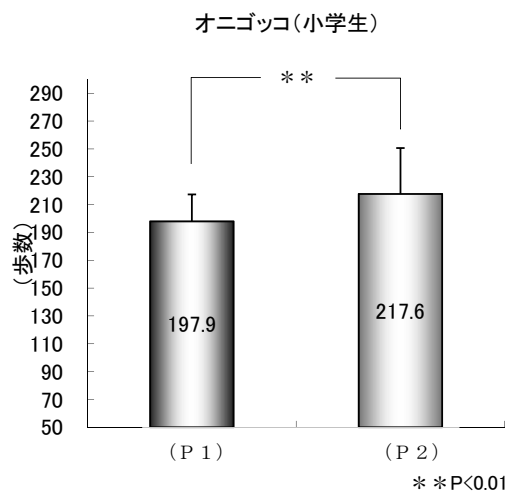
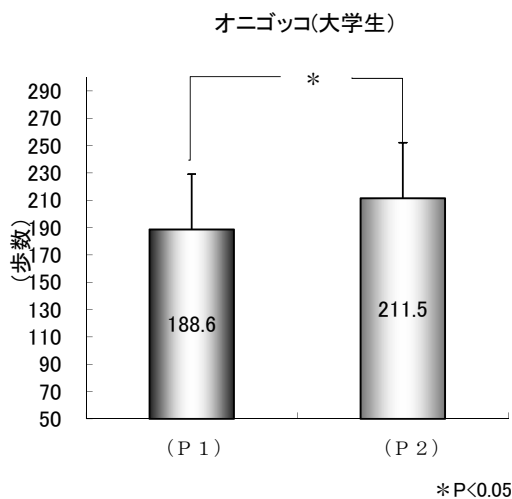


Figure1-1 大学生のオニゴッコ時の身体活動量（歩数）

Figure1-2 小学生のオニゴッコ時の身体活動量（歩数）

実践することが望ましいと考えられる。

## 5. 結論

今回、身体活動量を確保するためのオニゴッコの方法について、2つのルールを用いて歩数にて身体活動量を計測し調査した。その結果、大学生も小学生も今回用いたP2のルールで行う方が、より身体活動量を確保することができた。

## 謝辞

本研究を進めるにあたり、ご協力いただいた被験者の皆様、スポーツクラブ監督はじめスタッフの皆様に心より感謝いたします。

※本研究は、「平成26年度富山福祉短期大学共同研究」による助成を得て行われた。

## 引用文献

- 1) 厚生労働省運動所要量・運動指針の制定検討会, “健康づくりのための運動基準2006～身体活動・運動・体力～” 報告書, 2006
- 2) 文部科学省, “体力向上の基礎を培うための幼児期における実践活動の在り方に関する調査研究”(報告書), 2011
- 3) 竹中晃二, “アクティブ・チャイルド60min. 子どもの身体活動ガイドライン”, 株式会社サンライフ企画, 財団法人日本体育協会, 2010
- 4) 文部科学省, “幼児期運動指針ガイドブック～毎日、楽しく体を動かすために～”, 2012
- 5) 山地啓司, “子どものこころとからだを強くする” 市村出版, 2005
- 6) 都竹茂樹, “子どものメディカルフィットネス—レジスタンストレーニングによる体ほぐしの運動—”, 日本健康スポーツ連盟, 1999
- 7) 澤田幸男, “子どもの未来づくり 幼児の体育” 大学教育出版, 2010
- 8) 森司朗, “幼児の運動能力における時代推移と発達促進のための実践的介入平成20～22年度文部科学省科学研究費補助金(基盤研究B) 研究成果報告書”, 2011
- 9) 村田トオル, “コーチングクリニック”23(3), PP67-69, ベースボールマガジン社, 2009
- 10) 鈴木邦明, “鬼ごっこの方法の違いによる子どもの身体活動量の変化”, 幼児体育学研究, 第4巻, 第1号, PP13-19, 2012

# Playing Tag to ensure the Physical Activity Level - Part 1 -

Kouhei OGAWA<sup>1)</sup> Takahiro WADA<sup>2)</sup>

*1)Department of Early childhood education, Toyama College of Welfare  
Science*

*2)Physical Education Department Kokushikan University*

## Abstract

This study was conducted to examine how to ensure the amount of activity of the play tag. It was measured the number of steps using an activity meter for differences in physical activity by carrying out two different rules.

Subjects were 52 students attending junior college (8 men, 44 women ) and

31 elementary school students attending sports club (15 boys, 16 girls) . Playing Tag includes the ordinary rules are implemented in a special rule to be performed in pairs.

As the result of the study, Special rule showed higher physical activity level than its normal rule when playing tag.

Keywords : Physical Activity Level, Playing Tag.



富山福祉短期大学 第4回共創福祉研究会

## 子育ての意味を考える —子育てを通して親も子も育ち合おう—

講師 吉岡眞知子 氏

東大阪大学 東大阪大学短期大学部 副学長

東大阪大学 こども学部 教授

東大阪大学 こども研究センター長

皆さん、こんにちは。ただいま紹介いただきました吉岡でございます。よろしくお願ひいたします。

私は、ご紹介があったように、東大阪大学といて、大阪でいえば、奈良県と大阪の境目ぐらゐの、大阪寄りのところでございます。こうして講演に来させていただくというのは非常にありがたい半面、私の話が十分皆さんに伝わるかと思ひながら、やってまいりました。何とか精いっぱい頑張りたいと思ひていますが、ただ一番、富山県に来させてもらうにあたって、気になったこと、2、3年前にも金沢、隣ですね、に行ったのですが、近畿圏を出ていくときの一番、私が不安に思ふことは何かというと、非常に関西弁でしゃべりますので、皆さんにうまく伝わるかと、ずいぶん注意をしますが、学生さんもいらっしゃるようですが、なんか“吉本から飛んできたおばちゃん”みたいな感じになってしまいそうところが、一番の不安なところでございます。分かりにくいときは、あとで「何を言ったのか、分からなかった」と言っただけだったらいいかなと、補足をしたいと思ひますので、よろしくお願ひいたします。

レジュメのほう、先生にご指摘いただいたのですが、日付が間違っております。1月28日になってしまっていたというので、2月28日土曜日と、書き換えていただきたいと思ひます。申し訳ございません。

自己紹介に代えて、と書かせていただいたのは、ただ今ご紹介がありましたように、私はもともとまず小学校の教員を、大学を卒業してやっております。そこで、子どもたちとの出会い、小学生との出会いをじっと見て考えて、いろいろなことを小学生から気付かせていただいたように思ひます。そういったなかで、小学校の教育をしている自分が、教育というのは小学校から1年生で入学して、さあ、頑張るわ、子どもたちにしっか

り教育し、力を付けていきたい、と思ひながらスタートするわけですが、よくよく考えると、そこに至るまでの生まれたときからの子どもの育ち、6年間の育ちが非常に重要であり、またいろんな環境や育ち方に違いがあり、決して1年生がスタートではないということに気付いてきて、入学前の子どもたちの生活や様子はどうなっているのだろう。育ちが大切であると思ひながら、どんなかたちでなされてきているのだろうということを考えるようになって、就学前の子どもたちのことを研究し始めるきっかけになったかと思ひています。

もう一つは、小学校の子どもさんの日々の生活の様子を見てみると、ついつい子どもに現れている姿だけで、子どもの、「こういうことを注意してちょうだい」「もう少し早く起きてきて、遅刻をなくしましょう」とか、「ぎりぎりに来ないでね」「宿題はきちんとしてこないと駄目じゃない」と、学校現場で、子どもの姿を見て注意をする自分が、果たしてそれでいいのだろうかということをおもったわけです。

家へ帰ってからの生活、宿題ができなかったことは、どこに原因があるのかとか、早く起きられなかったことは、どんなところに原因があるのか、とかいうことを考えたとき、子どもの家庭での生活の様子や、お母さん、保護者との過ごし方とか、そういったことを非常に考えないといけなと思ひだしたのです。現場にいるときも、家庭訪問をしたり、いろいろ親御さんや子どもの生活を見つめたりして、その経験のなかから、学校のなかで見えていない大きな課題がいくつかあるなあ、ということに気付いていきました。

例えば、1時間目が始まったのに学校へ来ていない、欠席届のない子どもさんがいらっしゃった。2年生です。どうしたのかな、お母さんが電話をしてきていないし、連絡帳も持ってきても

らっていないし、どうなっているのかと、不安いっぱいでしたが、2年生のその子が、1時間目が始まってしばらくすると、9時20分ごろですね、もう半分以上終わったところに、ワッと後ろから入ってきて、必死で走ってやってきた、というある子に出会ったわけです。「どうしたの？よく来たね。みんな心配していたよ」「お母さん、起こしてくれやらへんだ」。これ、関西弁ですけどね、「起こしてくれなかった」と言うから、「そう、それじゃ、先生は今日授業が終わってから家庭訪問をして、お母さんに、起こしてあげないと駄目じゃない」。低学年ですからね、「やはり起こしてあげてほしい」ということを伝えに行くわ、と言って、子どもと約束をして、放課後、家庭訪問をしました。そうすると家庭でお母さんが出てこられて「そうなんですよ、先生、子どもを起こさないでぐっすり寝込んでいた。」と言われたのです。「駄目じゃない、起こしてあげないと」と言ったときに、お母さんが、「商売の関係で今、大変なんや、家の中は」。夫と二人で夜遅くまでいろいろお店が潰れないように工面をする手段として走り回っていて、帰りが非常に遅くなった。夜中に帰ってきて、そのまま寝込んでしまって、起こすのを忘れてしまった。というような事情を聞くと、一概に親が悪いとか、子どもが悪いとかいうことじゃなく、子どもを育てる生活全体をどう支えていけばいいのか、ということを考えていく必要があるのではないかと思いたして、今、現在、子どもを育てているお母さんや、子どもさんの様子を見ながら、いわゆる実際の子どもの姿から研究をしたいと思うようになりました。

ご紹介のあったように、大学の中で今、私がやっていることですが、東大阪大学こども研究センターというのがあって、おそらく、どこの大学でも最近、こういったことをやられているようですが、12年前に大学をつくるときに、学内にこういう施設をつくりました。この絵本館もさっきほどぐるっと回って見ますと、絵本の部屋があったり、お子さんを連れて遊べる場所があったりという、そのようなミニ版といいますか、が、大学のなかにあるというイメージです。ちょっと様子を見てください。

これは大学の2階のエレベーターホールで、向かいが教室で、そのこちら側、2階のフロアにセンターがあるというのでは、学生さんが授業をしている横を通過して、お母さん方、地域の親御さんが子どもさんを連れてやってくるという場です。これが保育室のなかで、お母さんと子どもさんと

保育士さんが一緒に遊んでいる場、このような保育室をつくっているのです。外へ出ると、少し砂場をつくって、泥んこ遊びをすればかいうようなこともできる場所です。

これは、そのプログラムの一つですが、こちらにいるのは保育士さんです。お子さんと一緒にお母さんが、もうすぐ5月ですが、こいのぼりをつくっているところなんです。新聞紙で、お子さんの背丈のこいのぼりをつくろうということでやっているのです。お母さんが、新聞紙の上に子どもを寝かせて、子どもの背丈を測って、自分のお子さんの背丈のこいのぼりを毎年つくっています。そうすると、お母さん方はこの製作の日が楽しみで、「毎年、楽しみにしているのです」って来られるのです。お母さんの言葉から、3年前のお子さんが、去年は、今年は、こいのぼりがどんどん大きくなっていきますから、「成長を楽しみながら、家で全部、大きくなったこいのぼりをこの時期に出しているのです」というお話をしてくださいます。

私たちがこれをつくろうと考えた意図は、そういうところにあるのですが、身近なもので、そしてお母さん自身が子どもの成長を楽しむ、お母さんだけじゃないですね、家族で楽しんでくれる、喜んでくれる。子どもたちも、自分の育ちが実感できるという、取り組みの一つとして、こういった企画をして親御さんに気付かせるというか、気付いていただく、子育てをしながら子育ての意味を気付いてもらいたいと思って取り組んでいます。それがこの光景です。

こちらは、活動の途中で、おやつ時間にしましょうとあって、こういう活動をしているときは、親御さん同士なかなかお話ができないのですが、こちらを見ると、少し集まってきて、子どもさんにおやつを与えながら、親御さん同士で話をするという機会にしたいと考えています。おやつも、お母さん方には、こんなものが2歳とか1歳の子が喜んで食べてくれるよ、というようなものを発見してほしいと思って、例えば小さいボーロであったり、ラムネの小さいのであったりこのような小さなものを出してみても、つまんでみる。つまんで食べる。こうしながら、子どもは楽しんで指先を使って食べてくれる。こういうおやつというのは、ただ、おやつを食べるというだけではなくて成長に意味があるのだよ、というようなことを話しています。スルメとかおジャコを出して咀嚼（そしゃく）力ですね、噛むとか、香る、匂いをかいてみるとか、こういうことが小さいときに

は大事だよということを知らせたいので、あえてそういったおやつを出してもらっています。

これも製作です。秋の製作の場面です。お母さんが一生懸命つくっていますが、基本的には私は、お母さんがしっかりつくって、子どもさんは作らなくていいのよ、つくらせなくてもいいけど、横で見たりすると、大きくなったらやりたくなりますから。赤ちゃんを連れてこられるお母さんは、じゃあ、この活動に参加できないのかというそうではなくて、赤ちゃんは保育士さんが見ていますから、「お母さんがしっかり製作してみてちょうだい」とあえて言って、こういう材料を与えて製作してもらっています。そうすると、非常にお母さん方は夢中になってね。これもまた毎年、この時期になったら、「製作が始まるから、私もつくってみたいからやってきました」「今年はどうしたい何をつくるか考えているの」とかいうようなことで、楽しみにして来てくださるようになりました。

これが作品ですね、お母さんのつくったのは。ちょっとしたもので、家の中に飾っておけるどんぐりとかを使って、飾っておいて、「持って帰ってじゃあ下駄箱の上に飾っておきます」とか、「居間に置いておきます」とか、「パパ（旦那さん）に見せます」とか言って、楽しんでつくる。本当に子どものことは気にしないでいいよという具合に、放ったらかし。子どもそっちのけで。必死で、それがまたすてきな力を持っていらっしゃるといふか、発想を持っていらっしゃって、すてきなものがたくさんできてくるのです。これもその一つですが。

なぜこういうことをするかというと、結構、お母さん方は、子育て支援というと、リフレッシュという言葉がよく出ますが、私はリフレッシュというよりも、お母さん自身が活躍するというか、必死で何かをしてみようという時間がなかなかとれない。毎日、子どもと向き合って、実はいろいろな力を持っているんだけど、子育て中というのはなかなかそういう力を発揮することができないと思っていらっしゃるのではないかと考えて、持てる力を発揮したら？という気持ちで、こういった製作をしてもらっています。

また先ほどのこのほりも同じように、製作もそうなのですが、最近の社会のなかで、親御さん、母親が子どものために何かをつくるか、そういった機会が非常に奪われてきているように思います。小学校へ入ったときに、例えば「こういう袋をつくって持ってきてあげてくださいね」と

か「体操服を入れる袋をつくりましょう」といっても、一方で、百均とかで手軽に売っていて、それを買って用意ができるような時代が変わってきていますから、子どもさんのために何かを親がつくってみるといふ機会が、どんどん減りつつあるということを感じています。これは大きな課題だと思っています。

料理もそうです。私もそうですけれども、コンビニを利用したり、お総菜屋さんの出来上がったのを買って帰ったりで、家庭の味とか家で料理の匂いとか、お母さんの味とか、そういうのを感じる時間がない。子どもたちにとって、それが課題だと思っていますので、何か子どものためにとか、家族のためにお母さんがつくって、家族でそれを見て楽しめる。お母さんの活躍の場というか、そういったことが一つの子育て支援として、大事なことはないかということ、研究を通して考えるようになってきて、あえてこういうことをやっています。

これは、先ほどの外での遊びで、こちらの富山県はこういうことを、どろんこ遊びはもう自然のなかでいっぱい、保育園でも楽しめる場でしょうね。きょうの私のこのチラシも先ほどいただいて、この下のほうに、すてきな絵というか、お母さんが堤防ですかね、で赤ちゃんを抱いて、自然のなかでふわっと、温かい姿のチラシができていて、すてきだなと思いながら。大阪でこのチラシをつくるとしたら、自然がないのでここはどんな絵に変わるだろうかと思いながら見ていたのです。

というのは、大阪のような都会になると、こういった自然がないし、おそらく富山県では想像のできないような保育所現場です。国の規制緩和がどんどん入ってきて、待機児童を解消するためにということで、最低基準をかなり規制緩和したかたちの保育所ができていますから、例えばコンビニの上に6階建の保育所がある、という形の無認可、認可外じゃなくて、認可保育所ができるのです。園庭は無い。近くに公園があればよいという規定になっておりますから、大きな道路を挟んで、斜め前に少し大きい公園があれば、それでOKというので、認可されていていっているのが現状です。なかなか親も子もこういった自然のなかで遊べないという環境ですから、まあまあ、こういったどろんこ遊びもしてもらおうと思って用意をしています。

この写真も、富山県では当たり前でしょうが、大阪ならばプランターにえんどう豆を植えて収穫するという環境ですが、こうして、豆と一緒にむ



きながら、お母さん方に、子どもは、「おもちゃで遊ぶより、お母さんと一緒にうーんと楽しく遊んでくれるよ」「子どもも、お母さんと一緒に何か豆をむいて、食事に出てきたときには、あ、僕がやったな、ということを感じとっていくはずだよ。おもちゃじゃないが、子どもにとるとおもちゃ、遊びになっているよ」とか言いながら、こういったことを知らせてやりたいと思っています。

これは、ままごとコーナーで、土曜日に開催すると小学生も、ここで育って大きなお姉ちゃんになった子も一緒になって遊びに来てくれるので、ちょっと大きい子もいながら、こんなかたちで遊んでいます。

これも土曜日で、赤ちゃん体操の講習会をしたとき、できるだけ、お父さんも一緒に来てねと話しますので、お父さんの参加も増えてきました。

こちら絵本館ですけれども、もう一部屋、絵本をいっぱい集めて、自由に絵本を見てください。図書館に行ったら堅苦しいけれど、ここではゆったりと休みながら、昼寝をしにきても結構です。遊んで帰ってくださいよ、というような絵本のお部屋をつくっています。これも、小学生はもちろんですが、来られたお母さんたちが帰りにたくさん絵本を借りて帰ってくれるという、そうして絵本に触れてほしいと思って用意をし、また、お母さんが、大人が楽しめる本、読み物も用意しています。

これは、学生たちが企画をして、年に1度、「こども応援ひろば」という催しをやります。その日に、お母さんや小学生も一緒に大学に来てくれています。学生が何かいろいろなブースをつくって、子どもたちと触れ合う機会を持っているのですが、大学でこれをつくっている意味というのは、地域で子育て支援センターがたくさんありますが、そこと大学の違いは、やはり学内でしているので、学生さんがいるということ。それで、活動に授業も含めて学生が入っていくという、保育士さんとお母さんとお子さんと、われわれ教員と学生が入り、日ごろの活動することに意味があると思い、学生さんを入れながらの活動しております。

私はどういう意味があると考えているかというと、保育士さんとかわれわれ教員、スタッフと、そこに子育て中のお母さんと子どもさんがいるというなかでは、お母さんはスタッフから子育てのノウハウを聞きたいとか知りたいとかいう、意欲的に知りたいとか発見したいと思って来てくださるというのには一つの意味があると思っています。

そして、そこに学生が入るといのは、また少し違う人たち異世代の人が入ることで少し雰囲気違ってきます。お母さんからすると異世代です、ここにおられる学生さんたち皆さんのような世代ですね。子どもたちとも違いますから、子どもから見たら、少しお兄ちゃん・お姉ちゃん。お母さんとか大人たちではない、お兄ちゃん・お姉ちゃんがそこにいるということで、世代の幅が広がる。ここに意味があるんじゃないかと考えています。

こうして学生さんが入ってくると、最初、これを始めた12年前は、お母さん方から、「え、学生さんが入るの?」。富山の学生さんじゃないから、聞き流してほしいのですが、うちの学生さんの中には、髪の毛は赤く染めていたりして、「えーっ、若者ねえ!」とお母さんから見ると少し違った世代で近寄りたく見える学生さんが群がっている。「あの学生さんがこの中に入って、子どもたちと触れ合ってくれるの? 困るわ。」という言葉や話が最初に出たのです。

「でもお母さん、大丈夫よ。学生さんもきちっと、礼儀正しく話をしますし、また、いけなかったらいけないとお母さんが叱ってあげて結構ですから、叱ってください」。そして、「学生に、お母さん方がこうして子育てをしている様子や苦労とか悩みとか、また結婚生活とか、日々の生活の様子とか、いろいろなことを学生と一緒に話してあげてほしいと思っているんです」というようなことを言ってみると、お母さんは、「えー、学生さんに話しするの? 嫌だな」と言いながら、実は、実は、結構仲良しになってくれる。先生から話を聞く関係から、今度、お母さんが学生に教える関係みたいなかたちが自然とできてきて、得意になってね。「そうよ」とか、女の子に「あんまり早く結婚しないほうがいいよ。私は早かったから、大変だったよ」とか「こんなしんどいのよ」とか。男の子には「手伝ってあげな、いかんよ」とか「うちのパパは帰りが遅いから、私、困っているのよ。あなたたちこうして、子育てを見てくれると、いい理解者になれるね」とか、いろいろな話を、学生に教えてくれている。それが、普段のお母さんの姿とまた違って、いきいきとしていることに、私は気付かされたのです。

そういうなかから、お母さんといのは、今、孤独であるとか、孤立しているとかいうのが、世間一般の言葉のなかにあるけれども、孤独や孤立ってなんだろうって考えたときに、自分自身を発揮する場が非常に少ないんじゃないか。お母さん自身が大人たちから、自分の存在を認めてもら

うという、こういう機会は非常に弱いのではないかと思うようになってきました。

考えてみると、旦那さんの帰りが遅いとかで、子どもが寝たあとにパパが帰ってきて「きょう、こうだったよ」と言っても、「ふーん」と聞いてくれるだけで、本当に毎日、子育てというのはお母さんは不安というか、経験したことがないことの連続の中で、経験をしていくわけですから、一生懸命やっているにもかかわらず、当たり前のごとくに見られている。子育て相談を受ける時に、感じることに、「おむつがなかなかとれないので困ります」とか「食べるときのマナーがなかなか身につけていないんです。でも、おばあちゃん（お姑さん）に言わずと、もう少ししっかり叱らないからよ、あなた」とか、「子どものことをもっとしっかり見てないからだよ」とか、経験のなかから指摘をしてきているのだけれども、悪戦苦闘していることに、褒めてもらうというか、共感してもらっている機会というのがなく、こうしたことがお母さんにとると弱いというか、少ないんじゃないかということを思っています。お母さんはお母さんで、たくさんいい力を持っていらっしゃるのを、発揮できる場をどんどん社会でつくっていく必要があるんじゃないかなと思っています。

学生さんたちとの、このちょっと違った年齢というか、自分より後輩の人との出会いは、非常に意味があるんじゃないかなと、私は思いだしています。

これは、「応援ひろば」の一つのブースです。これはうちの学生、こんな学生がピースしていますが、楽しくやったわ、というような、ワイワイしながら、お母さんとやってくれているということです。

そういうことを実践研究しているというか、今日のお話も、そういうなかから私が考えてきたことを、少し話をしていきたいと思います。

東大阪大学の「こども学部」という学部をつくったのですが、本学では、レジュメにも書いていましたが、「こども学」というのは一体なんだろうというとき、子どもを考えるだけではなくて「にんげん」について深く考える学問だということを思っています。

学生への問いかけと書いておりますが、こども学では、子どもについて深く考える時間です。子どもについて考えると、そのうち自分も含む「にんげん」について考えることになります。人間とは、人間が生きていくということは、そのための

環境・社会は、どうあるべきなのかということを考えることになっていきます。子どもの成長を考えようというときには、子どもが成長するという、子どもだけじゃなく、子どもがやがて大きくなっていく、人間はどうあるべきで、どういう生き方をするのか、どういう社会のなかで生きるのかということを考えることになる。

そういうことを考えると、「自分」という人間をしっかりと見つめ、逆に考える機会にもなっています。自分はどうだったんだろう。自分が子どもだったころはどうだったのか、ということを考えるという意味で、自分自身を考える機会にもなっていると思うのです。これが、子どもを考える一つのきっかけだと思います。だから、学生さんたちは、自分は今、18歳、19歳でいる自分が、今まで生きてきた過程を思いだしてみる。子どもに関わろうと思ったら、自分が子どもだったときを思いだしてみる。そこで止まらないで、自分の未来はどうなのか、どのように幸せに生きていこうとしているのか。どんな社会を歩もうとしているのかという未来も少し見ながら、今、いる自分という人間が、ということを考えるということが、非常に大事なことだと思っています。

同じようなことを言いますが、子どもを考えるときに、生まれたときから、命がオギャアとこの世に誕生したとき、その瞬間から、ずっと乳児期を経て、幼児期を経て、児童期を経て、青年期を経て、成人になる。やがては高齢者になっていくという。こういう歩みが人間の歩みとして見た時に、こういった流れのなかの一時期ですよ、ほんの一時期、子ども期といわれるのは一時期なのです。その一時期だけが幸せであるという願い方をするのではなく、人間として生きていくうえでの在り方を見据えたうえで、子どもというものを考えていく、子どもの幸せを考えていくということが大事なことだと思っています。

人間社会を生きる意味ということでは、私たちは先輩の親から自分は育てられました。そして親になって次の子どもを育てていくという。こういった流れ、つながりがあるんです。先輩のおかげで、先輩というのは親です。おじいちゃん・おばあちゃん、そのまた先輩のおかげで、今、私たちは幸せに暮らしているんだ。この日本の社会で、まあ平和に幸せに過ごせているのは、先輩たちが築いてくれたおかげである。そこに今、自分が立っているという視点を持ったときに、じゃあ、次の世代、自分が先輩になっていくときに、次の世代を生きる子どもたちに、やはり私た

ちは、子どもたちがその社会で幸せに、平和に暮らせるようにするためにはどうあるべきなのか、という視点を持つことが大事だと思います。

そういった意味で、人が生きるという、個人の私が生きる、人間である自分が人間として生きるという意味には、自分の命を大事にする、自分を守るということが、一つ、大きな人間として生きる意味ですね。自分を守る、「自己保存」とともに、「種の持続」と書いておきましたが、次へつないでいく、人間が滅びないようにつないでいくという役割が、私たちは人間としての生きていくうえでの大きな役割であると思います。

子育てというのはまさに、親から子どもへ伝えていくという行為です。私が「育てる」とあえて書かないのは、伝えていくんだと。伝えてもらったことを、自分で消化し、よりよく考えて、次の世代に、次の世代の子が健やかに育つために、親から子へ伝えていく行為が子育てではないかと思っています。

そうしたことを考えてみると、では、今の子どもは大人社会で守られているのでしょうか。本当に心地よく生き、次の社会にその子がまたつなぐ原動力になっていけるような社会であるのか、ということ、考える必要があります。常にそういった意味では、社会のなかで生きている子どもを見つめる、この視点が大事だと。社会のなかの状況を見た今、次の社会につないでいくというのには、社会のなかでの状況を、さまざま見て、子どもたちは本当に健やかに育っているのかを常に考える目を持つことが大事だと思います。

私はそう思って社会を見てみると、親たちや大人たちは、「これは子どものためにしてあげている」「これは子どものためにやっている」と思っているけれども、実は、実は、今の社会をつくっているのは私たち大人ですから、どうしても大人中心の考えになって、なかなか子どものことを思ったり、子どもの力になったりしていない面がたくさんあるのではないかと思っています。

学生たちと話すときには、「大人たちは、子どものためと言いながら、本当にどれだけ子どものためになって、見ているかなあ」と言いながら、「例えば」と学生さんに話をするのは、ベビーカーがありますよね。子育てをするベビーカーは一体、誰のためのものなのでしょうか。当然、お母さんとか大人たちのものですね。抱っこして、いろいろな荷物を持って移動するのに、不都合があるから、ベビーカーがあると少し便利だということで活用します。とても便利です。できたら軽い

ものとか、お母さんが持ちやすいもの。でも、一方子どものためにすわり心地がいいようにクッションを考えるようになった。これは子どものためですね。

じゃあ、ベビーカーで街を回るとして、実際に子どもは快適にそのベビーカーに乗っているのか、そうではないのか。お母さんが買い物に行くから、いやいや乗せられて行っているのか。ということを考えてみたときに、お母さん方が街を歩いて、ママ友に出会って、ベビーカーに子どもを乗せて、ワイワイしゃべっていますよね。5月とか6月のさわやかな季節。お母さんは「きょうは空気がいいね」と言いながら、外の散歩もいいし。ママ友と長時間話をしています。楽しく話をしています。子どもはベビーカーに座っていると、お母さんの目線と子どもの目線は違いますが。お母さんが快適と思っている気持ちでいると、子どもが快適と思っているだろうかどうだろうかということを考えてみると、車が行き来して、排気ガスを直接吸っているのは子どもですね。ということから見ると、なかなか、大人たちは結構、子どものために一生懸命やっているよと思いつつ、ふと、自分中心で子どものことを忘れがちになる、私も含めて、そんな自分があるんじゃないかと思うのです。

満員電車のなかにベビーカーで入ってごらん下さい。お母さんやお父さんは吊り革を持ってしゃべっていますが、そこに乗っている子どもは太い足ばかりを見ている、というような状況を想像したとき、大人と子どもの見えている光景は全然違う、ということになります。

本当に子どものためにと、子どもの側にとするのは難しいですね、このようなことを、私はいろいろ考えています。どうしても社会を動かしているのは大人たちですから、子どものためになりきれないというか、そのようなことを常に反省したり振り返ったりする姿勢というのは大事なことでないかと思っています。

そういうなかで、「子どものことを考えよう」ということで、学生さんには「あなたは子どもですか、大人ですか」という問いかけをしています。毎年です。学生さんがいらっしゃいます。学生さん、子どもと思う人、大人と思う人、手を挙げてみてくださいか？自分はどうでしょう。大人と思っている方。どっちでもいいんですよ。考えた？はい、子どもだと思っている人？まだ子ども。いやいや大人。挙がっていない人はどちら？真ん中？首を振っている。難しいですね。みんな

首を振るのです。本当に考えてみたら難しいですね。

子どもとか大人とか、簡単に言っているけれども、子どもと大人の境目があるのか、ないのか。何が子どもと大人の違いだと思うか。なんていうことを少し考えてみると、漠然と子どもという存在を知っていそうで、分からないもので、自分も含めて、どう考えるか。

本学の学生さんに聞いてみると、大半が子どもと言ってくれる。その理由は、親からまだ自立していないとか、仕送りをもらっているとか、朝、起こしてもらっているとか。そういうかわいいことを言ってくれたり、「真ん中」と書く人もいたり。悩んでいるように「揺れている」とか。「20歳だから」という学生さんもいます。それは法律的に、ですね。でも自分の気持ちとしてはどうなの？とか、考えたとき、大人たちもそうですが、いつまでたっても、さっきの流れからいくと、私もこの年になっても、親がいたら、もう親は亡くなりましたが、ついこの前までは私のことを子どもと思って、「なんや、眞知子、そんなことしとったらいかん、いかん」と言う父親の姿があったりしていますから。子どもというのは一体どんな存在なのだろうかを考えてみてみるのが大事だと思います。子どもと大人の違いは、ということを考えてみてほしいのです。

さらに、子どもが大人より勝ることは、大人は何でも子どもにしてあげなくちゃ、私は全部分かっているから、先に生きて分かっているから、やってあげないとできない。助けてあげないとできない。大人っていうのは、子どもより何でもできていて、それを教えたりしていくものだと思いますが、子どものほうが、じゃあその大人、親より勝っているものがないのか。君たちも、子どもと思っていたら、親たちよりも勝っているものを持っているはずだし、持っているような気が、私はします。

ということを考えてみたときに、少し、こういう子どものつぶやきの言葉があります。3歳ぐらいの子どもさんがつぶやいたのを書いた詩です。

「ほし」 原 ひろし  
おほしさんが ひとつでた  
とうちゃんが かえってくるで

大人はこんなことは絶対つぶやきません。「お星さんが一つ出た。父ちゃんが帰ってくる」とはつぶやきませんね。

夕方、ピューッと星が輝いたのを見て、何か子どもが経験しているのでしょうか。あっ、あの時間にだいたいお父ちゃんが帰ってくるな、と思ったから、「お父ちゃん帰ってくるよ」とつぶやいた3歳のお子さんです。

皆さん、どうですか。お父さんが帰るのに、星を見ますか？時計を見るでしょう。「あ、6時。もうじき帰ってくるから、夕食をつくらないと」とお母さんは思います。星をワッと見ながら、「かえってくるで」と言って急いで何かをすることはありませんね。でも、子どもは時計が読めませんから、「おとうちゃん、かえってくるで」なんてすてきな感覚で言葉を発している。

これは2年生の子の詩ですね。「こんど3年」と書いていますから。

「大人」  
だれか人が来ると ぼくを見て 大きくなり  
はったね もう何年生です？  
こんど3年？  
そう 早いもんね こないだ1年やと思っていたのに  
と言って頭をなでてくれる 大人はみんな同じ  
ことを言う

よくある光景ですよ、大人たちが。「ああ、大きくなりはったね」。親戚の子たちによく言いますね。「そう、こないだまで、1年行ったばかりやと思っていた。もう3年生になるの？」。大人たちは褒めているのでしょうか。褒めるというか、喜んで、喜びの言葉を子どもたちに伝えているんだけど、子どもは、いつも大人が来たら、同じことを言って帰るなあ、というぐらいに思っている。大人たちは精一杯、子どもさんとのごあいさつのつもりで褒めて、近づいたつもりなのだけれども、子どもたちはスーッとその言葉が通ってしまっている、というようなことがよくあるのです。

これは、学生さんなんかを実習に行ったときに、子どもさんに褒めたつもりが子どもの心に届く褒め方になっているのかと思うことがあるのです。保育の先生方と研修の中でもそういう話をすることがあります。給食を食べていて、いつも好き嫌が多い子が、残してぐずぐずして、食べてくれない。でもきょう、ピーマンが出て嫌いなのを、パクパクと食べて、早く片付けて持ってきた。「あ、早く食べたね」。褒めたつもりで、み

んな「早くできたね」とかいうような褒め方をしますが、その子に「ああ、嫌いやったピーマン、しっかり今日食べていたね。頑張ったね、ピーマン頑張って食べていたのを見ていたよ」とか、具体的にその子に合う言葉をかけてやることによって、子どもは大人の言葉が心に響くということ、先生方から聞いていると思います。実習でも経験したことがあると思います。大人たちは結構、子どもたちに語っている言葉と、子どもたちが受け止めている感覚は、全く違う場合があるということを思います。

小学校低学年、理科の時間。これは『教育とは何か』という、岩波新書、大田堯（おおた・たかし）、教育学者が書いている著書のなかから引用しているものです。

理科の時間です。固体が溶けるとか、氷が解けるとかを勉強している。「降った雪が解けたらどうなる？」という質問がテストで出たとします。カッコに答えを書きなさい。当然、雪ってというのはサラサラと、氷でもない、ちょっとやわらかな、富山はたくさん降るでしょうね。「解けたら、何になる？」って聞いたら、何になる？

「水」。先生は丸を打つ。ところが子どもさんが「春」って書いたら、先生はバツか丸か、悩みますよね。でも春も間違いじゃないですよ。雪が解けたら、春がやってくる。すてきじゃないですか。どちらかという詩的な感性があるというか、思わずすてきねえという。この、「そうだよ、先生も気付かなかったけれど、本当に暖かくなってくると解けて春がやってくるよね。春になると雪は解けるよね」と、ここで先生や大人たちがどういう対応をするかによって、子どもさんの伸ばせる力をつぶすか伸ばすかがかかってくる。私たち大人は、すごく、理科のテストだから、とか概念で判断してしまって、実は、実は、持っている子どもの力を消してしまっている。そういうことがたくさんあるんじゃないか思います。

学生さんも含めて、保育園や幼稚園へ実習に行かれると、子どもさんがつぶやく言葉から、たくさん笑えるような言葉を聞きとめたり、感じたりすることがあると思う。私たち大人がしゃべらない、つぶやかなような言葉、こんなことを言ったわ、なんていう言葉をたくさん見つけることができる。私は保育現場とかに行くと、そういう子どもさんのつぶやきというのは、とても面白いと思うのです。

こういうことを考えたときに、子どもは感性や感覚で生きているのです。大人は概念で生きて

いる。先ほどのお星さまを見て、「ああ、きれいなお星さまが輝いたわ。お父さん、帰ってくるよ」という感覚、私たちはかつてはそういうことを感じていたんだけど、教育ですね、学びによって概念が注入されていって、時計の読み方を学んだら、星を見なくて、まず時計を見て判断をしてしまう。ということでは、大人たちはいろいろなことを学んで知っていけば知っていくほど、感性、感覚で生きていたことが鈍ってしまっている。こういうことが大人と子どもの違いにあるのです。だから、大人が子どもと関わる時にずれが出て、子どもが思っている気持ちや欲求を満たしていけないで終わってしまい、かたちは大人たちが十分関わって、子どものために「やってあげたのに」とか「してあげているのに」と思っても子どもに通じていないのに通じたと思ひ込む間違いをしていないかということ、常に大人は振り返りながら、考える必要があるのではないかと思います。

そういった観点も持ちながら、現代社会を生きる子どもと社会の状況を考える。よく、「昔の子はこんなことができて、体力もあって、すごくいろいろなことができたのに、今の子は体力も弱っている」とか、「食べ物も限られてきて、好きなものばかりに限られていろいろなものを食べなくなった」とか、「野菜をあまり食べない」とか、いろいろ今の子を見て嘆く大人たちというか社会の人たちの声をよく耳にします。

「子どもが変わった」とよく言われます。これは、子どもが変わったのか、社会が変わったのか、という視点で考えてみてほしいと思うのです。私が子どもだったころと、今ここにいる赤ちゃんで育とうとしている子との、社会の環境は大いに変わってきて、その変えられた環境によって、子どもも変えられていくというか、そうやってきて、「今の子ども」があるのではないかと思ったときに、先ほど、子どもたちを未来につないで、その子たちが豊かに暮らせるために、今いる大人たちはどんな社会をつくらないといけないのかということを考えてほしいのです。最初に言いましたが、実際にこの社会で、「まあ子どもが変わった」、この部分を語るとしたら、その負の部分にした社会というのは、どこに原因があって、じゃあその部分を取り戻すために、どんな社会にしていけないといけないのかということを考えたいと思うのです。

そうしたときに、例えば、子どもの遊びや生活の変化はどうなっているのか。今日、私は高岡駅

で降りたら、お迎えに来ていただいたのが体育の先生でした。その先生と体育の話をしていたのですが、子どもの体力が弱っているとか、ある一定のところは勝ってきているけれども、そうじゃない部分があるという話を聞いていたのですが、そういったことの原因は一体どこにあるのかというときに、遊び一つも昔と今とは違いますね。今のお子さんは生まれたときから、電子ゲームがあるから、メディア関係のことはすごく反応できるけれども、その代わりに外で遊んでいる時間はほとんどないという状況では、走るとか動き回るとか、いろいろなことの経験は弱くなってきています。

子どもの遊びや生活の変化は、ということを考えてみて、まず、遊びを見たときに、子どもにとって遊びって一体なんだろうということです。就学前の子どもたちが、皆さんが保育所や幼稚園へ実習に行ったときに、遊びを通して子どもたちは育っていくと聞いて、しっかり子どもと遊ぼうということで、遊びを展開しているわけですが、その子どもたちにとっての遊びの価値はどこにあるのかということを考えてみたいと思います。

子どもたちは、遊びながら何を学んでいるんだろう。どんなことを経験して、力となっていつているのか、ということを見ると、子どもは毎日が遊び、先ほどのえんどう豆をむくとか、お母さんと一緒に何かをしながらいろいろなことをしている、それが遊びなのです。お手伝いじゃないのです。お風呂に入って水でバチャバチャバチャと、それは子どもにとっては、お風呂に入っているのじゃなくて、遊んでいるのです。そういうなかから何を学んでいるのだろうか、と考えたときに、遊びを通してさまざまな体験をしています。その体験を重ねれば重ねるほど、体験から経験という経験値に変わっていくのです。体験で終わるだけじゃなく、何度も何度も繰り返してやれば、経験というものに変わっていく。そして、その経験のなかから、いろいろな知恵をつけていくという、これが子どもの遊びの一つの世界です。

じゃあこういった経験から知恵をつけていけるような機会が今あるのか、ないのか……。こうした機会が弱くなればなるほど、今いる子どもたちは昔と変わって、いろいろな概念的なことは伝えられても、関わったり考えたり、自分から主体的に何かをしようという意欲を持つという部分が、人間として弱くなっているのではないかと考えるのです。小学校や中学校の先生が、「主体的に発言してくれない」「言われたことはしっかりと100点を取ってやるけれども、グループディス

カッションになれば、話ができない」というような嘆きの言葉を聞きますが、グループや群れを成して友達と話したりする機会が幼少期から一体どれだけあったのか、ということを見ると、小さいころからそういった経験が少ないですね。遊びながら集団でいろいろな人たちと、またいろいろな世代の人たちと話したり、遊んだり、経験したり、教えられたりしながら、いろいろな知恵を獲得していくという、遊びの意味、価値があるのです。いろいろな知恵を獲得するまで遊びこなし、とことん遊べる機会がどれだけあったのか、ということを考えてみる必要があると思います。

凧（たこ）揚げをしようとか、保育園でやっていますね。こま回しをしようとか、いろいろな遊びをするわけですが、やはり、凧揚げを、揚がった、揚がったと言って喜ぶのではなく、揚げながら、いわゆる理科の勉強ですね、自然の力を借りて、どうすればうまく揚がるだろう。こんな天候のときには駄目だとか、いろいろなことをその時の経験の中で知っていく、そのようなことをたくさんため込んでいく。このことが非常に子どもの生きていくうえでの力になるのです。

私はかつて、小学校の教師をしていましたが、1年生の子どもさんを受け入れて、授業をしていて、ハッと気付いたことがあるのです。ある女の子が、入学前までに平仮名をきちっと覚えて、お習字を習いにいって、上手に平仮名を書いて、先生よりもきれいな字で書いていて。「私は、字がみんな読めて書けるわ」という女の子、Aちゃんがありました。

一方、Bちゃんは、お母さんが「いくら平仮名を教えようとしても覚えてくれないので、放っておきました。鉛筆を持つのも嫌いで、外で走り回っていたんです。だからなかなか平仮名も読めないし、書けないのです」という。「まあ、仕方ないね、学校へ入ってから平仮名は勉強しますので」ということで、少しずつ国語の時間に教えて……。その代わりに、宿題だけは確実にして習った文字を覚えていこうね」と言っていました。夏休み前になって、まあ8割ぐらいは覚えていましたが、まだ知らない文字がいくつかありました。「いいわ、絵日記を書くのに、知らない字は○（白丸）でいいから書いてきて。毎日書くのよ、絵日記は。知らない字は○○でいいから」。という宿題を出した覚えがありますが。

そのBちゃん、○も、夏休みの終わりころにはだいぶ減っていたから、書いていけば少しずつ覚えていっているんだと思いました。まあまあ、9

月に入って、何とか書けるようになった。そうすると、皆さんも覚えがあると思いますが、「先生、あのね」という、ちょっと作文を書く初めの勉強に入るのです。2学期に毎日入って「あのね作文」を書いていると、ハッと気付いたのが、平仮名を覚えていたAちゃんですが、お母さんが、「毎日、この『先生あのね』を書くのが嫌なのです。何、書こうから始まるのです」「お母さんとお買い物に行ったことでも書くか」「家族でどこそこへ行ったことを書いたら?」「おじいちゃんとか何かして遊んだことを書いたら?」とか、やったことをお母さんが教えてあげるのでした。したことを教えてもらい「お母さんと買い物に行きました。大根を買ってきました。楽しかったです。」というような「あのね帳」が、きれいな字で書きつづられているのです。

ところが、先ほど話していた、遊んでばかりいたBちゃん。平仮名を覚えだすと、すてきな「あのね帳」を書いてくれるのです。「きょう、公園で遊んでいました。赤とんぼがいっぱい飛んできました。ぐるぐる回って面白そうでした」とか、「夕方、お母さんとスーパーに買い物に行きました。夕日が真っ赤でした。あした晴れかな」。お母さんと、「あした晴れるわ」としゃべっている経験や体験がいっぱいあって。虫を追いかけてこうだったとかね、自然の中での言葉がいっぱい出てくるのです。

その時に、これってどういうことだろうと思いました。いかに自分で幼児期に多くの体験をしてその体験したことを心に詰めておくことの意味、知識をたくさん注入しても感性を磨く部分は、学校へ行ってから学校ではすぐにはできない、時間的にも苦しいですね。経験の蓄積には時間がかかります。幼少期にしっかりたっぷり磨かれた知恵、力というものは、その後の教育で大いに発揮できる、学力につながるのです。

これが幼児期の遊びの知恵と感性を獲得していく、こういうものが非常に大事なことなのです。ところが今、社会では、このような自然の中で遊ぶ機会がなくなりつつある。このように、人間が生きる上で奪われていっているものがたくさんあるのではないだろうかという課題を感じています。

じゃあ、遊びも含めて、この奪われていることを伝えるのは一体誰かということ、やはり私たち大人から子どもへ。また、子どもから子どもへ、先輩の子どもから後輩の子どもへとか、こういった関係が必要になってくるのです。そういう意味で、子どもにとって私たち、人生の先輩である大

人が、子どもたちに伝えなければならないことがたくさんあるのです。

例えば伝承遊びは廃れてきましたね。伝承遊びが途絶えたのは、どこに原因があるのだろうかと思ったときに、例えばわれわれの時代のおじいちゃんやおばあちゃんは、私たちにこま回しを教えたり、一緒に遊びながら、お手玉をしたりしていました。われわれが子育てをする時代になると、いろいろなおもちゃがたくさんできて、そっちよりも子どもたちもおもちゃが目について、テレビの宣伝にも刺激されそれで遊びたくなり、自然の中で遊ぶ機会はなくなってきたようです。お金もかからずに、その中に詰まっている人間にとってのいろいろな遊びの価値、自然と一緒に遊ぶ、そこから得られる価値を、私たち大人が子どもたちに伝えきっていないくて、世代が飛んでしまっているのです。戦後の豊かになった社会の中で生きてきた私たち、今の大人たちの時代に生きている私たちが、少し豊かさに追われて、子どもたちに伝えきってこなかったことがたくさんあると思うのです。じゃあそのまま伝えきっていないまま、どんどん社会が進んでいって、本当に100年後に子どもたちはどんな姿で生きているのかと考えると、人間らしく生きているのか、ロボットのようにになっていくのかということを考えてみると、まだまだ子どもに伝えるものはたくさんあるのではないかと。われわれがここで、特に保育者になろうとする人たちと、教師になろうとする人たち、皆さんも親になりますし、親である人たちが、子どもたちに伝えていかなければならないことがあり、ここでうんと踏ん張ってそのことを考える必要があると思うのです。

遊び一つにしても、何を伝えるのか。伝えるのではなく教えるのか。例えば、凧揚げを考えてみましょう。凧の揚げ方を教えるのか、何を教えればいいのか。私は、一つ一つの遊びを子どもと付き合いながら、その遊びの魅力を伝えないとその遊びは廃っていくと思います。そこにある遊びの面白さや魅力を伝えるという、このことが私たちに必要だと思っています。

先日、わが家の長男が、今、仕事の関係で中国に暮らしているのですが、もう40歳になった長男が、ちょうど中国も春節でお休みだったので帰ってきていたのですが、昔話を家族でしていたときに、私の父親（息子からは祖父）にいろいろなことをしてもらった体験話をポツリポツリと話していたのです。私の父親は、子どもを育てるという意味では、過保護すぎて駄目だったと、私も感じ

ています。何でもやってくれるのです。「駄目だよ、できないから、やってあげる」とか言って、何でも親切にやってくれて、やらせてもらえてなくて、だから力がついていないと思うことがたくさんあります。孫にも、私たち子供以上にその通りで、何でもしてあげていたのでしょう。「おじいちゃんがね、凧揚げしようと言って、連れていってくれたのです」。それはいいのですが、自然で遊べて。そして、凧を揚げようと思ったら落ちる。でも、おじいちゃんが上手に揚げる。自分は上手に揚げたかったのだけれども、おじいちゃんは、息子に「たこもっておけ」と言って、息子が凧を持っていて、おじいちゃんがたこを引っ張って走って、キューと揚がりだしたら、「おお、揚がった、揚がった、できた。まーちゃんこの糸持ちなさい」と言って、揚がった凧の糸を持たせてくれたようです。揚げる瞬間を体験したことがない。「揚げたかったのに、おじいちゃん、いつも揚がったわーっ」と言って、その後を持たせてくれたのです。一度でいいから揚げてみたかった」という話をしたのです。

そうなのです。体験というよりも、その魅力を、揚げるときのすごさとか、難しさとか、そういうのを獲得させないと、次につなげられないのです。こういう息子だから、子どもには凧揚げの魅力やコツを教えられないだろうと、その会話から思いました。だから、まずは私たち大人が、そのあそびの魅力を知らないといけな。ひょっとしたら私も含めて、世代が飛んでいてそういった遊びの魅力を体験できないまま今の親たちはここにいます。もう一度子どもに戻って、徹底してその遊びの魅力、子どもになって魅力を感じてみる大人づくりをしないと、次の子どもには教えきれないとか、感じて、伝えきれないものがある。

保育士になったときに、やり方、うちのおじいちゃんのような保育士にならないように。そうすると、先生がコツを知っていたり、面白さを知って、キャッキャッキャいって楽しまない、子どもたちにはその面白さを伝えきれないということを考えています。

だから、子どもと一緒に楽しみながら、一から親も、大人たち、保育者も、遊びの楽しみをもう一度感じたり、考えたりということを経験し、子ども達にそれを伝えていく大人になっていくことです。だから親は、小さいお子さんと一緒に遊んでみて楽しんでみるのが子育ての上で大事なことです。お母さんが楽しいと思えたら

子どもも楽しい。やり方だけ教えて、「やりなさい」という技術を教えても子どもは何の魅力も感じません。「やあ、もっとやりたい」と思えるようにもならないのです。

終わりに、ということで、お手元のプリントにもたくさん書いておいたのを、まとめて代えて、もう一度お話しをします。

まず、「子ども」とは、人間として生きていく過程にある存在である。長い目で子どもを見つめるということが大事で、今いる小さい乳児期だけを見て、育てるものではない。ずっと、私たちも人間として生きていく。人間として生きていくという視点を持って、まず子どもを考えるということ。

次に、人間社会を生きる意味、と書いておきました。人は、自分が生きながら、次の社会を生きる人たちにつなぐ役割を担っている。保育者になるうと思われている方は、次の世代を育てようと思って大丈夫やと思いますが、皆さんのお友達で、同じ世代の人がいたとして、違う学科へ行って、違う専門を学んでいたとして、自分さえよければとか、自分のために勉強して生きているんだという視点を持っていたら、「違うよ」と。社会をつくっていくのはみんなですから、「そうじゃないよ。自分が生きながら、そのことを次の世代につなぐんだよ」という、専門のそういったことを教えてあげてほしい。祖父母から父母へ、自分へ、子どもへという人間の営みというものをしっかりと意識して生きていくという、そのなかの今、ここにあって、子どもとの出会いがあるということ、考えてほしいと思うのです。

三つ目に、子ども理解というときに、子ども一人ひとりが違うということ認め、その子らしく生きるということを大事にしながら、「教える・育てる」ではなく、「伝える姿勢を持つ」と書いておきました。

これは、少なくとも「教えてやる。教える。」という感覚では、育てても人間は育ちません。人間としての人間らしさを「伝える」ことに意味があります。これが「子育て」であり、「教育の営み」だと思っています。子どもを育てるときには、マニュアル通りにいかない面白さなのです。同じ子ばかりじゃない、ロボットばかりじゃない。一人ずつが違うから、マニュアルや本は典型を書いているだけで、その通りにいかないことを嘆くのではなく、いかないのが人間なのです。いかないから生きているのです、という姿勢、面白さを持てる大人がいることが大事なのです。



子どもの内面に近づき、子どもを発見する楽しさ。私たち大人は、子ども期を思い出し、子どもと付き合っ、その子どもの内面を発見する面白さを感じてください。さっきの、「春」って書いて笑える大人。子どもと一緒に笑える大人になってほしい。子どもと大人では感覚にずれがある。概念と感性のずれが。感性に近づいて一緒に笑える大人になれば、子どもに伝える気持ちも伝わり、伝え方も見えてくるし、ということで、私たちの錆びて劣っている部分を磨く、これがとても大事なのです。

ある保育園で、ここに保育園の先生はいらっしゃるのか、いらっしゃらないのかちょっと分かりませんが、私が子どもを見て、笑えたこと。保育を見に、現場に行くことが多いのですが。七夕の飾りをつくろうと、5歳で短冊をつくるというときに、先生が折り紙を配ったのですね、短冊を作り願い事を書こうと。先生の頭では短冊を作るために折り紙を配る。Aちゃんが、もう、先生の話をしっかり聞かないで、すぐに何かをやってしまうという、そんな子です。ダーッと。もうやりたいと思ったらワッと絵を描いたりして、じつくりと先生の話聞いてくれないのです。先生が折り紙を配られたら、配ってもらったらうれしいものだから、はさみを持ちぐるぐるぐると、ヘビのように切っていたのですね。先生が後ろの子まで配り終わられて、前へ来られて、「半分に折ってね、真ん中、こうしてきょうは切ってね。そしてこれとこれをつないで、長いのをつくるのよ」と先生が教えて、短冊にしたのです。ここに願い事を書くんだけど、「分からなかったら先生が書いてあげるからね」と。そのAちゃん、もう、こう切っちゃっているから、先生にもじもじして、「先生、こうなってしまった。どうしよう」って言ったのです。先生も、もうしょっちゅうだから、カーッととなって、私もその気持ち分かります。「またAちゃん、勝手にお話聞かないでしてしまって、どうしようって言っても、自分で考えなさい」って叱られちゃったのです。これ、その時の子どもに響いていない言葉で叱ったのです。そして、やっとしてから、先生は「もう駄目ねって」と言って新しいのを渡したのですが、子どもは「分からないから『どうしよう』って聞いたのに、先生は自分で『考えなさい』と言われた」。笑い話のようですよ、これ。

そうなのだ、というような意味では、やはり子どもの心というのか、そういうものの、まあそれも面白い、大人が反省させられる、子どものつぶ

やきではないかと、私は思うのです。自分もそういうことをよく言うから。家でも子どもを叱るときにも、「なに言っているの、あんたが悪いのでしょ、自分で考えなさい」。本当に、子どもは、その部分、部分では困って聞いていることを、大人は答えていないのです。でも子どもって素直で面白いよね。「分からんから聞いたのに」。なるほど。なんてことに、うなずける大人になれるか、なれないか。これが子育ての勝負かも分からないと思います。

子どもから教えられることを喜ぶ経験をたくさんする。このことが私は子育てなのかなあ、ということを考えています。それでは、子育ての意味というのはどういうことなのか。それは、子どもたちに先輩として、伝えること。何を伝えるのかというのを、そこへまとめました。

先輩の生き方ですよ。子どもは常に親を見る、親だけじゃない、自分よりも上の人、上って、当然大人たちですよ。自分より年齢が上の人。皆さんも含めて。きょうだいであつたらお兄ちゃんです。とにかく体全体で人間を見ているのです。人間を見ながら生きてるので、私はまず人間としての自分の生き方というものを見つめ直し、生き方を見られているということを意識する。このことが大事だ。そう思えば、自分の生き方を磨いてほしいと思うわけです。最初に、子どもセンターで、お母さん方がいきいきといろいろなものをつくって、やってみてちょうだいというのは、子どもは遊んでいていいよ、と言っているのは、子どもはそのお母さんがつくっている姿をきっと見ている。遊びながらも。子どもの心の奥に刻み込ませる大事な母親の姿だと思っています。

生き方、料理をして常いろいろなことをして生きている生き方を示してあげてほしいのです。

その2。人間らしさを示してください。親として大人として。この生き方を示してほしいのです。お母さんが、「いやあ、子どもにはいい加減なことできないね、見られているから」という話をします。きのうも大阪で、実はこういった講演会をして、子育ての話をし、この生き方の話をしたら、会が終わってからお母さんが質問に来られました。「私、すぐ疲れて、ソファで6時ごろにワッと寝ているのですが、子どもから見られているって先生から聞いたから、それってよくないと思い反省したのです」とおっしゃったのです。いいのです。眠たいときは寝たらいいですよ。飾らないのです。お母さんが立派な、完璧な人間、飾ったうえでの姿、そんなのばかり見せる

と、子どもは窮屈で、やっていられない。人間だということを感じる、感じさせてあげることが大事なのです。お父さんが疲れてグワーッと寝ている。「子どもの前ではやめてよ」と言わないで、お布団をかぶせてあげる優しさ。「疲れているのよ」とつぶやくお母さんの言葉。それが大事なのです。何も、建前的なかたちを見せるのではなく、人間らしさ、喜怒哀楽、腹が立ったら、怒ってもいいけれど、何に腹が立っているの、何に悲しんでいるのかを感じさせてやる、こういうことを知らせてやる。そういう生き方を示してほしいと思うのです。

人間の面白さを見せてやる。そういうことが、人間社会を生きる意味で、子どもたちが感じて、あ、大人になっていったらこういうことがあって、こんな面白いこともあって、こんな泣くこともあるけれど、頑張っってそこから立ち向かっていく大人たちがいるんだ、というようなことを感じていく、こういう子どもたちを育てていくために、まずは自分をしっかりと人間らしく飾らずに、生きていくことが大事なことだと思います。

親から子どもへ伝える行為。では、何を伝えるのでしょうか。人間としての生き方、人間らしさ。人間の面白さ。人間の社会を生きる意味を伝えてほしいと思います。親は、子育てを通して、子どもと一緒に自分の人生を生き、自分自身も新たにさまざまなことを経験し、発見し、人間として豊かに生きていくことができるのです。私は、子育てというのは、何かをしてあげたり、しないといけないということではなくて、子どもと共に生きる人生、生きている人生なんだということを、しっかりとかみしめること。そして、子どもと共に楽しむことが、子育てであると思っています。

この楽しむというのは、楽しいことばかりじゃなくて、人生ですから、楽しいこと、落ち込んだこと、大変なこともありながら、子ども、家族ですね、お父さん、お母さん、家族みんなですこを歩みながら、それぞれの人間を知って、楽しんでほしい、これが子育てで、何も子育てが難しいことではなく、子どもが生まれた瞬間に、子どもがいない時と環境が違って、そのお子さんがいることによって、違った自分のこれから先の人生があって、先の人生を楽しんでいくのが、子どもと共に歩み、生きていく意味だと思います。親も子どもと一緒に楽しみながら、生きていく。こういう楽しみ方を考えて、子どもがいるからこそ、自分のこれからの人生があると思えば、ごくごく自然なこととして、子育てを営んでいくということなの

です。ただし、先ほども言いましたが、自分自身も一人の人間として、親が磨き、磨き、磨いて、人間らしくなっていく。このことが、子どもを育てる意味が、そこにあるのではないかと考えております。

ご清聴、ありがとうございました。

司会：吉岡先生、本当にありがとうございました。先生の大阪弁で、本当に熱いお話を聞かせていただきました。小学校の先生としての話、また、子どもセンターでの取り組み等を通してながら、子どものつぶやきや大人と子どものずれ等を交えながら、最後には、子どもと共に生きることを楽しむこと、ということで、お話ししてくださいました。この場には学生さんもいます。そしてまた、親御さんもいらっしゃいます。教職員の皆さまもいらっしゃいます。またいろいろな立場で、子どもと接しておられる方もいらっしゃいます。さて、本当に大阪から来ていただいた吉岡先生に、この機会にお聞きしたいことやお話ししたいこと、そしてまたお伝えしたいことがありましたら、挙手をお願いしたいと思います。しばらく待ちますので、先生のお話を思いながら、先生にお聞きしたいことを考えてみてください。

いかがですか。学生さんのなかで、何かありませんか。それでは、先生にご質問等がないようですので、ここで締めたいと思います。

先生には、子育てを通して、もう今つながっている多くの人々や子育ての意味、そして人間社会を生きる意味、そしてこの場にいます子どもたちと関わっている私たちが、忘れてはならない多くのご教授を先生からいただきました。本当にありがとうございました。

吉岡：どうもありがとうございました。とてもおとなしい学生さんが多く、難しかったかも分からないし、関西弁をずいぶん注意をしたつもりですが、やはり横行していたようでした。また関西に来られる機会があれば、大学の子どもセンターをのぞいていただけたら、ありがたいです。素晴らしい保育士さんになってくださることを願って終わらせていただきます。



## 『共創福祉』投稿規定

1. 投稿の資格は富山福祉短期大学の教職員に限る。ただし、編集委員会が必要と認めた場合にはこの限りではない。共著の場合、第1著者は原則として投稿資格を持つ者とする。
2. 投稿される論文は未発表のものに限る。ただし、学会において一部発表（投稿）した内容を含むか、学会で発表された複数の論文をまとめたものなどはその限りではない。
3. 論文種別は総説、原著論文、研究報告、実践報告であり、以下のように定義される。
  - 総説：研究や教育についての動向や解説、また評論などについてまとめたもの。
  - 原著論文：一研究としてまとまって終結しており、結論や新たな知見が示されている論文である。また論文内容の一部が学会等で発表（投稿）されていることが望ましい。
  - 研究報告：一研究の過程での部分的なまとまりで、実施方法、評価方法などの提案、また部分的な結果を示す論文である。
  - 実践報告：教育方法の改善や、研究を進める上での改善などに関する報告、また短期的な研究・教育の調査に関する報告などにあたる。
4. 査読は原則として編集委員会が指名した2名の査読者によりなされる。
5. 投稿原稿の採否決定および修正は査読の結果をもとに、編集委員会による審査を経て判断する。
6. 本誌に掲載された論文の著作権は富山福祉短期大学に帰属する。
7. 本規程の改正は編集委員会の議を経て、編集委員長決定により行なわれる。

附則 この規程は平成27年4月1日から施行される。

## 『共創福祉』 執筆要項

1. 原稿はWord、Excel、PowerPointソフトにより作成し、紙媒体と電子媒体を作成する。紙媒体はA4用紙に1行40字・40行とする。論文投稿時は紙媒体のみ、最終原稿提出時は紙媒体と電子媒体を提出する。表・図の挿入位置は、本文の右側の欄外に記入する。
2. 原稿の長さは原則として、本文・表・図を含めて20頁以内、刷り上がり時12頁以内とする。
3. 原著論文は原則として、はじめに（序または研究の背景など）、研究目的、研究方法、結果、考察、結論、謝辞、引用文献の順に構成する。
4. 原稿は以下の順に書くものとする。
  - [第1頁] 標題、所属名、著者名、和文要旨（500字程度）、和文キーワード（8語以内）。
  - [第2頁] 英文で、標題、著者名、所属名、Abstract（450ワード程度）、Keywords（8語以内）。
  - [第3頁以降]
    - 本文：章、節の番号は、第1章に当るものは、“1”、第1章第1節に当るものは、“1.1”というように着ける。また、式番号は、章ごとに（2.1）、（2.2）のようにして、式の左側に統一する。
    - 表：一枚の用紙に一つの表を書く。表の番号は論文中に現れる順に従って、表1、表2、…または、Table 1、Table 2のように書く。
    - 図：図の番号は論文中に現れる順に従って、図1、図2、…または、Fig. 1、Fig. 2、…のように書く。
5. 引用文献の書き方は、本文中で引用する順に、1)、2) というように項番を付ける。
  - 論文、研究報告等の場合  
著書名、表題、雑誌名（学会名）、巻、号、ページ（始—終）、発行年（発表年）
  - 雑誌の場合  
著書名、表題、雑誌名、巻、号、ページ（始—終）、発行年
  - 単行本などの場合  
著書名、書名、出版名、
  - 出版年編集書の中の一部の場合  
著者名、標題、編集書名（編集者名）、巻、ページ（始—終）、発行所名、発行年
6. 本文中での引用文献の引用は、文献1)、文献2) のように記述する。
7. 著者校正は原則として一回とする。その際、原著論文は、印刷上の誤り以外の字句や図版の訂正、挿入、削除等は原則として行わない。

## 投稿論文チェックリスト

\* 投稿する前に原稿を点検確認し、原稿を添付して提出して下さい。  
 下記項目に従っていない場合は、投稿を受理しないことがあります。

<input type="checkbox"/>	1. 原稿の内容はほかの出版物にすでに発表、あるいは投稿されていない
<input type="checkbox"/>	2. 筆頭著者は富山福祉短期大学教職員である
<input type="checkbox"/>	3. 希望する原稿の種類と原稿枚数を確認している
<input type="checkbox"/>	4. 原稿枚数は本文、文献、図表を含めて投稿規定の制限範囲内である
<input type="checkbox"/>	5. 倫理的配慮を要する研究はその内容が記載されている
<input type="checkbox"/>	6. 原稿はA4判横書きで1行40字、1ページ40行に記述している
<input type="checkbox"/>	7. 本文原稿右欄外に図、表、写真の挿入位置を示している。また執筆要項に記載されている通り、図・表のタイトル・説明・出典等が明記されている。
<input type="checkbox"/>	8. 本文中の文献の引用では著者名、発行年次を括弧表示している
<input type="checkbox"/>	9. 本文中の文献(著者、年次)と文献リスト内同様文献の著者、年次が一致している
<input type="checkbox"/>	10. 文献の情報は原典と相違ない
<input type="checkbox"/>	11. 文献の種類による記載方法は投稿規定に従っている
<input type="checkbox"/>	12. 主語は明確であり、2通りに解釈できる文章はない
<input type="checkbox"/>	13. 誤字、人名のスペルミス、文献記載の不備などの誤りはない
<input type="checkbox"/>	14. 句読点は「、」「。」で統一されている
<input type="checkbox"/>	15. 文献の共著者は3名まで表記している
<input type="checkbox"/>	16. 文献リストは著者名のアルファベット順、次いで刊行順に列記している
<input type="checkbox"/>	17. 和文要約500字程度、英文要約250語程度をつけている
<input type="checkbox"/>	18. 英文要約と和文要約の内容は合っている
<input type="checkbox"/>	19. 英文要約はnative checkを受けている チェック名・機関名
<input type="checkbox"/>	20. 投稿論文は次の順で並べ、一つのファイル(「論文ファイル」とする)にまとめている
<input type="checkbox"/>	1) 1頁目に和文の論文題目、著者名、所属、要約、和文キーワード、英文の論文題目、著者名、所属、要約、英文キーワードを記載する。
<input type="checkbox"/>	2) 2頁目に和文の論文題目、要約、和文キーワード、英文の論文題目、要約、英文キーワードを記載する。
<input type="checkbox"/>	3) 3頁目以降に本文、謝辞、引用文献、表(Table)、図(Figure)の順に記載する。
<input type="checkbox"/>	4) 表(Table)、図(Figure)は1頁につき1点とする。
<input type="checkbox"/>	5) 下余白中央に頁番号を挿入する。
<input type="checkbox"/>	6) 2頁目以降には、氏名、所属など投稿者を特定できる事項を記載しない。
<input type="checkbox"/>	7) 原著論文に関しては、序(あるいは問題など)、方法、結果、考察の見出しを立て構成されている。考察の後に必要であれば、結論を加えてもよい。
<input type="checkbox"/>	21. 第2頁および和文要約、英文要約は氏名、所属など投稿者が特定できるような事項が取り外してある

編集委員会

編集委員長 中野 慎夫

編集委員 山本 二郎 竹ノ山 圭二郎 河相 てる美  
得田 恵子 北山 由起子

---

共創福祉2015年 第10巻 第2号  
Synergetic Welfare Science

---

2015年（平成27年）11月16日発行

編集・発行 富山福祉短期大学  
〒939-0341 富山県射水市三ヶ579

印刷 (株)タニグチ印刷

# Synergetic Welfare Science

## Vol.10, No. 2 , 2015

### Contents

#### **Research Report**

- Change of college students' consciousness in inter-profession education practice  
– The analysis using text-mining method –  
..... *Yuko MATSUO, Harumi ARAKI, Atsushi USHIDA* 1
- Structure of learning in adult nursing practice at ICU  
..... *Terumi KAWAI, Tomoko NAKADA, Rie NAKAI* 9
- Students' learning from training in operating rooms as viewed by supervisors  
in charge of clinical training and their requests to students  
– An analysis of the results of a questionnaire –  
..... *Tomoko NAKADA, Terumi KAWAI* 21
- Reflection of teachers' guidance of students by using portfolios in practice nursing  
– A discussion through an analysis of communications between teachers –  
..... *Kazumi MIYAGI* 29
- Ethical issues for nursing care worker recognized through the training at the elderly facility  
..... *Eriko KOIDE, Miyoko SAKAI, Terumi KAWAI* 41
- Playing Tag to ensure the Physical Activity Level - Part 1 -  
..... *Kouhei OGAWA, Takahiro WADA* 47
- The 4th Synergetic Welfare Science Workshop, 28/2/2015**
- Educational Lecture**
- Thinking of meaning for growing child  
..... *Machiko YOSHIKAWA* 53